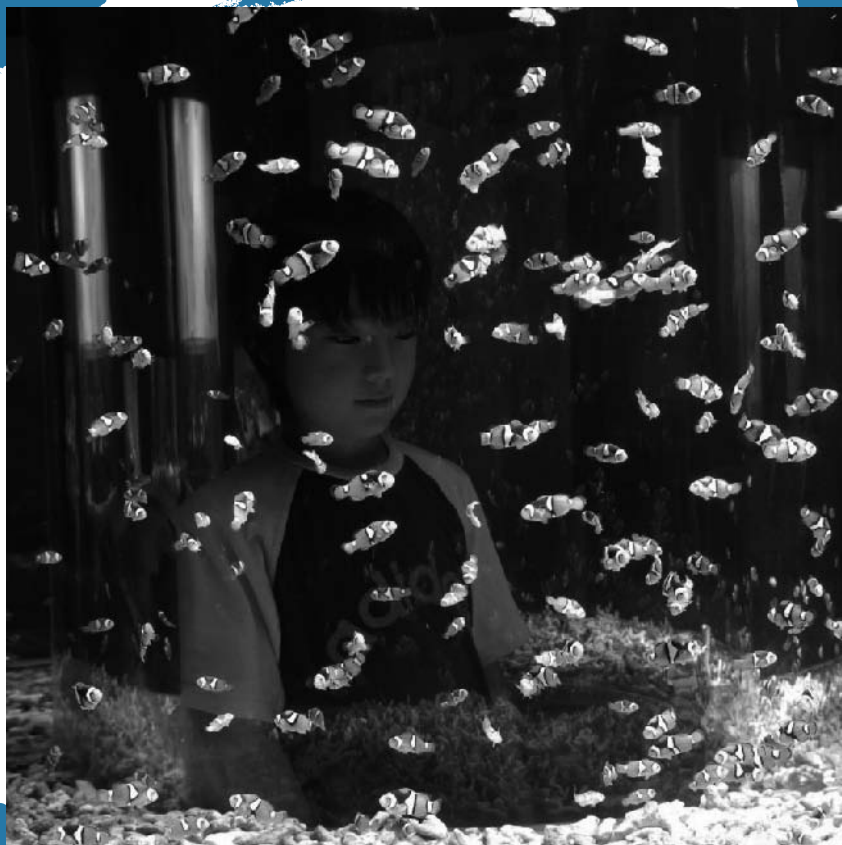


研究紀要

平成20年度

第31号



静岡県博物館協会

研究紀要

第31号 平成19年度

表紙 東海大学海洋科学博物館 クマノミ水族館リング水槽

目 次

2	駿河中部地域の中世石塔の出現と展開 ―静岡県下における中世石塔の研究 4―	松井一明 木村弘之 溝口彰啓
30	静岡近代美術年表稿 明治編(上)	立花義彰
40	文官石像	財団法人佐野美術館 館長 渡邊妙子
40	クマノミ水族館リング水槽	東海大学海洋科学博物館 学芸員 山田一幸
41	模型船「神奈川丸」	フェルケール博物館 館長 西野和豊
41	紺紙金銀字交書阿毘達磨俱舍論卷 第二十六(中尊寺経)	上原仏教美術館 学芸員 田島 整
42	朝鮮通信使展への道	常葉美術館 日比野秀男
48	【報告】藤枝市郷土博物館 第75回企画展『藤枝宿と朝鮮通信使』	藤枝市郷土博物館 海野一徳
52	事例紹介 ―「クリエイティブメッセージ」の取り組み―	静岡アートギャラリー学芸員 森谷紗世
54	静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程	

駿河中部地域の中世石塔の出現と展開－静岡県下における中世石塔の研究 4－

松井一明　木村弘之　溝口彰啓

1. はじめに

遠江中世石塔研究会では、平成 15年より遠江～駿河地域の中世石塔の実測調査を継続的に実施してきており、前号までに遠江～駿河西部全域の古式石塔の実測図による基礎資料の提示を行ってきた。遠江～駿河西部地域の古式石塔のもつ歴史的背景は単に供養塔としての性格だけでなく、政治・宗教の権力が集中する場の復元や、有力な寺社勢力により構築された物資流通の広域ネットワーク、あるいは宗教勢力同士の広域ネットワークの構造を知るうえでも有効な歴史資料であることを提示することができた（松井・木村・太田 2005 松井・木村・溝口 2006 松井・木村・溝口・篠ヶ谷・椿原 2007）。本報告では、前号でほとんど掲載できなかった駿河中部地域の古式石塔を中心について紹介するが、駿河西部地域で新たに確認できたものと、駿河中部地域の中世石塔を理解するうえで必要な山梨県南部町の主要な古式石塔も併せて報告する。なお、遠江中世石塔研究会が当初調査対象とした遠江～駿河中・西部地域の古式石塔の調査はほぼ完了したので本稿をもって最終報告としたいが、対象全域の古式石塔に係わる考察は与えられた紙面数の関係で触れられないので次号に譲りたい。

なお、古式石塔の時期とは鎌倉～室町期のものに限定し、部材を含め報告の対象としてきた。戦国期以降爆発的数量で製作される小型石塔を新式石塔と位置づけ実測図の作成を併せて行っているが、これについては江戸期の紀年銘資料を含めて古式石塔の特徴を残すものを選別して掲載した。

駿河中・西部地域での石塔の先行研究は前号でも取りあげたが、近年本間岳人氏により静岡市～島田市域の主要な石塔群の報告がなされた。中世石塔のデータが少ない地域での優れた研究報告であり、本号とも重複する資料を多数含み、いくつかの石塔については参考とすることができた（本間岳人 2006）。また、河合修氏により静岡市安養寺の土肥七騎の伝承のある石塔の紹介がなされ、その搬入経路の考察が行なわれた（河合修 2007）。

遠江中世石塔研究会が行った鬼岩寺の中世石塔群の調査については、前号でも報告した古式石塔ばかりではなく新式石塔も含めて実測図による一括報告と石材別のデータを提示した。このデータは新式石塔の部材でも 1000点を上回る膨大な数のデータを提示することができ、前号でも紹介した東光寺石塔群の報告・分析（松井・木村 2006）と共に駿河西部域の中世石塔の動向を報告することができた。さらに、古式石塔の中の褐色凝灰岩製大型五輪塔と律宗系五輪塔との関係についても考察することができた（藤枝市郷土博物館 2008）。今回参考にした山梨県南部町では畑大介氏により町史関連事業の中で中世石塔の悉皆調査を行い、刊

行された町史に実測図を提示し考察を試みている（畑大介 1999・2002）。前号でも紹介した富士川町域での稲垣甲子男氏が中世石塔の調査を行い主要な石塔を紹介しており、この成果を利用して調査を行い再実測した図を掲載することができた。（稲垣甲子男 1984）。

駿河中部域の古式石塔の具体的な紹介をする前に、本地域で確認できる古式石塔の石材について再度確認しておきたい。安山岩製石塔は遠江でも見られる箱根・伊豆東海岸北部産安山岩A～C類製石塔（以後箱根・東伊豆産とする）のほか、富士川西岸域に主体的に分布する安山岩D類製石塔が確認できた。すなわち、肉眼観察ではあるが色調や含まれる結晶の具合で4種類に識別できる。以下具体的な判断基準を述べておくと、安山岩A類＝白灰色、灰色ないし黒灰色の色調で白斑の結晶のみを含むもの、安山岩B類＝白灰色、灰色ないし黒灰色の色調で白斑だけでなく黒斑の結晶も含むもの、安山岩C類＝小豆色の色調で白斑だけでなく黒斑の結晶も含むもののほか、安山岩D類＝灰色ないし黒灰色の色調で白斑だけでなく黒斑の結晶を含むが、含まれる結晶の数は少なく大きさも小さいものが主体となり、明らかに安山岩A～C類とは異なる岩質のものが認識された。

岡部町・焼津市産の凝灰岩製石塔はすでに本間岳人氏により数種類に細分されてはいるが（本間岳人 2005）、実際の実測作業ではあまり細分すると個人の識別差により混乱した判定結果が得られるため、甚だ大雑把ではあるが概ね3者の認識が一致した基準で分類した。すなわち、緑色の色調を示し白色の結晶をほとんど含まない石材を緑色凝灰岩（焼津市浜当日産当目石）、淡緑色～褐色の色調で白色の粒子を顕著に含む石材を褐色凝灰岩（高草山南山腹産三輪石）の2種類に分類した。さらに、沼津市周辺産と思われる白斑と黒斑の結晶を含む軟質の白色凝灰岩（安山岩の一種か）製石塔も静岡市清見寺で確認でき、駿河中部地域の凝灰岩製石塔は3種類が存在していることが分かった。

駿河中・西部地域の砂岩製石塔には、遠江地域とは異なり伊勢湾岸や美濃方面から持ち込まれた河津石製の古式石塔や、東三河産砂岩と思われる新式石塔はない。当地域の砂岩製石塔は今のところ 15世紀後葉以降爆発的に生産される戦国期の小型石塔群の石材と同一のものがほとんどで古式石塔に属する例は少ない。暫定案として静岡県内の砂岩石材を肉眼識別できる範囲で分けると、駿河では鬼岩寺石と称せられた白色で粒子の細かなものを西駿河産砂岩（A類＝西駿河産砂岩）、遠江側では搬入品となるが豊川流域で産すると思われる東三河産の粒子が細かく凝灰岩質の砂岩となる（E類＝東三河産砂岩）、森町や掛川市日坂付

近で産する粒子が荒く石英粒子を顕著に含むものを中遠江産砂岩（B類＝森町産砂岩）、菊川上流～金谷周辺部で産すると思われる泥岩質で礫粒を顕著に含む東遠江産砂岩製石塔（C類＝東遠江産砂岩）、静清平野周辺部で産すると思われる砂質で礫粒を顕著に含む中駿河産砂岩製石塔（D類＝駿河中部産砂岩）が確認される。ただし、肉眼識別の限界もあり、C類は西駿河と日坂でも産する可能性がある。砂岩C類とD類についてはベースの石質が異なるため、識別は比較的容易である。なお、今回の調査で駿河中部域において砂岩 A・D製宝篋印塔に古式石塔と共通する特徴を見出されるものが多数確認できたので、比較資料として新式石塔段階の特徴をもつ砂岩 A・D製宝篋印塔も併せて掲載した。

静岡県では平成 19年度までに進められてきた市町村合併により行政区画が大きく変わってきているため、新たな市名に変更される行政区が多数生じている。前号までは旧市町村名を使って記述を行ってきているので、本稿でも旧市町村名を採用し記述した。例えば、静岡市の場合は旧静岡市、旧清水市、旧蒲原町の2市1町の合併による市のため文中では旧●●市・町と表現した。今回提示できた石塔の実測調査は、石塔が所在する各教育委員会と寺院関係者のご理解のもと、遠江中世石塔研究会の松井、木村、溝口、椿原の4名で行った。執筆については松井、木村、溝口の3名で各地区の分担をし、各項目の文末に文責を示し、考察の項目についても3名が協議して松井が文章化した。（松井一明）

2. 旧静岡市域

（1）石塔造立の歴史的景観

前号までは駿河中部地域は調査途中であったため、旧清水市分のなかの一部資料の提示に留めた。本項での報告は調査が終了した旧静岡市分の古式石塔を報告する。

旧静岡市域は古代・中世において駿河国府・守護所が所在する場所である。駿河国守護は元暦元年（ 1184）に武田信義が解任され、代わって北条時政が就任し以後鎌倉時代を通じて北条得宗家が代々の守護を歴任した。鎌倉幕府滅亡後は政権を掌握した足利尊氏により足利一門である今川範国が遠江・駿河両国の守護に任ぜられた。遠江国守護は斯波氏に譲る時期もあるが駿河国守護は今川氏直まで代々今川氏が務めた。

在地勢力としてはまず平安時代末期より立券される有力な荘園の幾つかが注目される。葦科川流域の旧安部郡の大半を域内とし、鳥羽天皇の皇女である八条院（後大覚寺統に相伝）に寄進された服織荘の荘域は、広大で有力な荘園であったと思われる。安倍川流域では上流域から鎌倉円覚寺領である浅服荘、中流域には熊野那智大社の安東荘、下流域にも熊野那智大社の長田荘が次々と現れ、駿河国府の周辺部には有力な荘園が展開していたと思われる。なかでも、服織荘には南北朝期には南朝方である狩野貞長

の拠点である安倍城が築城されたが、北朝方の今川氏により落城させられ以後狩野氏は今川方に降ったと思われる。今回の調査でも安倍城の麓で狩野貞長のものとされる供養塔が確認されているし、狩野貞長の菩提寺である結成寺でも工藤祐経あるいは狩野貞長の墓塔と称される古式石塔を含む供養塔が存在する。

寺院勢力としては平安中期に駿河国分寺が没落した後、古代山林寺院が有度山山中に久能寺が、後の服織荘の中心域の位置にあたる山中に建穂寺が建立され、中世段階でも前者が天台宗、後者は真言宗の密教系寺院としての隆盛を保っていた。ほかに中世段階では駿河七観音寺と呼ばれる有力な寺院があり、先にあげた久能寺と建穂寺のほか、有度山中に真言密教系寺院の平沢寺のほか、霊山寺、大窪寺（現徳願寺）、法明寺、慈悲寺（現増善寺）の七寺が列せられた（静岡県 1997）。このうち今回の調査で古式石塔が確認できたのは建穂寺、平沢寺、霊山寺、増善寺の四寺である。久能寺は江戸初期に徳川家康廟である東照宮が建立され大改修を受けているため、その折に石塔が失われたのであろう。法明寺については現在でも灰釉陶器や山茶碗の破片が採集できるので、現在の場所に古代山林寺院として建立され中世段階でも隆盛を誇っていたと思われるが、何故か古式石塔は残されていない。徳願寺も古代山林寺院の特徴を示す場所に位置しているが、こちらも古式石塔が確認できないのは不思議である。寺院の場所が新式石塔段階以降変わったのであろうか。

東海道沿の中世宿と寺院との関係から見ると、岡部宿から宇津ノ谷峠越で丸子宿に至ると入口付近に誓願寺があり、手越宿では泉秀寺、府中の瑞龍寺・松樹院、興津宿の清見寺・瑞雲院、由比宿の最明寺・西山寺、蒲原宿の龍雲寺などの宿場関連寺院から古式石塔が確認されている。焼津市花沢里から日本坂峠越では安養寺に土肥七騎墓と伝えられる褐色凝灰岩製宝篋印塔7基が存在するため、やはりこちらのルートも中世段階でも盛んに利用されていたことが古式石塔から見てもわかる。なお、河合修氏は安養寺石塔群の搬入ルートを日本坂峠越ではなくて、志太平野からの水運を考えているようである（河合修 2007）

また、安倍川上流域の松野阿弥陀堂や俵峰杉山氏墓など山奥部の山岳寺院や開発領主の墓地にも古式石塔が確認できた。前号でも遠江の山奥部には古式石塔が確認できないのに対して、駿河西部地域では大井川上流域に古式石塔が認められる点が指摘される。駿河中部地域の山奥にも今回の報告以外の古式石塔が未だ埋もれている可能性が指摘される。

（2）石塔の説明

本項では旧静岡市内で確認できた古式石塔を第1図 19～第4図 126に示した。また、前号で報告対象とした島田市域のものを第1図1～3、藤枝市・岡部町域のものを第1図4～ 18に補遺の形で掲載した。旧静岡市域の古式石塔は大きく見ると葦科川流域の第2図 38～第3図 66 安倍川流域の第3図 67～第4図 102 有度山

北西山麓の第4図 105～126にわけられる。まず補遺資料から説明を開始し、後に各地区に所在した古式石塔の説明を進めたい。

島田市菊川神社境内に隣接する墓地に、裏山から出土したと言われる緑色凝灰岩製大型五輪塔2基分の部材が確認できた（萩原・坂下 2007）。第1図1・2の部材はどちらも水輪のみに梵字が刻まれ、火輪の高さが減じ軒の反りが小さくなる比較的新しい特徴を示すのに対して、火輪の軒面が狭いこと、下面の反りが大きな特徴は古い要素を残していると見られ、14世紀前葉でも中葉に近い時期に該当させておきたい。3の中型五輪塔の水輪には古い形態の梵字は刻まれるものの、高さが減じ扁平化が進んだ形態を示すため、14世紀中葉以降に降る製品と考えたい。

藤枝市域のうち瀬戸川下流域西岸の東海道に近い東国寺にまともって古式石塔が確認できた。第1図4～6は全輪梵字が省略された褐色凝灰岩の同一個体と思われる中型五輪塔の部材で、火輪の上端部が広くなった新しい特徴を示すため15世紀中葉に該当させたい。7～11は褐色凝灰岩製宝篋印塔の部材で、寸法から見ると3個体程度にまとめられるかもしれない。7・8の笠は隅飾の窓枠は省略されるが露盤の二窓は刻まれており、9・10の基礎も二窓は省略されるが、比較的縦長の2段の段型が認められB2類の特徴を示しており14世紀末葉に該当する。11の反花座の花弁は省略が進んだものではないためB1類の特徴を示すもので、14世紀後葉に該当させておきたい。

12は瀬戸川上流域東岸の墓地内で確認され、駿河大納言供養塔と伝えられる砂岩A製大型宝篋印塔の部材である。相輪は沈線化しているが下請花に沈線で剣先状の花弁が刻まれ、笠は露盤の二窓は省略されるが隅飾は下端の枠がなく2箇所切れ込みを入れる関西型式の特徴を示すものである。類例としては島田市智満寺の褐色凝灰岩製大型宝篋印塔があげられる。智満寺宝篋印塔の笠も露盤の二窓はないが隅飾は駿河大納言塔と同じ関西型式を示し、基礎には省略が見られる関西型式の格座間中に蓮華文が刻まれ近江天台宗系寺社に多く見られる湖東式宝篋印塔からの影響を考えた（松井・木村・溝口・篠ヶ谷・椿原 2007）。よって、本大型宝篋印塔も全体の形態はわからないものの、智満寺塔と同じ湖東式影響の褐色凝灰岩製大型宝篋印塔を在地の砂岩で模倣し製作したものと考えられ、このような砂岩製大型宝篋印塔の類例は島田市虎御前塔でも確認できるので、15世紀後葉の時期をあてておきたい。

第1図 16～18は朝比奈川下流域の寺院である観音寺、大仲寺、誓願寺で確認した中型の褐色凝灰岩製宝篋印塔である。相輪は九輪が何れも沈線化しているが、上請花にも花弁が刻まれる20は古相を示すB1類、下請花のみに花弁が刻まれる19はB2類、笠については19・22・23の何れもが露盤の二窓は省略され軒上4段になるB3類、24の反花座は隅の花弁と下半の二窓が省略されたB2類に該当すると考えられる。製作年代は遠江～駿河西

部地域の紀年銘資料からB1類を14世紀後葉、B2類を14世紀末葉、B3類を15世紀前葉に該当させておきたい（松井・木村・溝口・篠ヶ谷・椿原 2007）。

宇津ノ谷峠を越えて丸子宿に近づく出土地不明の25の褐色凝灰岩製宝篋印塔の反花座が、近世東海道の傍らに小型五輪塔の部材と共に積まれていた。下半に二窓、花弁もほとんど省略のない古い特徴を示すためB1類に該当させておきたい。

日本坂峠越のルート上では、第1図 26～第2図 33に示した土肥七騎供養塔とされる褐色凝灰岩製宝篋印塔7基、砂岩D製宝篋印塔1基、砂岩A製大型一石五輪塔1基が安養寺墓地内に並べられている。全て同一個体に属するものか疑問であるが、寸法と形態、石材から判断すると、27の砂岩部分の相輪と笠、褐色凝灰岩製部分のうち基礎と反花座、28の塔身と基礎、29は基礎・反花座と笠・塔身はそれぞれ同一個体で、30は相輪～反花座、31は基礎を除く相輪～反花座、32は反花座を除く相輪～基礎、33は笠～反花座が同一個体となりそうで、安養寺には褐色凝灰岩製中型宝篋印塔が最低10基はあったと思われる。27の塔身～反花座はB1類、28の相輪と笠・反花座はB2類で塔身・基礎はB1類となり、29の基礎と反花座はB1類、30と31は相輪～反花座が全てB1類、32は相輪～基礎と34の相輪がB1類、32の反花座と33は笠～反花座はB2類に該当する。ちなみに、B1類の特徴をあげると相輪は沈線化した九輪ではあるが上下の請花に肉彫りの花弁が刻まれ、笠は軒上5段が基本で露盤には二窓が刻まれ隅飾にも関東型式の特徴である枠取が全周し、塔身には窓枠があり梵字の刻まれるものも含む。基礎は2段の段形で二窓が刻まれて、反花座は下半に二窓があり花弁も省略が進んでいないものがあてられる。B2類の特徴は相輪の上請花の花弁は失われ下請花の花弁も沈線化したものが現れ、笠は露盤の二窓は残るが隅飾の枠取は省略され軒上4段のものが現れる。さらに、塔身の窓枠は省略されたと共に、基礎の二窓も失われ、反花座も下半の二窓は省略され花弁も形骸化したものが現れる。B3類は露盤の二窓も省略され軒上3～4段と小型化が進み、塔身も無窓枠、基礎にも窓はなく、反花座の花弁は失われるものをB3類としている。製作時期は先にあげた年代をあてている。ただし、29の笠と塔身は類例のないものではあるが、笠と隅飾の面が一面化する27の笠のような新式石塔段階の砂岩製宝篋印塔に見られる特徴であるため、15世紀中葉に降る製品かもしれない。耕雲寺で確認できた35の九輪が消失した相輪は未製品ではなくて、B3類のなかでも最新段階の特徴になるものと考えられる。

26は元和2年（1616）の紀年銘がある縦長地輪になる典型的な江戸初期の大型一石五輪塔である。遠江地域でも確認できる反花座をもち、石材は砂岩A製品に類似するが、遠江からの搬入品である可能性も残されている。河合修氏が指摘したように海路（河合修 2007）で、遠江から運ばれてきた石塔であろうか。

第2図 36・37は手越宿の西側の丘陵上墓地内で確認できた注目される石塔部材である。36は中型の緑色凝灰岩製五輪塔の火輪で、梵字は省略されるが、高さが高く軒の反りも大きく上端の幅は狭く、下端の湾曲も大きい特徴を示すため、14世紀前葉により近い中葉の時期に該当するものである。37の褐色凝灰岩製宝篋印塔の基礎は、中型品でありながら3段の段形をもち、窓枠の幅の狭い二窓をもち、上端に塔身の受となる凹みをもつA類の中でも古い特徴を示すので、14世紀中葉に該当させてもよいであろう。14世紀前～中葉の凝灰岩製五輪塔と宝篋印塔の組合せをもつ寺院は、駿河中部では瑞雲院や平沢寺、梶原堂など数少ない資料で、何れも有力寺院に見られる組合せである。

第2図 38～40は今は小丘陵上の茶畑の中に寄せ集められてはいるが、藁科川西岸の丘領地の中世墓に造塔された褐色凝灰岩製宝篋印塔であろう。寸法や形態からから見ると4個体分以上はあり、相輪は下請花のみに沈線化したB2類、隅飾りだけでなく露盤の二窓が無くなった笠はB3類、二窓はないが2段の段形をもち縦長の基礎はB2類に該当するものである。

藁科川東岸には駿河国府の西北を守護する建徳寺があり、建徳寺の石塔は第3図 62・63は新式石塔の小型五輪塔と共に仮堂の裏に寄せ集められたもの、64～66は建徳神社裏山の墓地に存在するものである。建徳寺関連の石塔としては第2図 44～61に示した羽鳥地内の住宅地の一面に寄せ集められた石塔部材が注目される。また、建徳寺西側の谷奥に位置する竜津寺にも、41～43の古式石塔が確認できた。このうち一番古いのは46の緑色凝灰岩製大型五輪塔の水輪で、水鉢に再利用されて摩耗が著しいが月輪と梵字が刻まれる最古形態となる特徴を示しているので、14世紀前葉の古い段階に該当させたい。44は緑色凝灰岩製五輪塔の火輪で梵字は省略されるが、軒面が狭く高さも高く上端幅も狭い古い特徴を示し14世紀中葉、その他の中型の五輪塔は緑色凝灰岩製製も含むが、火輪の形態は上端が広くなり、地輪も扁平化が進むもので14世紀後葉以降に該当する部材としておきたい。

褐色凝灰岩製宝篋印塔のうち42の相輪は、上請花の花弁は省略されるが九輪は沈線化していないもので、下請花も別造となるA類の相輪で14世紀中葉に近い時期と考えたい。49・63は下請花に沈線化した花弁をもつB2類、66の笠は隅飾りに枠があるB1類、50～53は隅飾りの枠は省略されるが軒上5段あり、露盤の二窓も刻まれるためB2類、塔身も梵字は刻まれるが窓枠が省略される54・55のB2・3類が確認できる。また、残欠であるが、64は駿河中部地域では珍しい安山岩A製宝篋印塔の相輪が確認できた。

羽鳥庚申塔や建徳寺のなかには57～60・63の砂岩D製宝篋印塔がまともであり、58・59・63の2段の段形で二窓をもつものと、二窓が省略された57が存在している。何れも形態から見ると前者が褐色凝灰岩製宝篋印塔のB1類、後者がB2・3類の模倣品であると想定される。形態からは時期差を求めることは可能であるが、

模倣品ならば同時に製作された可能性も考えられるため、暫定ながらどちらも褐色凝灰岩製宝篋印塔の製作が終了した後の15世紀中葉以降の時期に該当させておきたい。なお、61の反花座の形態は県内では類例のないものではあるが、古い形態の花弁をもち多角形となる反花座は、無縫塔の部材とも見られる。石材を見ると砂岩D製品であるため、宝篋印塔と同じく15世紀中葉前後に降る石塔の部材と考えておきたい。

第3図 67～74の瑞龍寺旭姫墓として集積されたものと、75・76の松樹院の古式石塔は、駿河国府に最も近い位置で確認できた古式石塔として注目される。とくに前者は古い組合せを含むわめて注目される石塔の部材である。68の緑色凝灰岩製大型五輪塔の地輪は、形態が横長で、羽鳥庚申塔で確認できた月輪と梵字が刻まれたものと共に最古の特徴を示すもので、14世紀前葉でも古い段階に該当させておきたい。

褐色凝灰岩製宝篋印塔の中にも74のように、軒上6段以上、窓枠のない小さな隅飾をもち、露盤が別造となる笠は14世紀中葉に近いA類の特徴をもつものがある。71～73は隅飾の枠取はないが、軒上5段の露盤に二窓をもつB2類、75は露盤の二窓も省略されたB3類、二窓が省略された76の基礎はB2・3類の褐色凝灰岩製宝篋印塔の部材である。

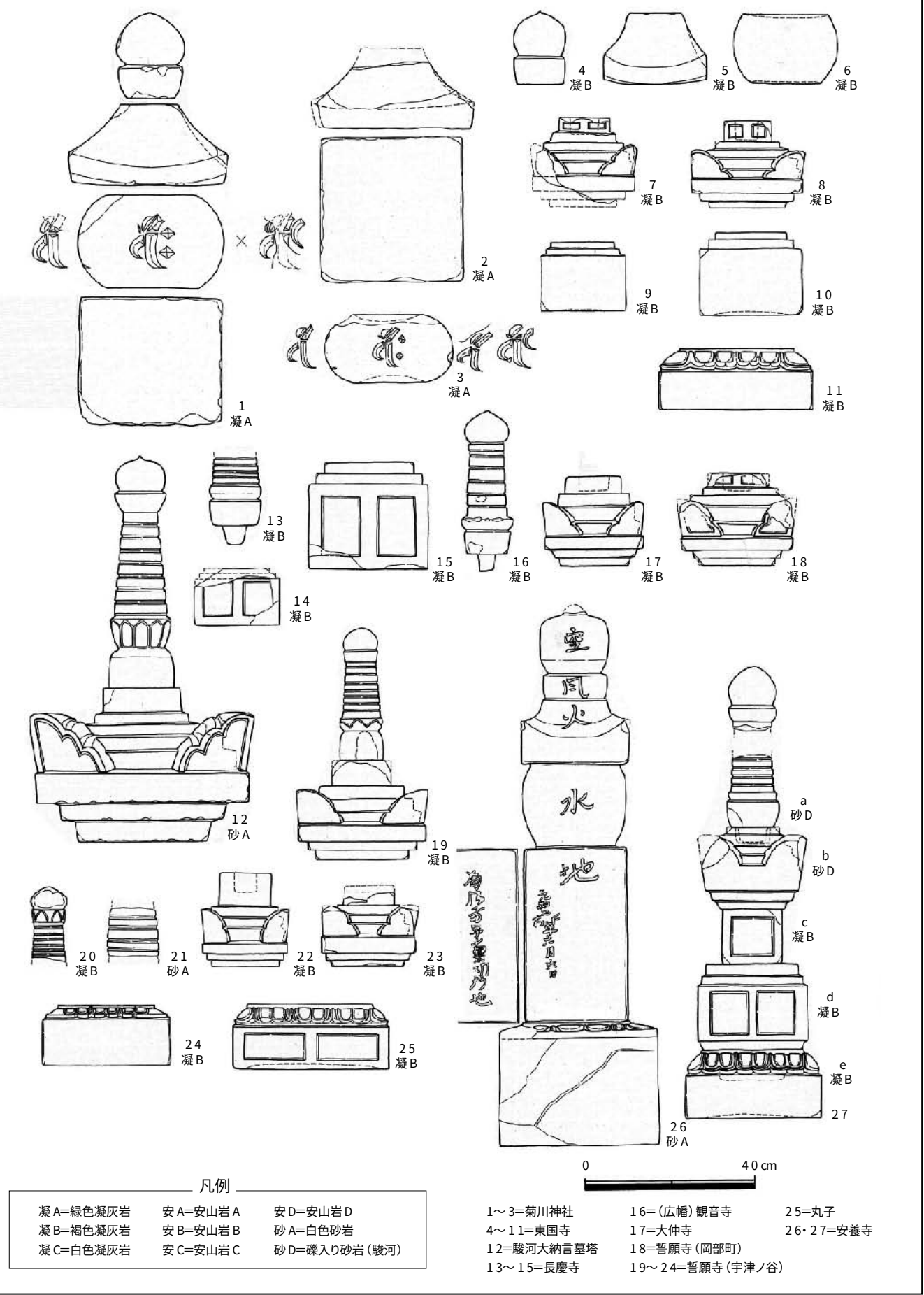
70は駿河中部でも東部地域である富士川西岸域に分布の中心をもつ安山岩D製宝篋印塔の笠で、露盤に二窓があり隅飾にも枠取があり、軒面と一体化したのではないため、関東型式を示す安山岩A～C製宝篋印塔、あるいはそれを模倣した褐色凝灰岩製宝篋印塔B1類の模倣品と考えられる特徴を示している。この笠は関西型式でも古い形態を示す安山岩D製宝篋印塔の中では最古のA1類の部材と分類しておく。製作年代は後項で示される。

69は砂岩D製宝篋印塔の笠で露盤二窓は省略されるが、隅飾には沈線による遠江中部型のΣ型の沈線による枠取が確認できる。遠江中部型宝篋印塔を模倣した、15世紀後葉に該当する製品であろうか。

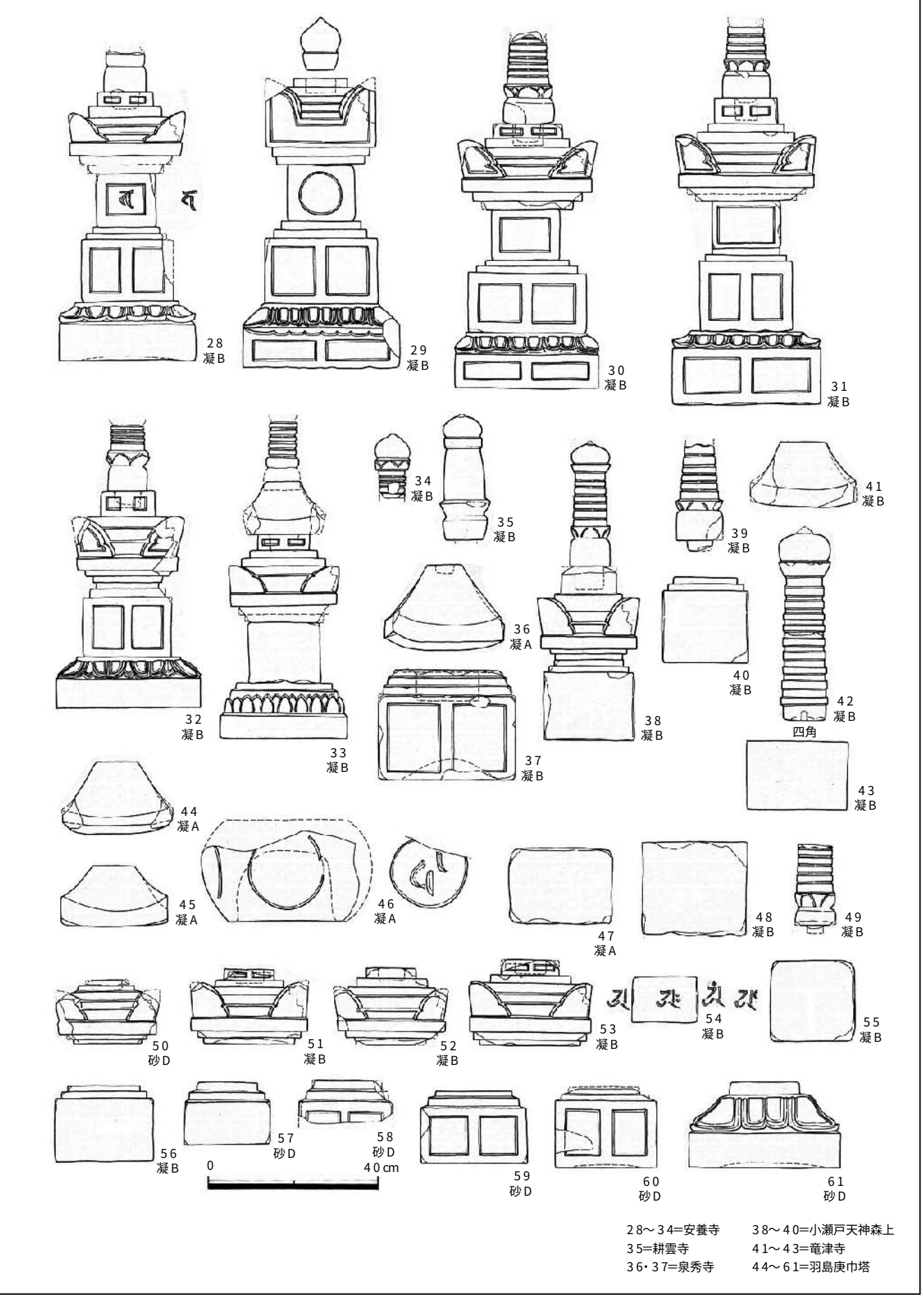
67は正保5年（1648）の紀年銘がある超縦長地輪の江戸時代前期の一石五輪塔で、中央に禪定門とする男性の戒名も刻まれている。26のような17世紀初頭の製品と比較すると、空風輪や地輪の境が形骸化するなど明らかに退化型式の特徴が看守される。なお、江戸時代前期までの一石五輪塔には年号と戒名が刻まれないものも多数存在するが、刻まれる例も増加するのに対して、遠江～駿河中・西部域において新式石塔（戦国期）段階の一石五輪塔に戒名が刻まれる例はないため、一石五輪塔の用途が供養塔から墓石への変化があったと考えたい。

安倍川流域では駿河七観音寺に列せられた第3図 77～80の増善寺、88の法明寺、当地に縁の深い狩野貞長の供養塔である81と、狩野貞長の菩提寺である結成寺の工藤祐経墓塔群である82～87の資料が提示できた。増善寺には江戸初期の五輪塔で

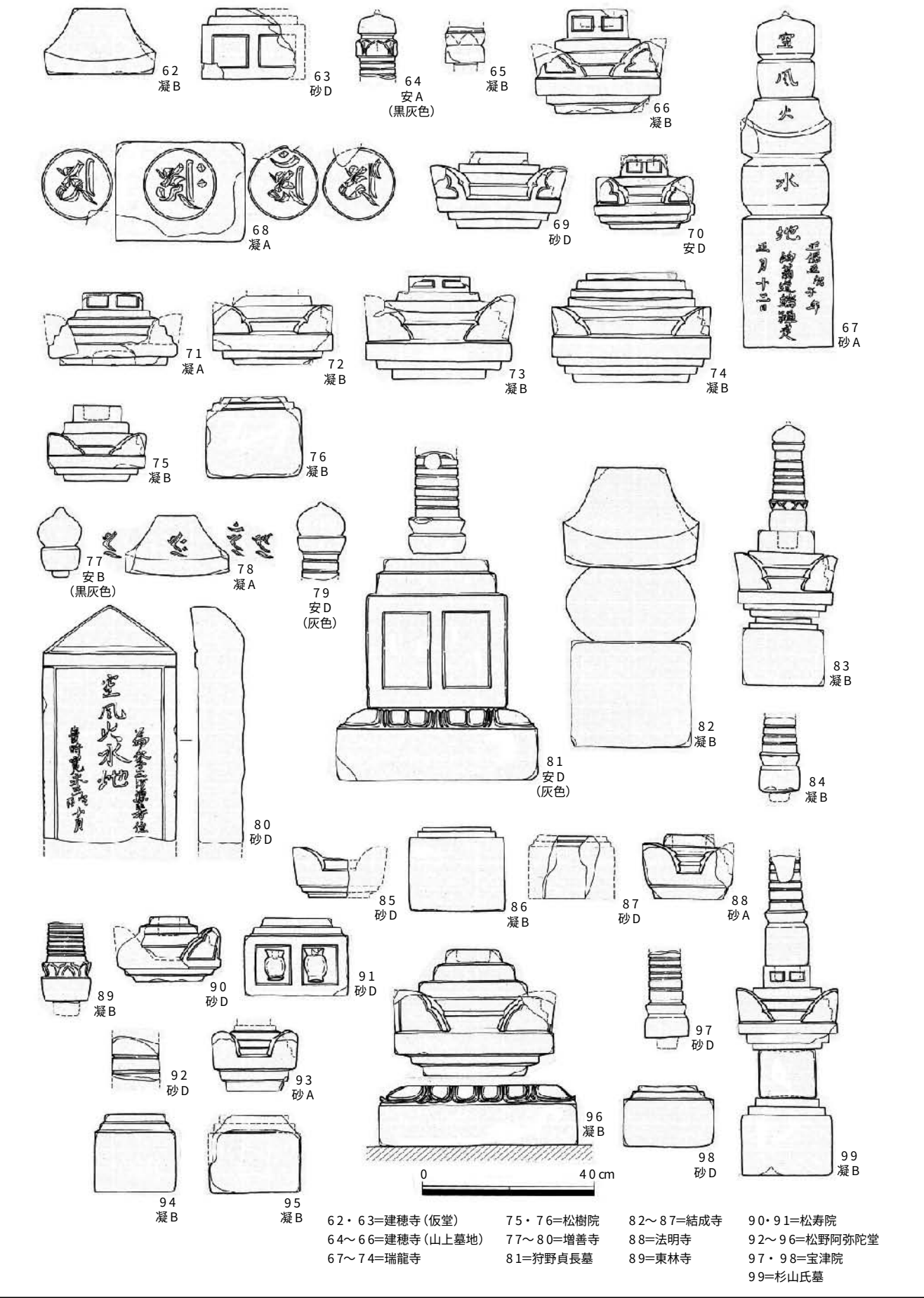
第1図 駿河中・西部の石塔実測図1



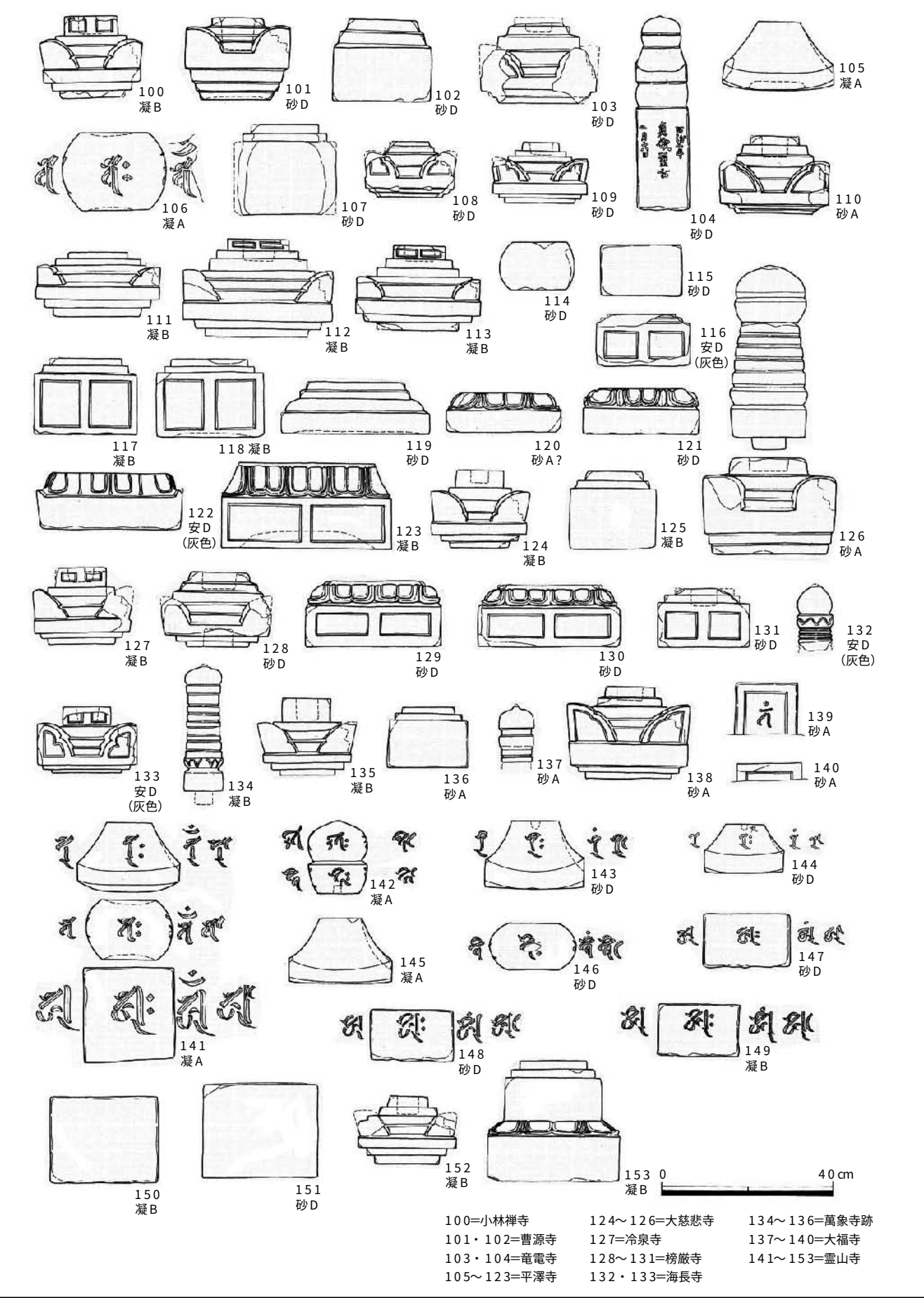
第2図 駿河中・西部の石塔実測図2



第3図 駿河中・西部の石塔実測図3



第4図 駿河中・西部の石塔実測図4



ある今川氏親供養塔が存在し、今川氏親の菩提寺としても有名である。古式石塔としては、78は小型品ながら梵字が刻まれた緑色凝灰岩製五輪塔の火輪が確認できた、高さが減じた新しい形態を示すので 14世紀中葉以降になるもの、77の小型の安山岩B製五輪塔の空風輪は退化型式ではない整った形をしているが、梵字は刻まれず小型化が進んだもので 15世紀前葉以降に該当すると考えられる。

79の安山岩D製宝篋印塔の相輪は上請花の花弁が省略されるため、14世紀末葉～ 15世紀前葉に該当するものであろう。80は頭部の形を見ると舟形というより段形をなすため、武蔵型板碑の形態を模倣した墓標と考えられる。寛永3年（1626）の紀年銘が入る当地域では珍しいものであるが、石材は地元の駿河中部産と思われる砂岩D製品であるため、古式石塔ではないがここで紹介することにした。なお、武蔵型板碑は遠江～駿河地域では鬼岩寺に搬入品として1点存在するのみである（藤枝市郷土博物館 2008）ため、増善寺あるいは駿河中部地域の何れかの寺院にもモデルとした搬入品である武蔵型板碑があったのだろうか。81は駿河中部地域では珍しい安山岩D製大型宝篋印塔である。笠と塔身は最近の後補であるが、寸法から見て相輪と基礎、反花座は同一個体に属するものである。相輪は九輪が沈線化し、下請花に花弁は刻まれないため最古形態とはならない。基礎は縦長の形態で 2段の段形となり狭い杵の二窓が刻まれ、反花座には下半の二窓はないが花弁は肉彫りされており、相輪に問題はあるがA 1類の大型品であると考えたい。製作時期は反花座の省略具合から見ると A 1類のなかで新しいもので 14世紀末葉に該当させておきたい。安山岩D製石塔の分布域は安倍川東岸域までで、藁科川流域では新式石塔段階の小型五輪塔も含めても1点も確認されていない。

82は寸法、石材から見て空風輪は欠くが同一個体に属する褐色凝灰岩製中型五輪塔である。全輪梵字はなく、火輪の上幅が広くなり、水輪も扁平化が見られるため、古式石塔段階の褐色凝灰岩製五輪塔としては最新段階の 15世紀前葉に該当させておきたい。褐色凝灰岩製宝篋印塔は 83の相輪は下請花に肉彫りの花弁が刻まれるB2類、84の相輪は下請花の花弁が省略されるB 3類、83の笠は軒上 4段で露盤二窓と隅飾りの杵取りは省略されているB3類、83・ 86の基礎は二窓が省略されたB2・3類に該当する。85・ 88の砂岩A・D製宝篋印塔の笠は軒面と隅飾面が同一となる新しい形態で、84の二窓が省略された基礎とともに新式石塔段階の 15世紀後葉以降に該当するものであろう。

冒頭でも述べたように駿河七観音寺である法明寺以北となる安倍川上流域の山中にも、第 3図 92～ 96の松野阿弥陀堂、97・ 98の宝津院、99の杉山氏墓塔群、第 4図 100の小林禪寺のほか、安倍川の支流とはなるが、中河内川流域には朝倉氏の菩提寺とされる曹源寺にも 101・ 102の中世石塔が点々と分布していることを確認した。96の褐色凝灰岩製大型宝篋印塔の部材である笠は、

露盤の二窓は省略されるが隅飾は下端の杵取のない関西型式の特徴を示し、反花座も二窓が省略され花弁に形骸化が認められる。褐色凝灰岩製大型宝篋印塔で関西型式の類品は知らないが、特徴の省略具合からはB2類に並行すると見られ、14世紀末葉に該当させておきたい。97・ 99は下請花の省略された相輪はB3類、99・ 100の笠は軒上4段で露盤に二窓が刻まれるが隅飾の杵取がないためB2類、99の塔身は窓枠が省略されたB2・3類に、94・ 95・ 99の基礎は二窓が省略されたB2・3類に分類できるものである。ただし、99は寸法や石質から見ると同一個体になると思われ、相輪以外はB2類の特徴をもつため、下請花の花弁が省略される相輪がB2類に一部含まれる可能性もでてきた。

92・ 93・ 98・ 101は 88に類した特徴を示す新式石塔段階の砂岩A・D製宝篋印塔の部材で、古式石塔としての特徴はまったく見られない。製作時期は 15世紀後葉以降の新式石塔段階に該当させておきたい。

駿河中部地域では霊山となる竜爪山より派生する丘陵の南麓にも 89は麻機地区の東林寺、90・ 91は瀬名氏真墓地内、静清平野の中央に位置する独立丘である谷津山の北東山麓に位置し、寿桂尼の菩提寺として有名な竜雲寺に所在する 103・ 104の石塔が確認できた。89は褐色凝灰岩製の宝篋印塔の相輪で、下請花に沈線で子葉が表現された花弁が刻まれた珍しい文様をもつが、B 2類に該当させておきたい。90・ 91は同一個体に属する砂岩D岩製宝篋印塔の部材で、90の笠は 103と同形態で軒面と隅飾面が一面化した新しい形態となるのに対して、関東型式の宝篋印塔に見られる杵取が刻まれ、基礎にも二窓が刻まれその内の1面に花立が肉彫りされ、実際に花が生けられるように花立に小穴が穿たれている念のいったものである。他に類を見ない特殊品と思われるが、時期は 15世紀前葉以前に遡るものではないだろう。

104の一石五輪塔は寿桂尼墓の背後に並べられた何れも長足の地輪となる3基の一石五輪塔の内の 1点で、万治2年（1659）の紀年銘のあるもののみ紹介する。空風輪～地輪の境が形骸化し、空風輪は沈線化しているために、紀年銘どおり 17世紀中葉の形態を示す砂岩D製一石五輪塔の基準資料となる。地輪中央に童女の戒名が刻まれているため、女兒の墓石であったと思われる。

最後に有度山西北山麓の寺院に所在する石塔の説明をし、旧静岡市分の石塔の説明を結びとしたい。第 4図 105～ 123は駿河七観音寺に列せられた平沢寺、124～ 126は今川家と縁の深い大慈悲院に所在する石塔である。平沢寺では 105・ 106の緑色凝灰岩製中型五輪塔の部材が確認できた。105の火輪は無梵字ではあるが上端面が狭く、軒面も狭い古い形態を示すもので、106の高さが高く梵字が刻まれた水輪とおそらく同一個体で、14世紀中葉に該当するものである。

この五輪塔と 111～ 113・ 117・ 118・ 123の褐色凝灰岩製大・中型宝篋印塔A類との組合せが確認できた。ただし、123の反花座

の花弁はかなり縦長となり 14世紀後葉でも末葉に近い時期となるもので、寸法から見ると 112と同一個体となるものであろう。なお、褐色凝灰製宝篋印塔A類のなかでは、111の露盤が別造となる笠と、二窓の杵幅の狭い 117の基礎が、14世紀中葉に近い時期の特徴を示している。116・ 122は安山岩D製宝篋印塔の部材で有度山麓では西限となる資料であり、この石材の石塔は新式段階を含めても藁科川以西では確認できていない。116の基礎は2段の段形で二窓は刻まれるが、形態は扁平化しているためA3類に該当させ、122の反花座も形骸化した花弁がまだ刻まれているためA2類とし、前者を 15世紀中葉、後者を 14世紀末葉～ 15世紀前葉に該当させておきたい。

平沢寺で注目されるのは、砂岩A・D製品でありながら 108～ 110・ 120・ 121のように、褐色凝灰製宝篋印塔を忠実に模倣し省略化がほとんど見られない古式石塔段階の宝篋印塔ともいって良い部材が確認できたことである。反花座に二窓が刻まれないものがあるため、褐色凝灰岩製B1・2類の宝篋印塔を忠実に模倣した初期製品と思われ、後述する旧清水市側の有度山北東山麓の寺院でも確認できる。こうした石塔の部材を丹念に見出し製作年代を決定することが、駿河中・西部産砂岩A・D製品の製作開始年代を知るうえでの手掛となることは明らかで、今後の検討課題としておきたい。これに対して 126の大慈悲院で確認された砂岩A製宝篋印塔は大型品でありながら、相輪と笠を見ても明らかに 15世紀後葉の新式石塔段階の特徴を示すものであり、遠江地域の袋井市油山寺や掛川市久延寺で確認できた砂岩B製大型宝篋印塔の出現、及び新式石塔の出現時期と連動するものであろう。なお、124・ 125は褐色凝灰岩製宝篋印塔B3類に該当するものである。

(3) 小 結

旧静岡市内は中世段階においても駿河国府の所在地である府中宿を中心とする政治的求心力のある場所ではあるが、前号では駿河国府付近で良質な古式石塔が確認できなかったことを指摘した。しかしながら、今回報告できた瑞龍寺旭姫墓の緑色凝灰製大型五輪塔是最古形態を示す 14世紀前葉のもので、駿河地域では質の高い有力寺院に多く見られる 14世紀中～後葉に該当する褐色凝灰製宝篋印塔A類とのセツト関係を確認することができた意義は大きい。瑞龍寺の古式石塔は鎌倉時代では北条得宗家、南北朝期では足利一門に連なる今川家が代々守護を務めていた駿河守護所に関わる有力寺院に造塔され古式石塔として相応しいものである。また、この緑色凝灰製五輪塔のうちやや時代は降る 14世紀中葉の製品と見られるものと、褐色凝灰製宝篋印塔A類のセツト関係が確認できた寺院は、泉秀寺、建穂寺周辺、平沢寺である。建穂寺は駿河国府域では久能寺と並び古代からの山林寺院で、今は廃寺の憂目を見てはいはるが、中世段階では隆盛を極めた寺院である（松井・長谷川 2003）。平沢寺は中世段階でも駿河七観音寺に列せられる有力寺院であるとともに、久能寺とも関

係した山岳寺院であった。平沢寺の資料から久能寺に存在したであろう古式石塔の様相の片鱗を読み取ることができたのではなかろうか。

泉秀寺は手越宿に関係した有力寺院と思われ、同様に丸子宿に関係した周辺地にも古手の褐色凝灰製宝篋印塔の部材が散見できた。瀬名川宿では瀬名氏にかかわる菩提寺の松樹院で特殊な砂岩製宝篋印塔が確認できた。また、今回補遺資料として報告できた今は廃寺となった菊川宿の関連寺院に属した中世墓に造塔された 14世紀中葉に遡りうる緑色凝灰製大型五輪塔2基が菊川神社隣接墓地内に所在することが判明し、東海道の近い藤枝市東国寺でも古式石塔がまとまって確認できた。

褐色凝灰製宝篋印塔B類は旧静岡市内にも広く分布していることが分かった。とくに、安養寺の土肥七騎墓の褐色凝灰製宝篋印塔は特殊な形態も含むが、かなりの部材が同一個体からなるもので、B類の変遷を系統だてて追及することのできる石塔群である。また、俵峰の杉山氏墓塔の褐色凝灰製宝篋印塔は、主にB2類の特徴をなす同一個体と認識できたが、下請花の花弁が省略されるB3類の特徴をもつ相輪が組合せとなっているため、B1類～B3類への変遷が急激ではなくて暫時の変化であった様相を示すものとして注目される。これはB2類段階でも二窓をもつ基礎と二窓が省略される基礎が併存する可能性も現在のところ視野に入れながら検討課題としておきたい。

安山岩製石塔のうち箱根・東伊豆産安山岩製石塔は、僅かに増善寺で小型五輪塔火輪1点、建穂寺で宝篋印塔相輪の残欠が1点の合計2点が確認できたのみで、天台色の強いとされる久能寺と関係した平沢寺にも箱根・東伊豆産安山岩製石塔は確認できなかった。箱根・東伊豆産安山岩製石塔は遠江中・西部地域では湊や宿場を支配した有力寺院に、遠江中・東部地域では寺宗の有力寺院に、駿河西部では天台宗の有力寺院に顕著に分布することが確認されているのに対して、駿河中部地域ではごく小数例の確認に留まる結果となった。増善寺は今川氏親により曹洞宗の寺院として創建されたが、前身寺院としては駿河七観音寺に列せられた天台宗の慈悲寺が考えられており、今回確認できた古式石塔は前身寺院の遺品とも考えられる。よって、この地区を含めても富士川以西では前号報告の旧清水市梶原堂、本号報告の由比町最明寺などで 4例のみが確認されたにすぎない。ともかく、今川氏や駿河中部の天台宗系寺院と東伊豆との関係は箱根・東伊豆産安山岩製石塔を見る限り希薄と言わざるをえない。

これに対して、富士川西岸域に分布の中心のある安山岩D製宝篋印塔は、安倍川東岸及び有度山北西山麓にまで分布域を広げていることが今回の調査で判明した。安山岩D製石塔のなかで形態から見て古式石塔段階に遡る五輪塔はなく、宝篋印塔のみに限られ、新式石塔段階になって初めて小型五輪塔が量産されることを確認した。つまり、宝篋印塔から小型五輪塔へ比較的奇麗に変

遷することが読み取れる石材の石塔なのであろう。安山岩D製宝篋印塔の詳しい分類と変遷及び製作年代は後項に譲るが、笠や反花座の特徴から見て基本的には褐色凝灰製宝篋印塔B類の模倣品と考えられるが、箱根・東伊豆産安山岩製宝篋印塔の影響も見られる。また、関西型式の宝篋印塔の影響を受けたものもあるようである。

遠江地域の山間部では全く古式石塔の分布はないが、駿河西部地域では大井川上流域の山間部とともに、安倍川上流域にも褐色凝灰岩製宝篋印塔を中心とする古式石塔の分布が確認できた。駿河中部での中世段階の開発領主が関わる山間部の開発とそれに伴う物資の流通量が遠江よりも増加したため、有力な寺院勢力が山間部にも定着した結果であろうか、今後の検討課題である。そのなかで、松野阿弥陀堂については現在でも木製の阿弥陀仏を中心とする藤原期の仏像群（市指定）が残され、古代山林寺院としてもかなり有力な寺院であったと推察される。中世段階でも他に類を見ない関西型式となる褐色凝灰製大型宝篋印塔の部材も今回確認することができ、久能寺や建徳寺、平沢寺に匹敵する山岳寺院が埋もれていたことを石塔からも証明できたと思われる。

最後に補遺資料に掲げた駿河大納言墓塔に触れて小結を終わらせたい。この石塔は智満寺の緑色凝灰製大型宝篋印塔と共に、近江の湖東地域に分布する湖東式と称される特徴的な宝篋印塔（瀬川欣一 2001）との類似点があげられる。駿河大納言墓塔でも隅飾の2箇所切込は確認できるが、基礎文様については分からないので確実なところは言えない。相輪の請花の花弁は智満寺塔と共通するが、湖東式宝篋印塔とは違う特徴をもち在地的要素も多分に見られるので、湖東式と比較すると時代は降るのであろう。この石塔に関わる周辺寺院の状況は分からないが、智満寺塔を模倣した天台色の強い石塔であることは指摘できるため、天台宗の山岳寺院が瀬戸川流域の山中にも存在していた可能性がでてきたことを指摘しておきたい。

（木村弘之・松井一明）

2. 旧清水市・由比町・旧蒲原町・富士川町・山梨県旧富沢町・旧南部町

（1）石塔造立の歴史的背景

ここでは旧清水市、由比町、旧蒲原町、富士川町の富士川以西の駿河中部地域と、富士川街道（河内路＝身延道）を通じて駿河から甲斐へと至るルート上に位置する山梨県南部地域の旧富沢町と旧南部町に所在する古式石塔について説明を行いたい。なお、現在の行政区としては旧清水市と旧蒲原町は静岡市と合併し、間もなく由比町も静岡市に合併する予定である。山梨県側でも旧富沢町と旧南部町が合併し、現在は南部町となっている。

古来より旧清水市街地の中心に近い場所である巴川河口に江尻津が開かれ、中世段階には駿河湾から太平洋に通じる海上交

易の拠点湊として栄えていたとされる。江尻津は平安時代末期以降、藤原南家為景流の藤原維清を祖とする入江氏が、周辺部に展開する荘園である江尻荘と共に支配していたことが知られている。入江氏は鎌倉期になると駿河国守護となる北条得宗家と係わりをもっていたが、南北朝期以降は北条得宗家に代わって駿河国守護を務める今川氏が江尻津の直接支配を進めるようになる。入江氏の同族に興津氏、蒲原氏、岡部氏、渋川氏、矢部氏、吉川氏、船越氏等があげられ、江尻荘周辺や東海道筋に勢力を張っていた。彼らは南北朝期になると今川氏の支配が江尻津や江尻荘に浸透すると、今川家の被官となり、当地域での影響力を保ち続けたと推察される。

なお、当地区でも政治・経済的求心力をもたらし荘園は、江尻荘北方に熊野那智大社の北安東荘と、同じく庵原地区では伊勢神宮の高部御厨、蒲原宿周辺では蒲原荘などが立券されていた。また、東海道筋の清見寺付近では、関東から府中への入口である清見関が置かれたという。

今回の調査で明らかになったように入江氏の本拠地に近い江尻津や巴川河口付近の寺院には目立った中世石塔は認められず、彼らの宗教的な営みの具体像を知ることは困難ではある。しかしながら、有度山（日本平）北東山麓や古代以来の有力な霊山である竜爪山から南に延びたいくつかの支丘陵の麓に点在する寺院には比較的多くの古式石塔が残されており、これらの石塔からその一端を窺い知ることは可能であろう。とくに、駿河七観音寺に列せられた霊山寺、前号で報告した梶原堂や、庵原氏に関係した一乗寺などに良好な古式石塔が確認された。また、有度山北東山麓の寺院群は、前項で触れた平沢寺と共に久能寺を中心として宗教ネットワークで結ばれていたであろう。

本項で対象とする地域における古式石塔の分布の特徴の一つとして、東海道や河内道を始めた街道沿の陸運による物資流通の役を担った宿場、またそれと関係をもつと共に海運を担った湊に関係した寺院の存在が大きいことがあげられる。中世段階の東海道のルート上に江尻宿から興津宿、由比（湯井）宿、蒲原宿が営まれ富士川以東に至るが、途中には佐田（薩埵）峠などの難所も存在していた。古代の律令体制の崩壊過程が進むにつれて、中世段階になると人々のある程度の自由な東西交通と物資流通が盛んとなり、これら物資流通のシステムを支えたであろう中世宿場町あるいは湊に関わった寺院が大きな地位を占めるようになっていった。これらの宿や湊から資金を得た裕福な寺院に、古式石塔が多数造塔されたと思われる。もちろん各宿場においては、興津宿では入江氏の一族である興津氏、由比宿では由比氏、蒲原宿に蒲原氏が勢力を張っており、入江氏の同族ネットワークによって江尻宿～富士川河口までの支配が進められ、円滑な物資流通を裏付けた治安を保証していたと考えられる。また北条得宗家が滅んだ南北朝期以降今川氏による駿河国の支配が府中から東に向か

って着々と進められるのに伴って、これら入江氏とその一族も被官に組込まれることにより、今まで通りの同族ネットワークを維持したと思われる（静岡県教育委員会 1994）。ただし、江尻宿とその周辺部に所在する拠点寺院には全く古式石塔が残されていないのは、この地域の寺院が砂丘や低地の巴川の自然堤防上に立地していたため、中世段階でも幾度となく発生した駿河湾の大地震による津波により壊滅的な打撃を受け、その都度中世石塔も失われたのではないかと思われる。これは、遠江地域の石塔調査で判明したように、遠州灘沿岸部の湊に属する拠点的な寺院でも古式石塔がほとんど残されていない理由と同じであろう。

駿河から甲斐へと向かう街道の一つである河内道（身延道）は、東海道から甲州万沢を経て甲府へ向かう街道で、近世には日蓮宗の総本山である身延山久遠寺へ至る参道としても整備された。富士川を利用した河川水運とも併せ、中世から現在に至るまで内陸部へ人と物資を運搬するための主要街道としてその沿線の宿場町は賑わったという。東海道から万沢に至る道筋は三つのルートが想定されている。すなわち、興津川沿の興津宿から小島・穴原を経て万沢に至る興津筋、由比川沿に由比宿から内房を経て万沢に至る筋（以後由比筋と称したい）、富士川西岸沿の丘陵上に岩淵から松野と内房から万沢に至る岩淵筋の三筋であったという（静岡県教育委員会 1998）。今回の調査では興津筋と岩淵筋沿に所在する寺院や小堂で比較的多くまとまった古式石塔が確認されたので、古式石塔の分布からも中世段階においてどの筋が頻繁に利用されていたのかを探索する手掛を得た。個別に見ると興津筋では近世でも東海道五十三次の宿場として栄えた興津宿を基点として、穴原周辺部に中継地点があり、岩淵筋では松野氏や荻氏などの在地の有力武士が本拠を構えたであろう松野地区に中継地点を、古式石塔の集中頻度から求めることができた。よって、内陸部における流通拠点（宿場）の復元、有力支配者層の居館とそれに係わる寺院の復元に、古式石塔の分布を探索することが有効な地域であるといえた。また、興津筋から興津川の支流である中河内川・黒川沿の中河内や貝伏地区など現在でもかなり山深い場所でも古式石塔を確認することができ、これらの地区から相当標高の高い峠越で甲斐国に至る非主要山間部ルートが存在していたことも見逃せない。しかしながら、これらのルートは一般の人々の往来には現在でも不向きであることから見ると、修験者などの宗教集団により開かれたものと思われ、修験者による山間ルートの開かれた時期を考察するうえでも、古式石塔の分布を探索することが有効ではないかと指摘しておきたい。

甲斐国南部では富士川沿の旧富沢町の万沢から旧南部町域の南部にかけての地区で、古式石塔がまとまって確認されている（畑大介 1999・2000・2002）。万沢は甲駿国境の近くに所在し、先に述べた 3筋の河内道の結節点の場所であることから見ても、内陸部への物資流通の拠点である宿場と見ても良い地区である。さら

に北上すると丘陵地帯から抜けて平地や段丘地形が発達した南部地区に至る。南部地区は中世段階より宿場町として発展する一方、富士川を利用した内陸水運の拠点（宿場付属津）ともなっていた。鎌倉期以降には甲斐源氏の流れを引く南部氏が支配するところで、南部地区には南部氏の居館や一族の関連寺院も存在していた。南部氏がその本拠を奥州に移すと、戦国期以降当地域は穴山氏が勢力を浸透させている。穴山氏は甲斐国守護の武田氏の親族衆で、武田信玄の家臣で後に江尻城主となった穴山梅雪が有名である。穴山氏は武田家の代々の重臣として河内と呼ばれた鰍沢以南の富士川流域の経営に務め、南の今川氏からの脅威に備えていた。武田氏の駿河進攻、領有に際しては領地の立地から重要な役割を担い、駿河進攻後も駿河湾の水軍支配の要である江尻城を任されている。このように、南部地区は物資流通の拠点（宿場）であり、政治的な求心力もある背景から見ても、古式石塔が多数残された有力寺院が次々と建立されていったと推察される。なお、畑大介氏によると旧南部町内に所在する古式石塔段階の宝篋印塔群は、南部氏による造塔と考え、戦国期以降では穴山氏の影響下に入ると考えている（畑大介 1999）。また、甲府盆地の石塔についても主要なものの見学を今回の調査に合わせて行ったが、身延山久遠寺の勢力が強い身延町内には中世石塔の分布は希薄となり、遠江～駿河中部地域の日蓮宗の寺院に残された中世石塔の少なさと連動する事柄のように思えた。

（2）石塔の説明

旧清水市域の古式石塔は第4図 127～第5図 198、由比町域の古式石塔は第6図 199～ 212、旧蒲原町域の古式石塔は第6図 213～ 234、富士川町域の古式石塔は第6図 235～第7図 246、旧富沢町域の古式石塔は第7図 247～ 252、旧南部町域の古式石塔は第7図 253～ 269に示した。なお、今回の報告にあたり冒頭でも紹介した先行研究として旧清水市域分では本間岳人の論考（本間岳人 2006）、旧蒲原町・旧富沢町・旧南部町域分では畑大介氏の一連の論考（畑大介 1999・2002・2007）を参考にし、一部の実測図面については再調査したなかで再トレースして使用した。また、富士川町域については稲垣甲子男の論考（稲垣甲子男 1984）を参考として再調査し、新たに実測図を作成した。

褐色凝灰岩製宝篋印塔は前項と同じく前号での分類を踏襲するが、駿河中部域に特徴的に見られる安山岩D製宝篋印塔については、今回の調査で新たにまとまって確認できた古式石塔であることから、個別の石塔の説明に入る前に型式的な変遷を辿れる分類を事前に示しておきたい。すなわち、関東型式の褐色凝灰岩製宝篋印塔を模倣したと思われるA1～3類、関西型式の褐色凝灰岩製宝篋印塔を模倣したと思われるB類の2系統の分類が可能かと思われる。なお、確実な部材の組合せになる良好なものは今回の調査ではあまり確認できていないので、あくまでも各部材との組合せは暫定案としておきたい。

A1類の各部材ごとの特徴をあげると、相輪の九輪は沈線化してはいるが上下の請花に花卉が肉彫されるもの（214等）、笠は軒上5～7段で露盤に二窓があり高さが高いもの（227等）と低いものの2系統あり（259等）、軒面と隅飾に段が形成され、隅飾に杵取の下端を省略する関西型式の特徴をもつものとなる。塔身は狭い窓枠と内部に梵字が刻まれるもの（174等）、基礎は2段以上の段形で二窓が刻まれ（250等）、反花座は花卉表現が肉彫りで刻まれるもので下半に二窓が刻まれるもの（160等）と刻まれないもの（80）があるものを該当させたい。A1類の笠については隅飾の杵取が全周する関東型式の特徴を示すものは今のところ確認されていないので、笠のみが関西型式となるのに対して、他の相輪・基礎・反花座は明らかに関東型式の特徴を示すので、関西・関東混合型式となる一元的には理解し難い複雑な要素を示す宝篋印塔である。ただし、209のような窓枠はないが1つの格狭間が刻まれた、明らかに関西型式の特徴をもつ基礎も存在する。また、245の反花座は一窓が省略された関西型式の花卉型式の基礎にも見える。これらをB類としたいが小数のみの確認であり、他の部材との組合せも不明であるため、変遷を示せるような細分類は現時点では不可能である。笠のなかに露盤の高さが高いものと低いものの2種類があることを指摘したが、これは褐色凝灰岩製宝篋印塔A類の中に露盤が別造となるものと、別造にならない低いもの、B類の中にもこれから派生するように露盤の高いものと低いものの2種類がある特徴と一致する。ただし、確認できる比率はA類では前者が主体で、後者は小数であるが、B類についてはほぼ拮抗する。また、笠～基礎の整合技法に凹面を形成するものが多数あり、これは褐色凝灰岩製宝篋印塔A類のみに見られる特徴である。すなわち、安山岩D製宝篋印塔の初期製品は、関西型式の笠の特徴（96）をもつ褐色凝灰岩製宝篋印塔C類とそれ以外のA・B類の特徴を模倣したことから始まった可能性が高い点を指摘しておきたい。とくに、旧南部町の浄光寺で確認された258の緑色凝灰岩製宝篋印塔A類は、中型品ながら露盤も別造で、下端に塔身の受けとなる凹をもつA類の中でも古手の特徴を示す14世紀中葉の時期となるものが注目される。この部材から山梨県南部地域にも安山岩D製宝篋印塔の典型的なモデルになった褐（緑）色凝灰岩製宝篋印塔の搬入品があり、おそらく安山岩D製宝篋印塔を製作した石大工も褐（緑）色凝灰岩製宝篋印塔を製作した集団から派遣されていた可能性も視野に入れるべきと考えたい。なお、A1類の組合せとしては寸法から見ると、174の相輪～基礎、250の相輪と反花座を除いたものが典型例となろうか。

A2類の相輪は九輪と共に上下の請花の花卉が沈線化し（173等）、笠は軒上5～4段に減少し、露盤に二窓は刻まれるものの軒面と隅飾面が一面となり、結果的に隅飾に杵取が全周し一見関東型式の退化型式に見えるものに変化している（204等）。塔身は狭い窓枠が刻まれるが内部の梵字が省略されるもの（208等）、

基礎は2段以上の段形で二窓が刻まれるが横長傾向に変化するもの（198等）、反花座は花卉表現が沈線化したもので下半の二窓が刻まれるものと（228等）刻まれないもの（244等）を該当させたい。反花座の二窓については、A1類と同様に刻まれるものと刻まれないものがあるため、模倣・製作時期に褐色凝灰岩製宝篋印塔の模倣品のなかにも刻まれるもの（25等）と退化型式の刻まれないもの（27等）があったと考えられるため、安山岩D製宝篋印塔の初期作品が14世紀中葉近くまで遡ることはないと思われる。ちなみに、安山岩D製宝篋印塔A1類段階では前者が主体で、A2類段階になると後者が主体となる。なお、笠～基礎の接合技法については受けの凹みのあるもの（179等）は存在するが、凹みがないものも（202等）増加するため、この点についても省略化が進んでいたと見られる。A2類の中で同一個体と思われる組合せを示すものとして、244の相輪～反花座を典型例としてあげておきたい。

A3類の相輪は沈線化した九輪で上下の請花の花卉表現が消失し、宝珠もかなり丸くなり（168等）、笠はA2類同様に軒上4～5段で軒面と隅飾面が一面化したものであるが、露盤の二窓と隅飾の杵取が省略されるものに変化し（220等）、塔身は無梵字の広い窓枠が刻まれるもの（251等）、基礎は1段の段形で二窓が刻まれるがさらに横長傾向に変化するもの（251等）、反花座は花卉表現が消失し下半の二窓も刻まれないもの（173等）を該当させたい。なお、隅飾の杵取は残るが露盤の二窓が刻まれないもののうち220や203については形態的にはA2類と何ら変わらないのでA2類に含めたいが、反対に238のような軒上4段の小型化したものはA3類に含めておきたい。

以上の分類案を踏まえて各地区の個別の古式石塔の説明を進めたい。まず、旧清水水域については冒頭で述べたように、有度山北東山麓に点在する寺院のうち第4図127の冷泉寺、128～131の楞嚴院、132・133の海長寺、134～136の萬象寺跡の古式石塔があげられると共に、竜爪山から派生する丘陵の南麓に点在する寺院では前号で報告した梶原堂、一乗寺のほか、137～140の大福寺、141～153の靈山寺、第5図の154～160の長福寺で古式石塔を確認した。これらの寺院の石塔群のうちまず一番古い古式石塔は、靈山寺で確認された141～145の緑色凝灰岩製五輪塔である。141の火輪～地輪と142の空風輪はやや幅の狭い水輪に不安を残すが同一個体と見られ、中型品ながら全輪に梵字が刻まれ、火輪の上端幅は狭く下端の反りが大きく軒面が狭い、地輪も縦長傾向の14世紀前葉に該当する特徴を示している。145の梵字の刻まれない緑色凝灰岩製五輪塔の火輪は軒の反りはあるが下端の反りがなくなった14世紀中葉以降、150の褐色凝灰岩製大型五輪塔の地輪も梵字が刻まれない正方形に近い形態で、これも14世紀中葉の製品と見られる。149の梵字の刻まれた褐色凝灰岩製小型五輪塔は扁平な形態に移行しているため、新式石塔段階に該当するものであろう。

次に褐色凝灰岩製宝篋印塔をあげると154の相輪はB1類、134の相輪はB2類、155・156の笠はB1類、127・157の笠はB2類、135・152の笠はB3類、158の塔身はB1類に該当する特徴を示している。製作年代は前項でも触れた通りB1類を14世紀後葉に、B2類を14世紀末葉、B3類を15世紀前葉に該当させておきたい。ほかに153は静岡県内でも今のところ1点しか確認できていない基礎と反花座が一体化した形態をなすもので、同形態のものが甲府盆地の八ヶ岳系安山岩製宝篋印塔のうち玉穂町常光寺で明徳4年（1393）の紀年銘をもつもの、南アルプス市行善寺で明徳5年（1394）の紀年銘をもつものなどが確認されている（山梨県2004）。この基礎・反花座はどちらもB2類に該当する特徴を示すので14世紀末葉に該当時期が求められ、この時期と山梨県側の紀年銘資料の時期と符号するため、駿河西部地域の凝灰岩製石塔を製作した石大工集団と甲府盆地の八ヶ岳系安山岩製石塔を製作した石大工集団との間に何らかの接点があったと考えたい。

本地区の安山岩D製宝篋印塔は、132の相輪はA2類、133の笠はA2類、160の反花座はA1類となり、旧静岡市側と同じく数は非常に少ない。よって、安山岩D製宝篋印塔の分布する地区ではあるがあくまでも客体で、確実に褐色凝灰岩製宝篋印塔が主体たる分布域となる地区であることが指摘できる。

この地区で注目されるのは古式五輪塔をかなり忠実に模倣した砂岩A・D製石塔の存在である。確認数が少ないため、隣接する旧静岡市側の寺院の資料も含めて検討したい。まず五輪塔から検討すると、143・144・146～149は小型五輪塔ながら梵字が刻まれた一群の部材で、梵字は刻まれないが151の大型五輪塔に属する地輪も含まれている。梵字の線刻は葉研状にはならない細い線状の彫りに変化しており、火輪の形態からも新式石塔段階のものと何ら変わらないため、これらを古式石塔の範疇に含めることはできないだろう。おそらく、新式石塔段階の梵字が刻まれた褐色凝灰岩製五輪塔を模倣し15世紀後葉に製作されたか、新式石塔の先鞭をなすものと考えた場合、古くても15世紀中葉に該当させるのが精一杯であろう。

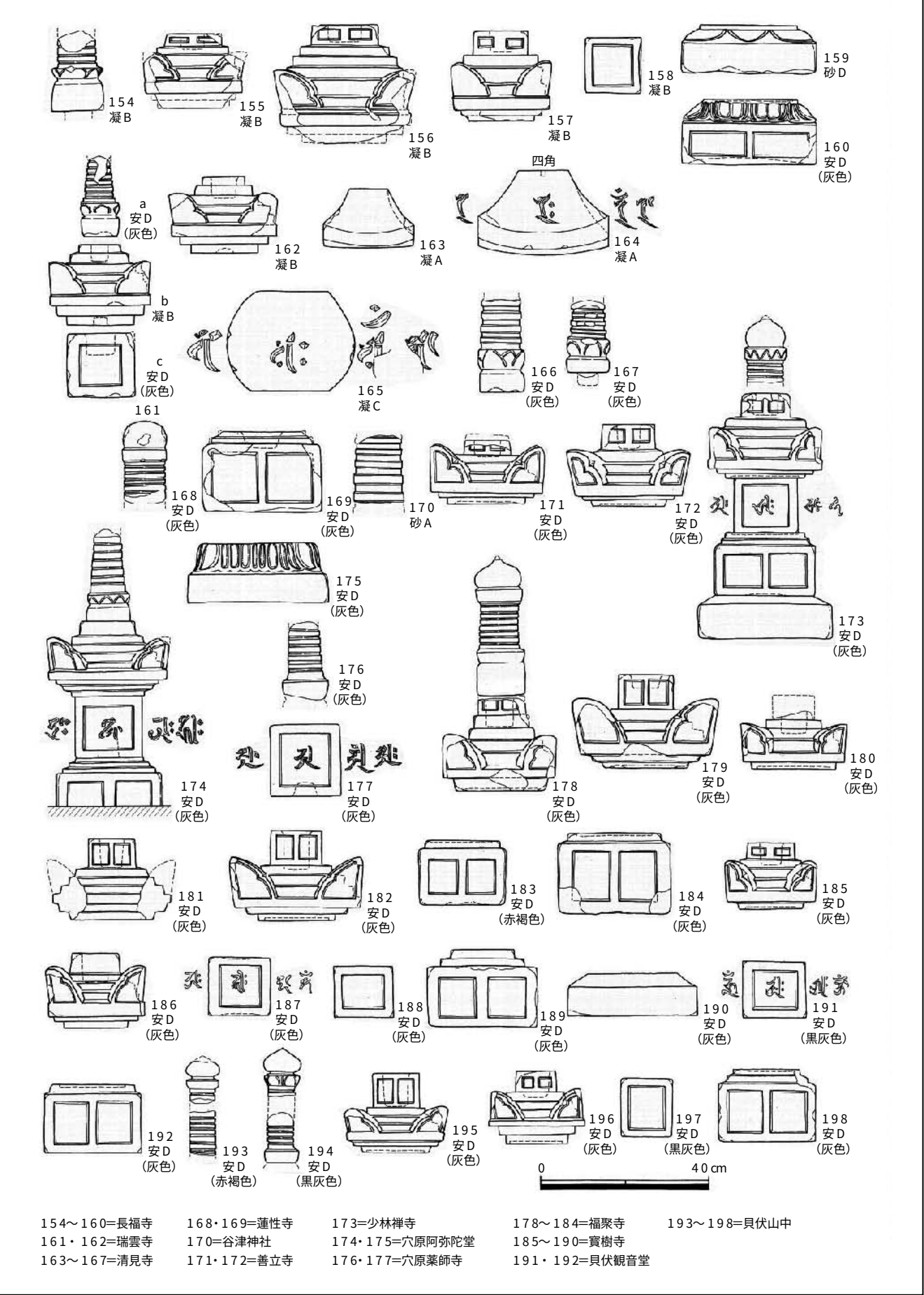
砂岩A・D製宝篋印塔の相輪は137が沈線化した九輪で上請花は花卉は消失したものの、笠は138の安山岩D製宝篋印塔と同じく関西型式の隅飾をもつもの、塔身は窓枠があり梵字の刻まれるものを含む139・140、基礎は横長となるが2段の段形で二窓が刻まれる131と、二段の段形で二窓が省略される102・107、反花座についても肉彫りの花卉が刻まれ下半に二窓が刻まれる129・130、二窓が省略される120・121などが確認できる。これらの特徴から検討すると、褐色凝灰岩製宝篋印塔B1・2類、あるいは安山岩D製宝篋印塔のA1類を模倣したと見られる。これらを、模倣品と考えてもよいならば、15世紀中葉以降に製作時期を求めることはできるが、製作年代の決手となる紀年銘資料は残念ながら知られていないため、実年代を確定することはできない。

江尻宿以東の東海道沿の古式石塔は、興津宿にほど近い第5図161・162の瑞雲院と隣接する163～167の清見寺、興津宿から興津筋の入口にあたる興津川西岸の168・169の蓮性寺と170の谷津神社、由比宿あるいは由比湊に関係した第6図199～201の最明寺と202～209の西山寺、由比筋の入口付近にあたる210～212の林香寺、213～228の海宝寺、蒲原宿に関係した229～234の龍雲寺に所在するものがあげられる。この中で一番古い古式石塔は清見寺で確認された164の緑色凝灰岩製五輪塔の火輪で、靈山寺のものよりも大型のサイズで14世紀前葉に該当する。163の緑色凝灰岩製五輪塔の火輪は、中型で梵字も刻まれないため14世紀後葉になると思われる。また、165の沼津市周辺産と思われる白色凝灰岩製五輪塔は、縦長の球形で梵字が刻まれる古い特徴を示す。沼津市靈山寺の同石材の1号塔基段から西大寺流真言律宗の僧侶である成真大徳が元享3年（1323）に89歳でなくなったことが刻まれた納骨容器が発見されている（吉澤悟1998）。また、同石材で前号で報告した富士市今井中世五輪塔群のなかにも文保2年（1318）の紀年銘が刻まれた地輪があり、白色凝灰岩製五輪塔の製作年代が14世紀前葉まで遡ることが指摘できた。この水輪も縦長で靈山寺ほど大きくはないものの、164の緑色凝灰岩製五輪塔とほぼ同じ寸法の幅30cm前後にはなる大型品である。よって、14世紀前葉の清見寺の住職墓内において165の白い五輪塔と164の緑の五輪塔が色彩的に華やかに並んでいた（何方かが開基塔?）可能性が指摘でき、古代以来東海道の関としての要の位置に創建された清見寺の格式の高さを示す古式石塔との評価を与えたい。

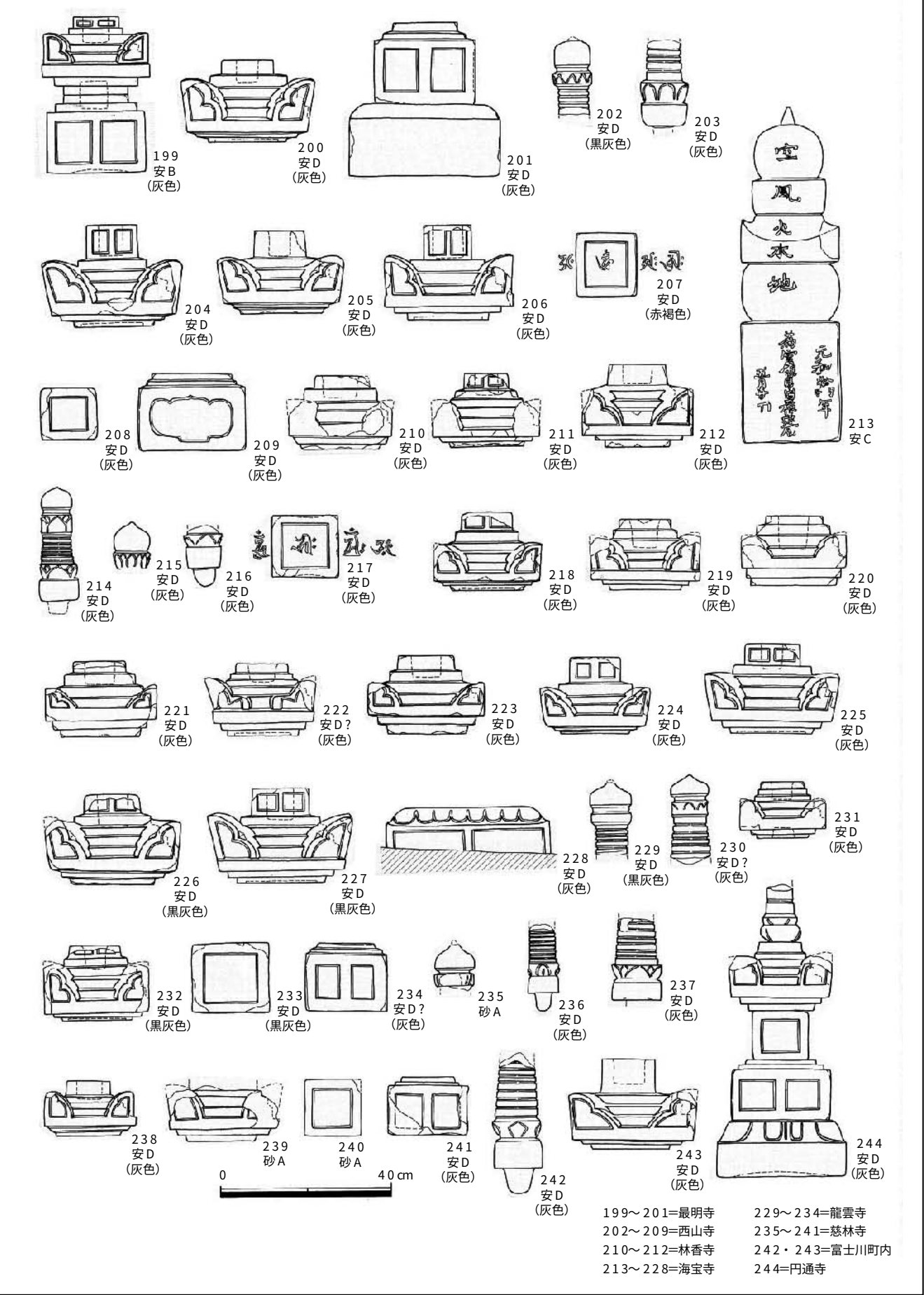
この地区の褐色凝灰岩製宝篋印塔は清見寺に隣接する瑞雲院において161b・162の笠（B3類）の2点しか確認できなかった。よって、この地区の宝篋印塔の主体は、ようやく安山岩D製宝篋印塔となるのであろう。この地区の安山岩D製宝篋印塔のうち相輪は166・214がA1類、161a・167・202・203・215・216・230がA2類、168・229がA3類、笠は219・222・227がA1類、200・204～206・211・212・218・221・223～226がA2類、210・220・231がA3類、塔身は207・217がA1類、208・233がA2類、161cがA3類、基礎は201がA1類、169がA2類、234がA3類、反花座は228がA2類、201がA3類に分類でき、各部材のA1～A3類が継続的に確認できた。数量から見るとA2類が主体となることがわかる。また、先に述べたように209の基礎はB類としておくが、相輪～反花座との組合せは分からない。A2類あたりと同じ時期となろうか。

199は同一個体となる安山岩D製宝篋印塔の笠と基礎である。小型品ながら笠の隅飾も直立し、基礎の窓枠も狭いものであるため、A1類に該当し14世紀中葉の製作年代を与えておきたい。駿河中部域では珍しい石塔で、江尻宿以東の東海道沿ではこれ1点の確認に留まる。前項でも述べたように箱根・東伊豆産安山岩製宝篋印塔は、遠江地域では湊付近の寺院に多く見られる傾向があるた

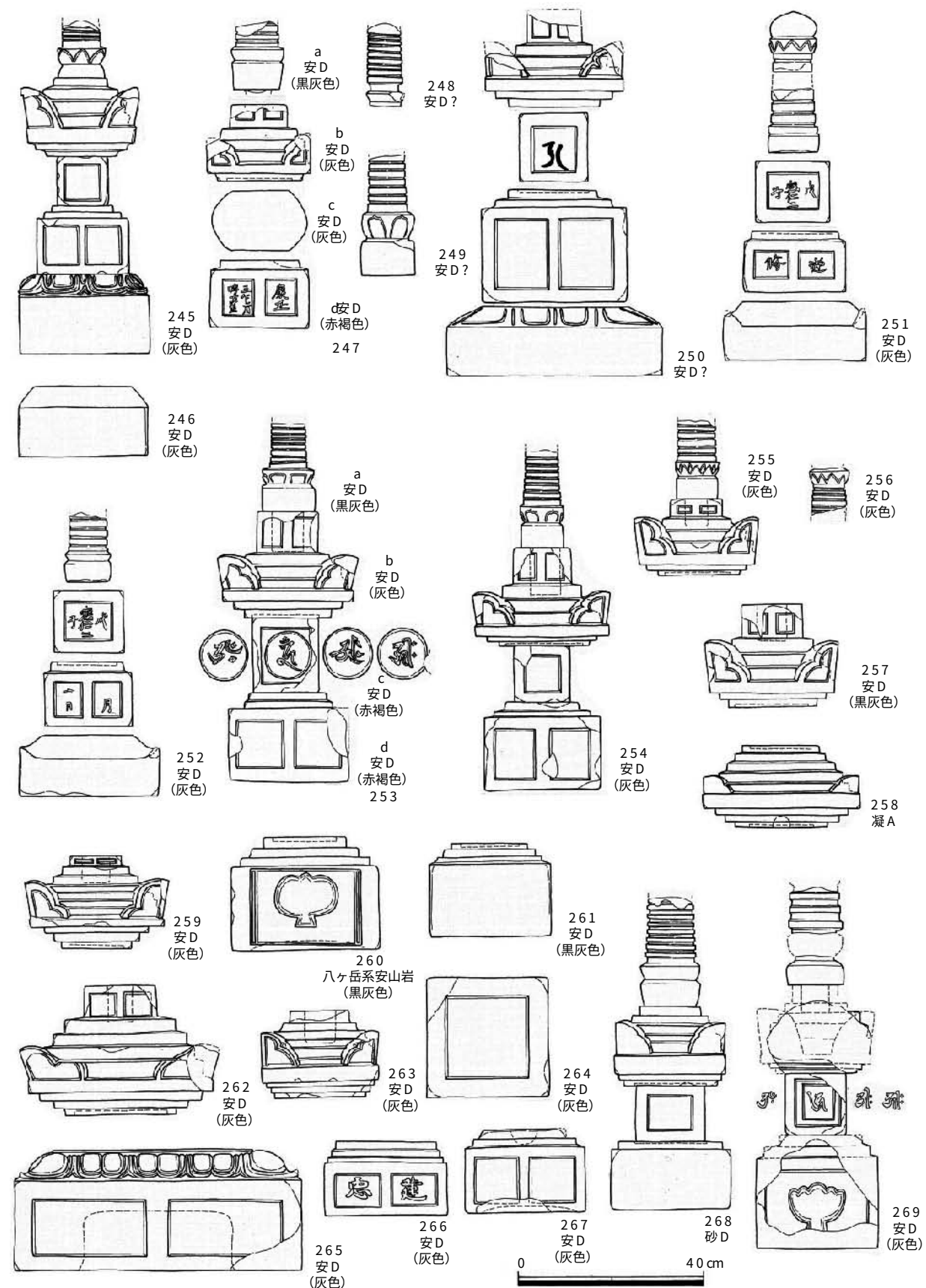
第5図 駿河中・西部の石塔実測図5



第6図 駿河中・西部の石塔実測図6



第7図 駿河中・西部(山梨県南部)の石塔実測図 7



245・246=萩氏墓塔群
247=西山寺
248～250=竹の花墓地
251・252=正行寺
253～261=浄光寺
262～267=建忠廃寺
243=山城鼻
244=円蔵院

め、僅か1点の古式石塔ではあるが付近に湊(由比湊)の存在があることを指摘できようか。また、最明寺は鎌倉時代には北条得宗家との関わりも指摘されている寺院であるため、南北朝期でも東伊豆や鎌倉地域との関係があり、駿河湾を通じて海上交通の一端を担っていた寺院であった可能も指摘しうる。なお、213は安山岩C製一石五輪塔で元和拾年(1624)の紀年銘が禪定尼(女性)の戒名とともに刻まれている。空風輪や火輪の造りは形骸化していないもので、江戸時代前期でも古い時期の特徴を良く示していると見られるが、箱根・東伊豆産安山岩製一石五輪塔は遠江・駿河地域での存在を管見では知らない。

砂岩A・D製宝篋印塔の部材は、僅かに170の相輪は沈線化しない九輪となるものしか確認できなかった。この相輪の特徴は褐色凝灰岩製宝篋印塔A類の最古段階の相輪の特徴と一致するものであり、15世紀中葉以降の製作と考えたい。この地区の砂岩A・D製宝篋印塔はこの部材1点しか確認できなかったため、褐色凝灰岩製石塔と共に主たる分布域からは外れるようである。なお、新式石塔段階でも16世紀代に入る砂岩D製小型五輪塔(富士川町歴史民俗資料館保管)が、蒲原病院敷地内からまとまって出土しているため、新式石塔後半期までは駿河中部域からの砂岩D製石塔の搬入は続いていたことは確かめられている。

静岡県分の最後として、甲斐国の内陸部に至る興津筋と岩淵筋の寺院に見られる古式石塔を検討したい。興津筋では下流域の小島地区の第5図171・172の善立寺、173の少林禅寺、上流域では穴原の174・175の阿弥陀堂、176・177薬師堂、178～184の福聚院、中流域から支流となる中河内川や黒川流域の185～190の宝樹寺、191・192の貝伏観音堂、193～198の貝伏山中の中世墓で古式石塔が確認できた。岩淵筋では富士川西岸の第6図235～241の慈林寺、242・243の富士川町内出土品、第7図244の円通寺、245・246の萩氏墓塔群の古式石塔が旧街道に沿って点々と分布していることが確認できた。この二筋での古式石塔の主体はやはり安山岩D製宝篋印塔である。個別に分類すると相輪は237・245がA1類、173・174・194・236・242・244がA2類、176・178・193がA3類、笠は174・195・196がA1類、171～173・178～182・185・186・243～245がA2類、238がA3類、塔身は173・174・177・187・191がA1類、188・197・240・244・245がA2類、基礎は174・245がA1類、173・189・198がA2類、183・184・192がA3類、反花座は175・244がA2類、173・190・246がA3類と分類でき、各部材のA1～A3類が継続的に確認できた。数量から見ると東海道沿と同じくA2類が主体となっていることがわかる。なかでも244は寸法から見て同一個体とみられ、組合せから見てもA2類の典型的な安山岩D製宝篋印塔となっている。また、先に述べたように245の基礎はB類の範疇に含めて、花卉が肉彫りされているため安山岩D製宝篋印塔A1類の並行時期としておきたい。

この二筋のうち砂岩製宝篋印塔は第6図239・240の2点がわ

ずかに確認できるため、このルートで砂岩製宝篋印塔が南部町域にも数少ないが搬入はされていたのである。

最後に静岡県内の安山岩D製宝篋印塔との比較を行うために必要な旧南部町と旧富沢町域の古式石塔の検討を行い、本項の石塔の説明を終らせたい。この地区でも安山岩D製宝篋印塔が分布の主体であることが、第7図247～269を見ると一目瞭然である。まず、静岡県側の分類案で安山岩D製宝篋印塔を分類すると、相輪は255がA1類、249・251・253a・254・256がA2類、247a・248・252がA3類、笠は250・253c・254・259・263がA1類、247b・255・257・262がA2類、塔身は250・253c・264がA1類、254がA2類、251・252がA3類、基礎は250がA1類、253d・254・266・267がA2類、247・251・252がA3類、反花座は265がA1類、250がA2類、251・252がA3類と分類でき、各部材のA1～A3類が継続的に確認できた。他の掲載していない資料を含めても、数量から見ると静岡県側と同じくA2類が主体となっていることがわかる。なかでも、A3類としたなかの251と252の塔身には応仁2年(1468)の紀年銘が、それぞれの基礎に逆修と一月等の文字と共に刻まれており、A3類の実年代を15世紀中葉求めることができる資料である。また、A3類の基礎である247にも康正3年(1457)の紀年銘が見られ、同類の251・252とは矛盾しない年号が刻まれている。つまり、A3類の実年代を15世紀中葉とすると、褐色凝灰岩製宝篋印塔A類を忠実に模倣した安山岩D製宝篋印塔A1類の実年代は14世紀後葉を大きく遡ることはないと思われるため、A1類を14世紀後葉の遅い時期～末葉、製作基数とバラエティが多いA2類を15世紀前葉となる製作時期を与えておきたい。

安山岩D製宝篋印塔が製作された開始時期と場所の問題を考えるうえで貴重な資料として、建忠廃寺の264と265の安山岩D製大型宝篋印塔の部材が目される。265の反花座は一面のみの造り出しで一見未製品とも思える造作ではあるが、A1類のなかでも花卉の肉彫が厚く、花卉も短い丁寧な彫りが施され、下半の二窓も奇麗に刻まれているため、箱根・東伊豆産安山岩製宝篋印塔と比較しても14世紀中葉に近い時期の特徴を示していると思われる。ただし、264の塔身は安山岩D製宝篋印塔A2類の特徴を示し反花座と時期が合わないが、250のような墨書による梵字が施されている例と同じものであったと仮定すると265との組合を考えるとよいであろう。つまり、この大型宝篋印塔は安山岩D製宝篋印塔の製作開始の契機となった石塔であった可能性が指摘でき、量産品の安山岩D製中・小型宝篋印塔の製作場所を南部地区に求めることも可能となろう。しかしながら、同種の大型石塔は今のところ静岡県内を含めてもこの1点のみしか確認できないので、旧南部町域で安山岩D製宝篋印塔の製作が始まったかどうかは断言できない。静岡県側でも250の次に製作されたと思われる安山岩D製宝篋印塔としてはA1類となる中型品の160の反花座、大型品であるがA1類新相に降る80の相輪・基礎・反花座の部材が確認で

きているので、静岡県側にも製作場所を求めることのできる部材も存在している。

258の緑色凝灰岩製宝篋印塔は冒頭で述べたとおりA類でも古手の製品で安山岩D製宝篋印塔のモデルとなった可能性をも指摘できる貴重な資料である。268の砂岩D製宝篋印塔は駿河中部地域からの搬入品で、相輪は興津の谷津神社で確認された九輪が沈線化する以前であるにもかかわらず請花に花卉は刻まれない特徴を示す。笠についても露盤の二窓と隅飾に杵取はないため褐色凝灰岩製宝篋印塔B3類の模倣品、塔身は窓枠が刻まれているのでB1類の模倣品、基礎については二窓が省略された1段の段形で安山岩D製宝篋印塔A3類の模倣品とも思える特徴を示している。笠～基礎までの接合部に凹みがあるので、安山岩D製宝篋印塔か褐色凝灰岩製宝篋印塔A類の特徴を模倣したと思われる。つまり、この砂岩D製宝篋印塔は古くても褐色凝灰岩製宝篋印塔B3類あるいは安山岩D製宝篋印塔A3類の製作年代を遡ることはない特徴を示していると考えられるので、15世紀後葉の時期に該当させておきたい。

269の安山岩D製宝篋印塔は塔身に二重沈線による窓枠、基礎にも沈線による窓枠と平坦化した格狭間が施される関西型式の特徴を示すものである。静岡県側では見られない特徴をもつものであるが、260の甲府盆地東部域に主たる分布域をもつ八ヶ岳系安山岩製宝篋印塔に、沈線による窓枠と関西型式の格狭間が刻まれた特徴をもつものが南部地区にも搬入されていることが確認でき、これを模倣したため 269ばかりでなく 209のような安山岩D製宝篋印塔のなかに関西型式の特徴を示す基礎があるのかもしれない。

(3) 小 結

当地域の古式石塔のうち、最古段階である緑色凝灰岩製五輪塔が残る寺院は駿河七観音寺に列せられた靈山寺と、東海道沿にあって多大な寺勢を保っていた清見寺の2寺であったのは当然の結果であった。とくに、清見寺では白色凝灰岩製五輪塔が沼津市域より搬入され、ほぼ同時に造塔された白と緑のコントラストが鮮明であった五輪塔の組合せは、石塔の色調が強調されたことが分かる好例として指摘される。

凝灰岩製宝篋印塔のうちA類は前号報告の梶原堂と一乗寺のみでしか確認できなかったが、B1～3類が巴川流域の平野部に面した寺院、日本平北東山麓の寺院で普遍的に確認できた。褐色凝灰岩製宝篋印塔の主たる分布域の東限は興津の瑞雲院で、ここから東の東海道と東海道から派生する河内道の興津筋や岩淵筋では安山岩D製宝篋印塔が主たる分布域となり、褐色凝灰岩製宝篋印塔の部材は1点も確認できなかった。僅かに旧南部町の浄光寺に1点ではあるが緑色凝灰岩製宝篋印塔A類が搬入されていたことが確認され、これを安山岩D製宝篋印塔のモデルとした根拠の一つと考えたい。

安山岩D製宝篋印塔は前号で報告した富士市域でも分布が確

認できるので、今のところ富士市域が東限であるといえるが、沼津市域までの詳細な調査結果をまたないと東限の分布域は確定できない。北限は旧南部町である程度まとまって確認できるが、身延町は中世石塔が少ない地域で、南アルプス市域等の甲府盆地南東では八ヶ岳系安山岩製石塔が主たる分布域を形成しているため、分布の北限は身延町域までといえる。この石塔の製作の中心地は良く分からないが、褐色凝灰岩製宝篋印塔をモデルとして製作された可能性が高いことと、旧南部町建忠廃寺の大型安山岩D製宝篋印塔を見ると、旧南部町域が製作地であるとの推測もできようが、安山岩D類の採取地が判明していない現状では不明といわざるを得ない。なお、畑大介氏が南部町域の石塔を分析する中で、安山岩D製宝篋印塔を山梨県側の石塔との関係ではなくて、静岡県側の石塔との関係を指摘したことは卓見であった(畑大介 2000)。褐色凝灰岩製宝篋印塔をモデルとしていることは確実と思われるが、笠に関西型式の影響を読み取ることができる。褐色凝灰岩製宝篋印塔のなかに関西型式を採用するものはあるが管見で知る限りでは、智満寺の湖東式影響のものを含めても 10例にも充たないため、小数型式のものを模倣した理由が分からない。相輪・塔身～反花座は褐色凝灰岩製宝篋印塔B類と似たような変遷を辿るようであるが、基礎には最後まで二窓が刻まれるのは、箱根・東伊豆産安山岩製宝篋印塔の特徴と共通するのに対して、反花座の花卉の省略過程が急速に進み無花卉のものが現れる特徴は褐色凝灰岩製宝篋印塔B類と共通するため、一系統からの石塔の模倣からでは理解できない側面もある事実を指摘しておきたい。つまり、八ヶ岳系や箱根・東伊豆産の安山岩製宝篋印塔との関係も視野に入れるべき宝篋印塔なのであろう。年代はすでに検討したように、A1類は 14世紀後～末葉、A2類は 15世紀前葉、A3類は 15世紀中葉となり以後消滅するようである。

箱根・東伊豆産安山岩製の古式石塔は旧静岡市地域を含めても4例しかない。当地区でも前号報告の梶原堂と本号報告の最明寺である。後者は遠江と同様に由比湊との関係で搬入されたものと理解できるが、後者についてはいかなる理由で搬入されたのかは明らかとなっていない。梶原堂の歴史的背景は分からないが、やはり靈山寺との関係を疑わざるをえない。石塔の質の高さから見て、梶原堂が靈山寺の歴代住職墓になっていた時期はないのであろうか。また、江尻宿周辺から蒲原宿まで勢力を張っていた入江一族は、白浜村(下田市)の地頭職をえていた時期もあるため、駿河湾～伊豆半島にかけての海上権も握っていた可能性があり、入江氏を通じて箱根・東伊豆産安山岩製宝篋印塔が海路運ばれてきた可能性も指摘できる。どちらにしても、駿河中部地域では遠江地域のように東海道沿の宿場や、海上交通の拠点である湊の寺院に箱根・東伊豆産安山岩製石塔が集中的に搬入される様相は断片的であり、また遠江地域での時宗寺院や駿河西部地域の天台宗系寺院に宝篋印塔を中心として搬入される様相は確

認できない。何れも同じ鎌倉後期では北条氏、南北朝期からは今川氏の領地となるのにである。やはり、中世石塔の性格はあくまでも各地域に勢力をもった寺院や武士と東伊豆との個別の関係によるものと考えざるをえないが、この点に関しては今後の検討課題となるだろう。

ちなみに、この地区での新式石塔段階である 15世紀後葉以降の様相は、興津宿以西では砂岩A・D製五輪塔が主体で安山岩D製小型五輪塔が搬入される地域、興津宿以東の東海道や興津筋・岩淵筋では砂岩A・D製五輪塔と安山岩D製五輪塔が混在する地域、旧南部町域周辺では安山岩D製五輪塔が主体的に分布し砂岩A・D製小型五輪塔が少数搬入される地域となっている。砂岩A・D製宝篋印塔は、旧静岡市と旧清水市地域では興津宿より西に主たる分布域があり、褐色凝灰岩製宝篋印塔と分布域が重なるようである。このうち、少なくとも砂岩D製宝篋印塔は冒頭でも述べたように、駿河中部地域に多い製品であるため当該地域で生産されたと考えても良いだろう。砂岩A製宝篋印塔は駿河西部地域でも褐色凝灰岩製宝篋印塔を模倣したものが確認できるので、駿河西部域からの搬入品であったと思われる。砂岩A・D製宝篋印塔は分布域から見ても褐色凝灰岩製宝篋印塔B類の模倣品であり、新式石塔である小型五輪塔の先駆となる石塔と言えるならば、本報告では 15世紀中葉以降の製品であると位置付けておきたい。しかしながら、再三述べるが藤枝市徧照寺で砂岩A製宝篋印塔基礎に天文7年(1538)の 16世紀前葉の紀年銘資料が1点ある程度で、確実な実年代は不明と言わざるをえない。

従来全く不明であった当地区の古式石塔の内容を、本間岳人氏と畑大介氏の成果を借りつつ明らかにできた。とくに褐色凝灰岩製宝篋印塔と安山岩D製宝篋印塔は多少の搬入関係はあるにしても主たる分布域を違えることを明らかとし、同時期に異なる石材の石塔がお互いの小領域をそれ程侵さないで流通していたことも証明できた。この古式石塔段階の分布の様相は、新式石塔段階になっても石材別に石塔の分布もほぼ同じ範囲で移行するめ、南北朝期以降の駿河中部地域と山梨県南部地域を含んだ中世寺院のネットワークが、興津宿を境として大きく異なっていたのではないか、あるいは寺院を中心とした物資流通のネットワークも異なる集団でなされていたのではないかと推測されるのである。これより富士川以東の状況については断片的にしか分かっていないので、今後の調査成果に期待したい。

(松井一明・溝口彰啓)

4. 駿河中部域の出現期の石塔がもつ歴史的背景(考察)

本号においては前号まで暗中模索状態であった駿河中部地域の古式石塔の様相を明らかにすることができた。とくに、焼津市産凝灰岩製石塔と安山岩D製宝篋印塔の主たる分布域の範囲を確定でき、安山岩D製宝篋印塔の搬入は安倍川西岸まで行われて

いたことも判明した。これに対して、箱根・東伊豆産安山岩製石塔は遠江・駿河西部地域とは異なり、駿河中部地域ではほとんど存在しないことも明らかとなった。さらに、砂岩D製石塔は駿河中部地域で生産され、前号まで報告してきた駿河西部産と思われる砂岩A・C製石塔との区別を可能とし、駿河中部産砂岩D類石塔として認識できた。砂岩D製宝篋印塔の初期製品の分布は、褐色凝灰岩製宝篋印塔と重複する地域であることが判明し、東海道から三筋の街道を通して、山梨県旧南部町地域まで搬入されていることが判明した。こうした成果を基にして、駿河中部地域の古式石塔から判明した歴史的背景についてさらに考察を進め、石材ごとの古式石塔の様相についてまとめた。

まず、駿河中部地域で最古の古式石塔になる焼津市産緑色凝灰岩製(当目石)五輪塔から検討したい。緑色凝灰岩製五輪塔のなかで最古の形態の特徴は、全輪に大振りの葉研彫りによる梵字が刻まれ、空風輪のうち空輪は奇麗な宝珠形をなし、火輪は高さが高く上端幅が狭く下端と軒の反りが大きく、水輪も高さがある程度高く扁平化していない球形をなし、地輪は 141の縦長のものと 68の横長のものがあり、石材も初期製品は華麗な緑色凝灰岩を選択して使用している特徴が見られる。68の梵字の刻まれる横長の地輪をもつ系譜の石塔を探索すると、遠江の旧豊岡村永安寺に僅か1例が確認できるのみであるが、この系譜の五輪塔の全体形状が分かる貴重な資料である。永安寺の緑色凝灰岩製五輪塔では月輪は刻まれないが、奇麗な葉研彫をなす梵字が全輪に刻まれており、地輪に対して水輪幅が極端に小さく縦長になる特徴がある。また、地輪と火輪を比較すると、火輪幅が少し小さく作られている特徴も見取れる(これを以後凝灰岩製五輪塔A類としたい)。これに対して、地輪が縦長の系譜のものは火輪・水輪・地輪幅はほぼ同じ数値を示すものがほとんどで、遠江～駿河西部地域に広く分布する緑色凝灰岩製五輪塔としては主流の系譜(これを以後凝灰岩製五輪塔B類としたい)となる。

今回の報告から駿河中部地域でも両者の2系統の緑色凝灰岩製五輪塔が確認できたことになる。さて、前号でも述べたことであるが、この緑色凝灰岩製五輪塔A・B類の製作開始時期は遠江ばかりでなく駿河地域でも基準となる紀年銘資料は存在しないので、良質な緑色凝灰岩を使用した平田寺宝塔に延慶三年(1310)の紀年銘があることを参考とし、14世紀初頭からの製作開始時期を与えてきた。遠江～駿河中部地域で 13世紀代に遡りうる石塔は、今のところ畿内からもたらされた花崗岩製五輪塔が浜名湖沿岸部を除いた遠江地域のみに分布することが判明しているが、A類は全輪に梵字が刻まれる点と地輪が横長となる点しか共通する特徴は見い出せない。後者に至っては梵字が全輪に刻まれる以外共通する要素は認められないため、少なくともこれら律宗系五輪塔が出現する以前の畿内の花崗岩製五輪塔を模倣して製作されている可能性は緑色凝灰岩製五輪塔に限って言えば否定されるべきも

のであろう。単に形態が似ているという視点から全国の上輪塔を検索すると、凝灰岩製五輪塔A類は熊本県玉東町西安寺五輪塔群、凝灰岩製B類を鎌倉金剛寺木製五輪塔との比較の中で考えることが可能かと思われた。

前者の西安寺五輪塔群は九州相良氏の供養塔であることが銘文の内容から明らかとなっている。相良氏は先にあげた平田寺の所在する相良荘を平安末期から支配していたが、鎌倉幕府が成立するとその功績から建久9年（1198）に相良頼景が肥後球磨郡人吉荘の地頭に任ぜられ、東国の地頭が西国に所領をえた西遷地頭となった。その後相良氏は遠江から肥後に居を移し周辺地への支配を確立し、相良頼平（頼景三男）を開祖とする山北相良氏も玉名郡山北付近への支配を強めた。

山北相良氏の菩提寺である西安寺にこの山北相良氏の供養塔が造塔された。なかでも1～3号塔と報告された阿蘇安山岩製五輪塔が大型石塔で、嘉元2年銘（1304）の1号塔には遠江住人相良三郎、正嘉元年銘（1257）の2号塔には遠江住人相良五郎、正應元年銘（1288）の3号塔には遠江住人相良三良の銘文が刻まれている（玉東町 1995）。各五輪塔の特徴は全輪に月輪を伴う梵字が葉研状に深く彫り込まれ、空風輪は彫りの深い宝珠形をなし、火輪はさほど高くはないが上端幅は狭く、下端と軒の反りは大きく、水輪は幅の狭い棗形を示し、地輪は横長の特徴を示すものであるため、造塔時期も紀年銘どおりの13世紀中葉～14世紀初頭となるものであろう。これらの五輪塔の特徴は永安寺五輪塔と共通する特徴を備えており、九州での位置づけは狭川真一氏の指摘される通り、肥後型五輪塔の祖形となるものであろう。紀年銘が一番古く高さも一番高い総高232.7cmを計る2号塔が一番古いのであろうが、50年以上時期差があるのにもかかわらず形態差はさほどあるとは思えないため、2号塔の形態を厳格に模倣して3号塔から1号塔へ造塔を進めた五輪塔群であると思われる。

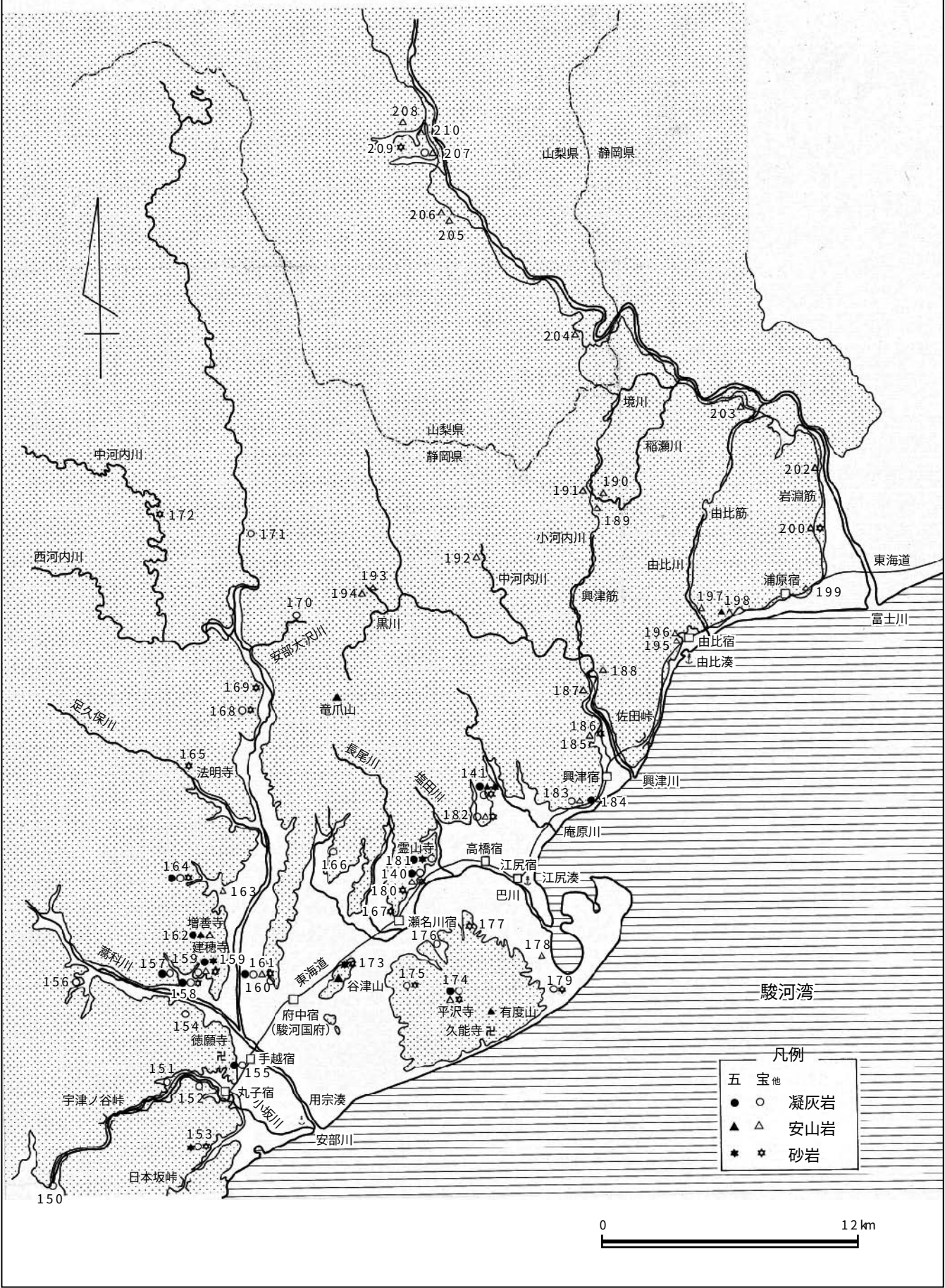
さてここで、火～地輪幅だけの数値で検討を進めると、1号塔は総高167.5cmで火輪幅71.0cm、水輪幅58.0cm、地輪幅72.4cm、2号塔は総高232.7cmで火輪幅114.5cm、水輪幅73.4cm、地輪幅112cm、3号塔は総高154.5cmで火輪幅73.0cm、水輪幅55.0cm、地輪幅71.7cmとの数値が得られており（狭川真一 2007）、水輪が一番小さい値を示すことが共通する特徴ではあるが、1号塔は地輪幅よりも火輪幅が小さく、2・3号塔では反対に火輪幅より地輪幅が小さい数値となっている。紀年銘をそのまま信用すると火輪幅よりも地輪幅の狭い2・3号塔から、地輪幅よりも火輪幅の狭い1号塔への変遷が辿れるのではなかろうか。翻って永安寺の緑色凝灰岩製五輪塔A類の大きさは総高110.4cmとなり、火輪幅47.0cm、水輪幅34.6cm、地輪幅50.0cmしかないもので、この数値から西安寺五輪塔群と軽々に比較すべきではないかもしれないが、あえて比較すると火輪幅が地輪幅より狭い1号塔との特徴が似ていると言えようか。となると、3号塔に近い時期に永

安寺五輪塔が造塔されたと見ると、14世紀初頭の時期が与えられるのであるが、あくまでも西安寺五輪塔の石大工集団が緑色凝灰岩製五輪塔を製作した石大工集団と関係があったという前提条件が付される。また、空風輪と火輪の接合技法は西安寺五輪塔群は何れもほぞ穴型式になるのに対して、永安寺五輪塔は無ほぞ式となり明らかに異なる特徴も示しているため、単純に同一石大工の手になる五輪塔とも言いかねる要素もある。しかしながら、あえて想像を逞しくして仮説を進めると、相良氏の出身地に所在する平田寺が宝塔を造塔するにあたって、九州に移り住んだ相良氏に依頼して肥後の石大工を当地に招聘した可能性があることを、緑色凝灰岩製五輪塔A類を介在させて考えてみたいのであるが、本稿では問題提起に留めておきたい。

後者の緑色凝灰岩製五輪塔B類については、鎌倉の金剛寺（鎌倉国宝館展示）木製五輪塔との比較で検討してみたい（鎌倉国宝館 1977）。金剛寺木製五輪塔は、全輪に梵字が刻まれ、空風輪の彫りは深く、火輪の高さは高く、上端幅が狭く、軒面も狭く、水輪は球形をなし、地輪は縦長の特徴を示している。空風輪と火輪の接合技法は残念ながら分からないが、菊川市土橋遺跡で発見された木製の空風輪を見るとほぞ穴型式となっている。幅は実見した印象ではあるが、火輪幅が一番広く、水輪と地輪は水輪幅が少し狭くなるように見えた。火輪下端の反りはほとんどないが、それ以外の形態的特徴はよく一致する。他に遠江地域の例であるが、土橋遺跡でも木製の五輪塔部材が確認できたこと（菊川町教育委員会 2001）、磐田市一の谷中世墳墓群でも金剛寺木製五輪塔をミニチュア化したような青銅製五輪塔（磐田市教育委員会 1993）などが13世紀代に当地にもたらされていたことは確実なので（松井一明 2005）、これらの遺品を見て緑色凝灰岩製五輪塔B類を製作した可能性も指摘できる。このように、西大寺律宗系五輪塔出現以前の畿内の花崗岩製五輪塔からの系譜を全く辿れない緑色凝灰岩製五輪塔A・B類は、今回提示した仮説の是非はともかく、全く違う視点から検討しないと製作開始の様相について理解できない五輪塔であることは間違いないだろう。

14世紀前葉でも中葉に近い時期になると、緑色凝灰岩製五輪塔も中型品が現れ、程なく梵字が全輪刻まれる縦長地輪の系譜の大型五輪塔（B1類）は、水輪のみに梵字が限られるようになる緑色凝灰岩製五輪塔（B2類）への変遷が辿れるようになるが、この段階でのA類は今のところ系譜が辿れない。ちなみに、緑色凝灰岩製五輪塔の地輪に紀年銘が刻まれた例をあげると、駿河では島田市医王寺の応永24年（1417）、藤枝市鬼岩寺の延文3年（1358）と明徳4年（1393）、旧清水市一乗寺の延文4年（1357）の4例があり、遠江では掛川市観音寺跡の貞和二年（1346）年銘五輪塔がある。このうち観音寺五輪塔は中型品の地輪で梵字は刻まれていないため、緑色凝灰岩製五輪塔B2類の時期を追及するうえでの基準資料となっているが、14世紀前葉に遡りうるA類、B1類の

第 8 図 駿河中部石分布図（数字は第 1 表 No. と一致する）



第1表 駿河中・西部（山梨県南部）古式石塔一覧表

No	寺院・墓地名	所在地	石塔の内容	備考
144	菊川神社	島田市菊川	緑色凝灰岩五輪塔3	菊川宿関連?
145	東国寺墓地	藤枝市堀之内	褐色凝灰岩五輪塔1、褐色凝灰岩宝篋印塔5	
146	駿河大納言墓塔	藤枝市市之瀬	砂岩A宝篋印塔1	
147	長慶寺今川泰範墓塔	藤枝市花倉	褐色凝灰岩宝篋印塔3	
148	観音寺墓地	藤枝市広幡	褐色凝灰岩宝篋印塔1	
149	大仲寺墓地	岡部町村良	褐色凝灰岩宝篋印塔1	
150	誓願寺	岡部町岡部	褐色凝灰岩宝篋印塔1	岡部宿関連寺院
151	誓願寺墓地	静岡市丸子	褐色凝灰岩宝篋印塔 6 砂岩A宝篋印塔 1	丸子宿関連寺院?
152	丸子	静岡市丸子	褐色凝灰岩宝篋印塔1	丸子宿関連?
153	安養寺土肥七騎墓塔	静岡市小坂	褐色凝灰岩宝篋印塔7、砂岩 D宝篋印塔 1 砂岩A一石五輪塔（江戸）	
154	耕雲寺	静岡市牧ヶ谷	褐色凝灰岩宝篋印塔1	
155	泉秀寺墓地	静岡市手越	緑色凝灰岩五輪塔1、褐色凝灰岩宝篋印塔1	手越宿関連寺院
156	小瀬戸天神森上	静岡市小瀬戸	褐色凝灰岩宝篋印塔2	
157	竜津寺墓地	静岡市羽鳥	褐色凝灰岩五輪塔1 褐色凝灰岩宝篋印塔1	
158	羽鳥庚申塔	静岡市羽鳥	緑色凝灰岩五輪塔4、褐色凝灰岩五輪塔1、 褐色凝灰宝篋印塔 8 砂岩 D宝篋印塔 4 砂岩 D無縫塔1、	建穂寺関連石塔
159	建穂寺	静岡市建穂	褐色凝灰岩五輪塔1、褐色凝灰岩宝篋印塔2、 安山岩A宝篋印塔1、砂岩D宝篋印塔1、 砂岩A一石五輪塔1（江戸）	駿河七観音寺
160	瑞龍寺旭姫墓	静岡市井宮町	緑色凝灰岩五輪塔1、緑色凝灰宝篋印塔1、 褐色凝灰宝篋印塔3、安山岩D宝篋印塔1、 砂岩D宝篋印塔1	駿河国府・守護所 関連
161	松樹院	静岡市井宮町	褐色凝灰宝篋印塔2	
162	増善寺	静岡市慈悲尾	緑色凝灰岩五輪塔1、安山岩B五輪塔1、 安山岩D宝篋印塔1、砂岩D板碑型墓塔1（江戸）	駿河七観音寺 慈悲寺
163	狩野貞長介供養塔	静岡市辛庵新田	安山岩D宝篋印塔1	
164	結成寺工藤祐経墓塔	静岡市内牧	褐色凝灰岩五輪塔1、褐色凝灰宝篋印塔 5 砂岩D宝篋印塔2	
165	法明寺	静岡市足久保	砂岩A宝篋印塔1	駿河七観音寺
166	東林寺墓地	静岡市東	褐色凝灰岩宝篋印塔1	
167	松寿院瀬名氏貞墓	静岡市瀬名	砂岩D宝篋印塔1	
168	松野阿弥陀堂墓地	静岡市松野	褐色凝灰宝篋印塔3、砂岩A宝篋印塔1、 砂岩D宝篋印塔1	
169	法津院墓地	静岡市津渡野	砂岩D宝篋印塔2	
170	杉山氏墓塔群	静岡市俵峰	褐色凝灰宝篋印塔1	
171	小林禅寺墓地	静岡市平野	褐色凝灰宝篋印塔1	
172	曹源寺墓地	静岡市長妻田	砂岩D宝篋印塔 1	朝倉氏菩提寺
173	竜雲寺墓地	静岡市沓谷	砂岩D宝篋印塔 1 砂岩E一石五輪塔1（江戸）	寿桂尼墓
174	平沢寺墓地	静岡市平沢	緑色凝灰岩五輪塔1、褐色凝灰岩宝篋印塔6、 安山岩D宝篋印塔 2 砂岩A宝篋印塔2、 砂岩D宝篋印塔2	駿河七観音寺

No	寺院・墓地名	所在地	石塔の内容	備考
175	大慈悲院	静岡市池田	褐色凝灰岩宝篋印塔1、砂岩A宝篋印塔1	
176	冷泉寺墓地	旧清水市草薙	褐色凝灰岩宝篋印塔1	
177	楞巖寺墓地	旧清水市有東坂	砂岩D宝篋印塔4	
178	海長寺墓地	旧清水市村松	安山岩D宝篋印塔2	
179	萬象寺跡	旧清水市駒越中	褐色凝灰岩宝篋印塔2、砂岩A宝篋印塔1	
180	大福寺墓地	旧清水市鳥坂	砂岩A宝篋印塔4	
181	霊山寺墓地	旧清水市大内	緑色凝灰岩五輪塔2、褐色凝灰岩五輪塔2、 砂岩D五輪塔6、褐色凝灰岩宝篋印塔2	
182	長福寺墓地	旧清水市山原	褐色凝灰岩宝篋印塔5、安山岩D宝篋印塔1、 砂岩D宝篋印塔1	
183	瑞雲院墓地	旧清水市清見寺	褐色凝灰岩宝篋印塔 2 安山岩D宝篋印塔1	興津宿関連
184	清見寺墓地	旧清水市清見寺	緑色凝灰岩五輪塔2、白色凝灰岩五輪塔1、 安山岩D宝篋印塔2	興津宿関連 関寺
185	蓮性寺墓地	旧清水市谷津町	安山岩D宝篋印塔2	
186	谷津神社	旧清水市谷津町	砂岩A宝篋印塔1	
187	善立寺墓地	旧清水市小島	安山岩D宝篋印塔2	
188	少林禅寺	旧清水市立花	安山岩D宝篋印塔1	
189	穴原阿弥陀堂	旧清水市穴原	安山岩D宝篋印塔2	
190	穴原葉師堂	旧清水市穴原	安山岩D宝篋印塔2	
191	福聚院墓地	旧清水市穴原	安山岩D宝篋印塔8	
192	寶樹寺墓地	旧清水市中河内	安山岩D宝篋印塔6	
193	貝伏観音堂	旧清水市河内	安山岩D宝篋印塔2	
194	貝伏山中	旧清水市河内	安山岩D宝篋印塔6	
195	最明寺墓地	由比町町屋原	安山岩B宝篋印塔1、安山岩D宝篋印塔3	由比宿関連
196	西山寺墓地	由比町西山寺	安山岩D宝篋印塔8	由比宿関連
197	林香寺墓地	由比町東山寺	安山岩D宝篋印塔3	
198	海宝寺墓地	旧蒲原町神沢	安山岩D宝篋印塔 15 安山岩C一石五輪塔 1	
199	龍雲寺墓地	旧蒲原町蒲原	安山岩D宝篋印塔6	蒲原宿関連
200	慈林寺墓地	富士川町中之郷	安山岩D宝篋印塔 4 砂岩A宝篋印塔3	
201	富士川町内	富士川町内	安山岩D宝篋印塔2	出土地不明
202	円通寺墓地	富士川町木島	安山岩D宝篋印塔1	
203	萩氏墓塔群	富士川町北松野	安山岩D宝篋印塔 3	
204	御屋敷墓地	山梨県旧富沢町万沢	安山岩D宝篋印塔1以上	紀年銘資料のみ
205	竹の花墓地	旧富沢町竹の花	安山岩D宝篋印塔2	
206	正行寺墓地	旧富沢町馬込	安山岩D宝篋印塔2	紀年銘資料のみ
207	浄光寺南部氏墓塔群	旧南部町南部	緑色凝灰岩宝篋印塔1、安山岩D宝篋印塔6以上、 八ヶ岳安山岩宝篋印塔1	選別分のみ 南部氏関連寺院
208	建忠寺跡墓地	旧南部町本郷	安山岩D宝篋印塔5以上	穴山氏関連寺院
209	山城鼻	旧南部町柳島	砂岩D宝篋印塔1	
210	円蔵寺穴山信友墓	旧南部町南部	安山岩D宝篋印塔1	穴山氏関連寺院

（※数量は推定個体数、Noは前号から通番号で第 8回中番号と一致する。）

紀年銘資料はないのが現状である。島田市医王寺の応永 24年（1417）銘五輪塔は梵字が刻まれていない地輪であるが、緑色凝灰岩製五輪塔B2類が 15世紀前葉まで製作されていた可能性を示すものである。しなしながら、長文の銘文が刻まれているため後刻の可能性がないか、上半分の形態が後述するD類の形態に移行しているものではないかなどの検討の余地が残されている。その他のものについては小型五輪塔の地輪で、梵字が刻まれないB2類ないし C類の小型五輪塔の存在を示唆するものとして注目されるが、形態変化を追える資料ではない。

前号までは褐色凝灰岩製五輪塔は褐色凝灰岩製宝篋印塔の出現時期と同じ、14世紀中葉と考えてみた。紀年銘資料をあたると駿河地域では褐色凝灰岩製大型五輪塔では鬼岩寺の応永 12年（1405）銘の地輪、徧照寺の応永 12年（1405）銘の地輪、加納家墓地の寛正5年（1464）銘の紀年銘資料のほか、遠江地域では掛川市法泉寺の延文5年（1360）銘の褐色凝灰岩製五輪塔の資料がある。よって、14世紀中葉に褐色凝灰岩製大型五輪塔の製作が開始され、15世紀初頭まで生産のピークがあり、15世紀中葉まで生産が継続し、新式石塔の小型五輪塔に移行するのではないかと前号までは考えてみた。

褐色凝灰岩製五輪塔の特徴は、梵字があるものとなないものがあり、空風輪は奇麗な宝珠形をなし、火輪は上端幅が広く、軒の反りは大きいが、下端は平らになり高さが低くなるものと高さは高く下端も湾曲するものの2種類があり、水輪はやや扁平化し、地輪もあり縦長なものとはなくなるようである。鬼岩寺の大型五輪塔を再検討すると全輪梵字が入らない系譜で、火輪の形態も高さが低くなり下端の反りがない平らなものになっておりこれを（以後凝灰岩製五輪塔 C類としたい）、緑色の凝灰岩製五輪塔B類からは系譜の追えない特徴を示すため、空風輪はほぞ穴型式にはならないものの、西大寺奥ノ院の叡尊墓を塙矢とする西大寺流律宗が造塔する花崗岩製大型五輪塔をモデルとしたか、強い影響を受けた五輪塔と考えてみたい。ただし、徧照寺の褐色凝灰岩製五輪塔については、火輪の高さが高く下端の反りも大きく、梵字の入るものがあるため緑色凝灰岩製五輪塔B類の系譜に連なるものと考えた（松井一明 2008）。鬼岩寺は忍性が居住した寺伝と共に、鎌倉後期以降西大寺流律宗に改宗されたことも明らかとなり、石塔から見ても西大寺と鎌倉を結ぶ東海道沿の律宗の拠点寺院であると共に、中継基地としての役割を担わされていた可能性を指摘できるようになった。ちなみに、鬼岩寺五輪塔で見たような忍性教団が行った布教活動のなかの基本として大型石塔の造立活動があり、静岡県内や周辺部での律宗系大型五輪塔をあげることができる。まず、忍性ゆかりの霊山である箱根の元箱根石塔・石仏群中に西大寺流律宗の大蔵派石大工集団が関与したと思われる永仁3年（1290）の紀年銘資料を含む大型五輪塔3基が注目される。沼津市霊山寺では沼津市周辺産白色凝灰岩製大型五輪塔の下から叡尊の

弟子である成真大徳の元享3年（1323）銘のある鑄銅製蔵骨器が出土している（吉澤悟 1998）。旧修善寺町の加藤景兼五輪塔群からも鎌倉の律宗寺院の中心である極楽寺三世長老の嘉暦元年（1326年）に没した善願上人の鍛造の分骨容器（舍利瓶）が出土したと伝えられている（修善寺町教育委員会 1964）。よって、高さ 2mを越える特大五輪塔を含む律宗系大型五輪が西大寺流律宗教団とその石大工集団によって、箱根や駿東・伊豆地域で 13世紀末葉～ 14世紀前葉に集中的に造塔された状況が見て取れるため、鬼岩寺の褐色の凝灰岩製五輪塔 C類の製作年代も 14世紀前葉に遡らせることも今後視野に入れたいと思う。

凝灰岩製宝篋印塔については主たる分布域が石材原産地である駿河西部域だけでなく、駿河中部域まで及んでいることが判明した。とくにA類については緑色凝灰岩製五輪塔A・B類との組合せになる寺院をあげると、瑞龍寺、泉秀寺、建穂寺周辺、平沢寺、梶原堂、一乗寺などである。瑞龍寺は駿河国府域内に位置した寺院、泉秀寺も駿河国府に隣接し駿河国守護に与えられた手越宿に關係した寺院で、駿河国府・守護所の直接の関与が考えられる有力寺院である。建穂寺も駿河国では国分寺消滅後久能寺と並ぶ寺勢を保っていた古代の山林寺院で、中世段階でも相当有力な寺院であったと思われる。平沢寺は久能寺、建穂寺に次ぐ拠点寺院である駿河七観音寺に列せられており、天台宗の久能寺との関係も考えられる有力寺院である。梶原堂については伝承では梶原景時とその一族を祭った堂であると伝えられてはいるが、所在地から見ると霊山寺との関係を考えざるをえない。霊山寺も駿河七観音寺に列せられる有力寺院で、直下に東海道を望む山上に位置している。また、付近には高橋宿も開設され、入江氏一族の勢力が及ぶ交通の要衝の地であるばかりでなく、政治的に安定した場所でもあったと思われる。一乗寺付近の古代東海道沿には白鳳期に創建された尾羽廃寺が位置し、古代からの名族であった庵原氏の氏寺とも考えられている寺院である（大川敬夫 2003）。尾羽廃寺は平安末期には廃寺となり、中世寺院特有の谷の奥まった場所に中世庵原氏の菩提寺となった一乗寺が創建されるが、東海道からはさほど離れた場所とはなっていない。

つまり、駿河中部地域での緑色凝灰岩製五輪塔と褐色凝灰岩製宝篋印塔A類の組合せをもつ寺院は、東海道沿の各地区の仏教勢力を束ねた有力寺院であると共に、政治的に求心力をもっていた武士が在住した居館が存在した場所の付近に建立された寺院でもあった。とくに中世の駿河国府に關係した瑞龍寺や泉秀寺の石塔のもつ意義は大きいだろう。また、旧清水市側でも梶原堂と霊山寺の関係、一乗寺と庵原氏の関係が石塔を通じて見えてきたと言えるのではないだろうか。

なお、これら褐色凝灰岩製石塔の分布範囲について前号でもまとめたが、一部の変更もあるため本号でも再度確認をしておきたい。緑色凝灰岩製大型五輪塔の分布は、西では旧浜北市大屋敷中

世墓、東では旧清水市清見寺ということになる。褐色凝灰岩製大型五輪塔は、西では磐田市新豊院墓地、東では旧静岡市結成寺である。褐色（緑色含）凝灰岩製宝篋印塔A類は、西では袋井市正福寺、東では旧清水市一乗寺となる。褐色凝灰岩製宝篋印塔B類は西では袋井市観正寺跡、東では旧清水市瑞雲院となる。

緑色凝灰岩製大型五輪塔は東は旧清水市域までと、西は真言宗寺院の勢力の強い天竜川西岸域まで分布域を広げるが、天台宗寺院の関与が想定される褐色凝灰岩製宝篋印塔A類や、西大寺流律宗寺院の関与が疑われる褐色凝灰岩製大型五輪塔 C類は遠江中部までの分布となっている。凝灰岩製石塔の石材の原産地は西駿河の岡部町・焼津市産であることは前号で明らかにしたが、その成立当初には平田寺の宝塔や緑色凝灰岩製五輪塔A類から肥後の石大工集団が關係していた可能性を本稿では指摘してみた。ただし、この仮説を補強するためにはもう少し細部の検討が必要であるため、今回は問題提起に留めておきたい。

しかし、この一群の石塔の製作開始時期は遅くとも 14世紀初頭に求められることは間違いのないと思われるので、鎌倉を中心とする忍性の弟子たちによる関東（鎌倉）での西大寺流律宗教団の布教活動と合致する時期とはなっている。駿河中・西部地域でも緑色凝灰岩製大型五輪塔A・B類の成立と西大寺流律宗教団を直接に結び付ける証拠はなくなったが、褐色凝灰岩製五輪塔 C類に忍性を中心とする律宗集団が駿河国で行った布教活動の姿の一端を垣間見ることができた。よって、遠江～駿河中部地域での石塔の造塔数を概観すると、13世紀代においては遠江に限り畿内からの搬入品と思われる花崗岩製大型五輪塔が特定の密教系寺院に小数が持ち込まれた。その後 14世紀初頭になると在地の緑色凝灰岩製五輪塔が生産されるに及び、広く遠江～駿河中部（興津宿以西）全域まで広がり、畿内からの花崗岩製五輪塔の搬入はなくなる。その直後、律宗系五輪塔の影響を受けた褐色凝灰岩製五輪塔 C類が成立し、間もなく 14世紀中葉になると時宗あるいは天台宗の勢力により遠江～駿河西部地域に盛んに搬入された箱根・東伊豆産安山岩製宝篋印塔A類の模倣により作られた褐色凝灰岩製宝篋印塔A・B類へ造塔主体が移り、生産量も増加する変遷過程が明らかとなった。これらの凝灰岩製石塔を中心とする造塔活動の背景には真言、天台両密教系寺院の僧侶の活動によるものが大ではあるが、西大寺流律宗教団と連動するように石塔製作が行われた要因も無視できなくなっていることを本稿では指摘しておきたい。

箱根・東伊豆山産安山岩製石塔については、天台宗系寺院に大量に持ち込まれた駿河西部地域の様相とは対象的に、駿河国府域の中枢にある久能寺が天台宗の寺院でありながらその周辺地でまったく同石材の石塔が発見されないことである。僅かに天台宗であったと考えられている慈悲寺の後身寺院である増善寺で、小型五輪塔の部材が確認できた程度である。久能寺の石塔群が

見出されていない現状では早計に結論を出すことは危険ではあると思うが、少なくとも駿河中部地域での有力な天台宗の寺院が久能寺と慈悲寺だけとは言えないので、石塔から見ると駿河中部地域と東伊豆の寺社勢力との関係は希薄であったと見るべきであるが、この点については今後の検討課題としておきたい。ただし、由比湊と關係した最明寺や霊山寺に關係した梶原堂の背後には入江氏の姿が確認でき、入江氏の海上交通の関与について今後検討を進めることが必要かと思われた。

今回の調査で最大の成果は、安山岩D製宝篋印塔の内容と分布範囲の見通しをたてることができた点である。安山岩D製宝篋印塔の内容はA1～3類への変遷と、関西型式の基礎をもつB類の2系統が確認できた。A1類は関東型式の特徴が色濃い褐色凝灰岩製宝篋印塔A類を模倣し、14世紀後葉に製作を開始したと思われる。しかし、笠だけは関西型式を模倣している特徴が見て取れるので、山梨県側の八ヶ岳系安山岩製宝篋印塔との関係も視野に入れるべきだろう。現在確認できている製作点数は、褐色凝灰岩製宝篋印塔には遠く及ばない小数生産である。分布域も富士川西岸の山間部に限られるため、小数の石大工集団の手による石塔群であることは明らかである。なお、関西型式の特徴を示す褐色凝灰岩製宝篋印塔C類は遠江～駿河中部域でもごく少数の確認に留まっており、数少ない褐色凝灰岩製宝篋印塔C類の笠を模倣した理由がどのように山梨県側と関係があるのか検討課題として残った。さらに、褐色凝灰岩製宝篋印塔A・B類の特徴の一つとしてあげられる笠のうち高い露盤の特徴も併存して見られるため、モデルとした褐色凝灰岩製宝篋印塔C類の中に高い露盤をもつ笠があった可能性もあろう。その中で 96にあげた松野阿弥陀堂の褐色凝灰岩製大型宝篋印塔の笠は関西型式の特徴を示すが、露盤の高さは低く二窓も刻まれない新しい特徴が認められたので参考にはならなかった。同一個体になる反花座を見ても二窓が省略される褐色凝灰岩製宝篋印塔B2類段階と見られるためこれまた参考にはならない。ちなみに同じ安倍川西岸に位置する数少ない 81の安山岩D岩製大型宝篋印塔の反花座と、この 96の反花座の形態を見るならば、96とはほぼ一致する時期と見られるのでこの石塔も安山岩D岩製宝篋印塔の開始時期を知るうえでは参考にならない。山梨県旧南部町の建忠廃寺の 265の反花座は大型品で 81よりも先行する肉彫りの花卉表現と二窓が刻まれ、160の中型品と共に最古の安山岩D製宝篋印塔の部材と見られ、安山岩D岩製宝篋印塔の生産開始を知るうえで参考となる資料であろう。残念ながら笠の特徴は分からないので、安山岩D製宝篋印塔の製作を開始した場所については、旧南部町であった可能性を指摘できるが、山梨県側なのか静岡県側なのか現状では確実なところは不明と言わざるをえない。今後、富士川西岸にあると想定される安山岩Dの原産地を探索することが問題の解決になると見ている。

安山岩D製宝篋印塔と褐色凝灰岩製宝篋印塔B類の分布範囲は興津宿を境とし、東を安山岩D製宝篋印塔、西を褐色凝灰岩製五輪塔B類が主体的な分布範囲となることが判明した。北の範囲は身延町域、東は富士市域と見られるが明らかではない。駿河中部地域の安倍川を境として東側の地域に客体として安山岩D製宝篋印塔が分布するのに対して、興津宿以東に褐色凝灰岩製宝篋印塔が基本的に搬入されることはない。例外としては旧南部町の浄光寺に緑色凝灰岩製宝篋印塔A類でも最古の形態になりそうな笠の部材が、1点確認できたのが唯一例であった。この傾向は新式石塔段階でも概ね踏襲されると見られるが、駿河中部地域で生産された砂岩A・D製小型五輪塔は東と北に搬入範囲を広げるようである。なお、清見寺は興津宿付近にあって東海道と興津筋の交差点という交通の要衝地に位置するばかりでなく、古代においては清見関を管理する寺として建立された由緒のある寺院（関寺）である。石塔から見ても緑色凝灰岩製五輪塔B類ばかりでなく、沼津市付近で産する白色凝灰岩製五輪塔が富士川を渡って駿河中部地域に唯一搬入された寺院でもあった。まさに、中世石塔から見ても駿河中部と東部の境目となる寺院であったことが判明したのである。石塔の分布からのみ確定的な歴史的背景に論及することはできないが、寺社集団のネットワークも清見寺を境として変わる可能性を指摘することができた。また、こうした寺社集団のネットワークを利用して物資流通が担われたと仮定することが許されるならば、安山岩D製宝篋印塔を造塔した寺社集団が甲府盆地に至る興津筋、由比筋、岩淵筋の3ルートで物資流通を担い、遠く甲府盆地の寺社勢力とも連携していた姿を想像するのは考えすぎであろうか。

遠江中部地域までは見られた伊勢湾ないし美濃から搬入された緻密な石材の14世紀代に遡ることのできる砂岩製石塔は、駿河中部地域では確認できなかった。しかしながら、砂岩A・D製宝篋印塔のなかに安山岩D製宝篋印塔と同じく、笠は関西型式、相輪・基礎・反花座は関東型式の褐色凝灰岩製宝篋印塔A・B類をかなり忠実に模倣したと思われる一群の宝篋印塔が確認できた。前号では古い形態を模した砂岩製石塔は、駿河西部地域でも島田市東光寺で緑色凝灰岩製大型五輪塔を模したと思われる砂岩A製大型五輪塔、島田市鶴田寺で砂岩A製大型宝篋印塔の二塔を確認した。この二塔と新式石塔に移行する間を埋める資料がないため、大型で古い特徴を示すが15世紀前葉以前の古式石塔に該当させることはできないと考えた。駿河中・西部地域で確認できる砂岩A・D製宝篋印塔の石材も同様に新式石塔に多用される石材であることから見て、新式石塔の大量生産に移行するにあたっての契機となった石塔であった可能性も指摘できる。駿河中部地域でも126の大慈悲院で砂岩A製大型宝篋印塔が確認できた。しかしながら、駿河中部地域のこれら古い特徴をもつ砂岩A・D製宝篋印塔は、中・小型品が主体で、形態も大慈悲院のように笠の

軒面と隅飾面が一面化した新式石塔に移行する特徴を示すものではない。製作開始時期を示す紀年銘資料もないため何とも言えないのが現状であるが、15世紀中葉以前14世紀後葉以降に製作されたものを含む可能性も完全には否定できなくなってきた。今後の検討課題としておきたい。

このように駿河中部地域の古式石塔から得られた歴史的背景は多岐に渡り、とくに安山岩D製宝篋印塔の様相と分布範囲の検討から見た宗教集団のまとまりについても論及できるようになってきた。しかしながら、残された検討課題も多く約束していた予定の紙面に近づいたので、次号の考察編まで研鑽を積み回答を提示したいと思う。

最後になりましたが、今回の石塔の調査にあたって調査を快諾して頂きました各寺院の住職様とその関係者の皆様方にはたいへんお世話になりました。凝灰岩製石塔の石材と駿河地域の石塔については本間岳人氏に、山梨県側の富士川流域の石塔については帝京大学山梨文化財研究所の畑大介氏にとくにご教示を頂きました。さらに、遠江中世石塔研究会の椿原靖弘、篠ヶ谷路人、島田市教育委員会の萩原佳保里・池田純、静岡市教育委員会の山本宏司・大川敬夫、富士川町教育委員会石川武男、静岡県埋蔵文化財調査研究所の河合修、小田原市教育委員会の佐々木健策、小田原市郷土文化館の大島慎一、元興寺文化財研究所の狭川真一・佐藤亜聖、王東町教育委員会の藤木一之の各氏にはご協力と資料提供を頂きました。この場を借りて関係の皆様方に深く感謝いたします。

（松井一明）

執筆者所属

松井一明＝袋井市教育委員会（袋井市立浅羽郷土資料館）

木村弘之＝磐田市教育委員会（磐田市旧見付学校教育資料館）

溝口彰啓＝牧之原市教育委員会

【参考文献】

稲垣甲子男 1984「富士川町の墓塔（中・近世初期）について」『中野遺跡―第2・3次調査報告書―』富士川町教育委員会他

大川敬夫 2003「尾羽廃寺」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員

会河合 修 2007「伝土肥七騎の塔」『日引』第10号 石造物研究会

狭川真一 2007「西安寺五輪塔群の形態的位置」『肥後国西安寺五輪塔群』玉東町教育委員会

瀬川欣一 2001『近江石の文化財』サンライズ出版

畑 大介 1999「中世～近世の石塔と社会」『南部町誌上巻』南部町（第7図 253～269再トレース出典文献）

畑 大介 2000「穴沢氏の石塔と廃寺化―南部町域を中心に―」『武田氏研究』第22号

畑 大介 2002「石塔からみた中世の富沢町」『富沢町誌上巻』富沢町（第7図 247～252再トレース出典文献）

畑 大介 2007「蒲原町周辺の中世石塔」『蒲原城総合調査報告書』静岡市教育委員会（第6図 222・230・234再トレース出典文献）

萩原佳保里・坂下俊介 2007「島田市菊川区で出土した瀬戸鉄釉印花文瓶子について」『静岡県考古学研究』No 39 静岡県考古学会

本間岳人 2006「浜岡町における石塔の特徴と変遷」『浜岡町史資料編考古』御前崎市

本間岳人 2006「駿河国石塔集録―中西部編―」『石造文化財』2 佛教石塔文化財研究所

（第4図 126・128～133、第5図 171・172再トレース出典文献）

松井一明・長谷川秀厚 2003「建穂寺」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会

松井一明 2005「静岡県における中世石塔の様相（2005年版）―とくに出現期の石塔を中心に―」『日引』第7号 石造物研究会

松井一明・太田好治・木村弘之 2005「遠江西・中部地域の中世石塔の出現と展開―静岡県下における中世石塔の研究1―」

『静岡県博物館協会研究紀要』第28号 静岡県博物館協会

松井一明・木村弘之・溝口彰啓 2006「遠江中・東部地域の中世石塔の出現と展開―静岡県下における中世石塔の研究2―」

『静岡県博物館協会研究紀要』第29号 静岡県博物館協会

松井一明・木村弘之 2006「島田市東光寺の中世石塔について」『東光寺五輪塔遺跡』島田市教育委員会

松井一明・木村弘之・溝口彰啓 2007「駿河中・西部地域の中世石塔の出現と展開―静岡県下における中世石塔の研究3―」

『静岡県博物館協会研究紀要』第30号 静岡県博物館協会

松井一明 2008「鬼岩寺中世墓・石塔群から見えてきた歴史的背景」『藤枝市鬼岩寺の中世墓・中世石塔群調査報告書』藤枝市郷土博物館

吉澤 悟 1998「沼津市靈山寺の中世石塔群の調査」『沼津市史研究』7 沼津市教委員会

磐田市教育委員会 1993『一の谷中世墳墓群遺跡』

鎌倉国宝館 1977『鎌倉の五輪塔』（2001に再刊）

菊川町教育委員会 2001『土橋遺跡』

修善寺町教育委員会 1964『伊豆修善寺町の仏教遺物』

箱根町教育委員会 1993『元箱根石仏・石塔の調査』

静岡県 1997『静岡県史通史編2中世』

静岡県教育委員会 1994『静岡県歴史の道 東海道』

静岡県教育委員会 1998『静岡県歴史の道 身延街道』

玉東町 1995『玉東町史通史編』

藤枝市郷土博物館 2008『藤枝市鬼岩寺の中世墓・中世石塔群調査報告書』

山梨県 2004『山梨県史資料編7中世4考古資料』

静岡近代美術年表稿 明治編（上）

立花義彰

本年表稿は、明治前半の県下の美術に関わる活動を主な対象とし、事項の典拠を主として静岡県立中央図書館所蔵の『静岡新聞』『重新静岡新聞』『函右日報』『静岡大務新聞』『東海暁鐘新報』『静岡民友新聞』『静岡新報』等の新聞マイクロフィルム及びリプリントに求め、更に市町村誌史、先行研究、最近刊行の書誌類等によりそれらの欠を補って作成した。明治後半については、「静岡近代美術年表稿 明治編（下）」（本会紀要第 30号）又大正時代については「同 大正編」（同第 29号）を参照されたい。

明治 9(1876年)創刊『静岡新聞』は明治 17(1884年)廃刊となっている。『東海暁鐘新報』は明治 14年創刊で『東海暁鐘新聞』『絵入東海新聞』等が引き継いで刊行されたが、共に現存する号は多くない。『函右日報』は明治 12(1979年)の創刊、同 18(1885)年に経営難の為『静岡大務新聞』へと合流した。『静岡大務新聞』は経営難の前出『静岡新聞』を引き継ぎ、明治 17(1884年)創刊、翌年には、『函右日報』も合併し、県下最大の新聞となるも、明治 24(1891年)に廃刊。静岡民友新聞は明治 24(1891年)創刊、静岡新報は明治 28(1895年)創刊、共に現在の『静岡新聞』の前身である。明治 24-30年分は欠号多く、本年表稿また遺漏と杜撰は否めないが、極力記事の採用に務めた。

本年表稿が対象とする時期の県内画壇については、丹青社の名が知られるが、石井眞一著『静陵画談』中の記述がそのまま踏襲されており、基本的な部分も含めて十分な検討がなされて来たとは云い難い。石井が明治 15(1882年)とする設立だが、本年表稿及び静岡県史年表では記事を根拠に明治 17(1884年) 10月 12日を充て、丹青社緒言にある「明治 15年1月静陵の同志相謀り一社を設置」し明治15年9月に開催された静岡展覧会は、謂わば丹青社の前身と考えている。

丹青社は、「絵画各派の別なく静岡県下三州の有志者相盟約して美術の本源を振興する目的とし、通常・賛成社員を募集、一社を設立し隔月第二日曜日を以って静岡勸業物産陳列場に於いて社員の展観を集め当日午前研究会を開き午後席上揮毫衆庶の参観を許す。」もので、「毎回展観の内優等の画を撰び賛成社員へ抽籤を以って贈与す。」と多分に抽選画会 성격の強いものではあったが、賛成社員他が名誉社員の県令、特別社員等を含め150名以上、通常社員100名以上、社員総数は 300名以上の大所帯となった。初代社長には鈴木香峰が就任、副社長小出東嶂、幹事長百木太撫がその任に当たった。当初9月 15日に予定された

発会は暴風雨の為に延期され、10月の広告でわざわざ「晴雨を論ぜず」発会としているのはそれによるものと推定される。

10月 12日の発会式では、県令欠席の為、永峯弥吉大書記官による祝辞の代読、小出東嶂の答辞、勸業課員の祝辞があり、祝宴の後、抽籤が行われた訳だが、正午からの一般の縦覧では、雨天にもかかわらず 850名が来場、抽選以外にも売約相次いだ事が記されている。なお、総出品点数については不明である。

12月14日の第2回については 90余幅、入場者 1235名で、13点が抽選頒布された。

第3回は翌明治 18年2月 78日の 2日にわたって 900余の入場者があったが、静岡に滞在中であった田能村直入の出品が話題となった。

第4回は 4月 11,12日で、入場者数 785名。

第5回は 6月 13,14日に行われ、入場者数 1218名。田能村直入の出品があり。また、鈴木香峰の逝去に伴って役員改選の投票を行った。

第6回は 9月 12,13日開催。入場者 1200余。

第7回は 11月 7日開催。

これらを概観すると 90点前後の作品が展示され十数点を抽選頒布、他若干の売約のある画会であると見做せる。但し9月開催の第 6回から新聞に展評記事が登場する事は意義深い。なぜなら社則で「同派二非ザレバ猥二品評ヲナザザルモノトス」とした後進的なこの画会ではあるが、同月の愛知県絵画共進会への静岡県側からの出品と併せ、旧来の画派・流派の結束力の低下、文化面への新聞の影響力の増大、つまりは新たな時代の展覧会形式への移行を象徴しているからだ。

しかしながら、11月 17日の百木太撫逝去以降、この画会そのものは早くも明らかな退行と衰退に向う。

明治 19年 1月 12日第8回開催の後、丹青社員により2月に相次いで 2回の画会が勸業物産陳列場以外の場所で開催された。

第9回は3月 13日に行われるので、この頻繁な開催は如何なる事情によるのであろうか。

第 10回は 5月 8,9日開催。第 11回は 7月 10,11日開催。その後の 9月 26日の第 12回は、「今回に限り第四の日曜日すなわち 26日静岡市寺町菩提樹院において開会」するのだが、11月 14日菩提樹院で開催を予告した第 13回は、15日同じ寺町の少林寺で行われた模様で、翌明治 20年1月9日に予定された会も延期され、2月 13日菩提樹院で開催と、不定期な開催となっていく。

明治 21年3月 24日、臨済寺での五百羅漢会に併せ、追福書画

会と銘打った席上揮毫抽籤画会が行われるが、これは同寺蔵の小出東嶂と百木太撫の遺作《五百羅漢図》を意識したものと思われる。

以降の活動については、記事を確認できていないが、丹青社は、時代に取り残されて次第に衰微していったのであろう。

強調して置きたい事は、この活動が勸業物産陳列場や更には産業振興の施策と不可分に結びついていた点で、これは昭和期の静岡県美術協会においてもなお色濃く残っていた点である。また、県単位という公的な側面を持ちながらも、結果として静岡市中心、次第に恣意的で趣味的な集団に過ぎなくなっていく点、中央画壇との密接な関係を欠く点、会則と現実との乖離等。それらにおいて丹青社の盛衰は、その後の諸活動の行く末をも暗示していたと言えよう。

その後の諸展覧会、例えば、浮月楼を会場とした民間の静岡美術会の活動、大正時代の嶽陽美術展、昭和に入ってからの間及び官による静岡県美術協会の活動、これらを詳述する事は本年表稿の導論としての拙文の役割を逸脱するので省く。

よって結語に更え、これらに関わる郷土の先駆者達、また久しく忘却されて来た明治南画壇の元々の報告者石井眞一に敬意を表し、この地の美術活動を祝ぐ意味で、静岡の洋画について述べたものではあるが、拙蔵村本山雨楼蔵書印のある『静陵画壇』より以下を引用し以って結びとしたい。

「けれど曙光既に動いて、樹色漸く鮮やかならんとする傾向があることは争われぬ事実である、而して又欣ぶべき現象である」

他に市史・市誌、町史、郡誌類を参照した。

凡 例

M ./ 明治 年 月 日
・ 月日不詳
《 》 作品名
望月紫明・源一 姓 +号、
中点の後は、名又は別名、別号

静岡	『静岡新聞』
重新	『重新静岡新聞』
暁鐘	『東海暁鐘新報』『同新聞』
絵入	『絵入東海新聞』
函右	『函右日報』
大務	『静岡大務』
民友	『静岡民友新聞』
新報	『静岡新報』
出品目録	東京国立文化財研究所編『内国勸業博覧会美術品出品目録』『明治期美術展覧会出品目録』『明治期万国博覧会美術品出品目録』
美術年鑑	復刻版『日本美術年鑑』
教員総覧	金子一夫著『近代日本美術教育の研究：明治時代』『明治期図画教員総覧』

参考文献

石井眞一著『静陵画談』1911
菅沼貞三監修『定本・遠州の南画』静岡郷土出版社 1989
沼津市明治史料館『近世・近代ぬまづの画人たち』1989
中道朔爾『遠州画人伝』浜松史蹟調査顕彰会 1995
『近世・近代磐田の画家：磐田市資料叢書』1999
富士市立博物館『幕末の間屋役吉原宿の鈴木香峰』2001
平野美術館『示迹山本要寺所蔵柴田泰山』2003

静岡近代美術年表稿　明治編（上）

立花義彰

明治元年　戊辰

- 5/29　柴田竹亭・普門、東京に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 7/8月　徳川慶喜、家達静岡入り。（静岡市史）
- ・　　益頭峻南、川村清雄、静岡に移住。
- 7/　　小林清親、静岡へ移住、新居関に勤務。
- 10/12　大村西崖、富士郡に生れる。（美術年鑑 M 44）

明治2年　己巳

- 4/19　小島無量、静岡に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 9/ 5　稲葉小千・斌、静岡県に生れる。（美術年鑑 T 1）
- ・　　望月雲莊、江戸より三方原に移住する。

明治3年　庚午

- 3/10　石川笠水・林平、掛川に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 9/ 5　吉田柳蹊逝去、享年 52。（遠州画人伝）
- 12/　　鈴木栄暁・観太郎、沼津に生れる。（美術年鑑 M 44）
- ・　　岩橋教章、静岡学校附属絵図方となる。

明治4年　辛未

- 2/25　直江敬年・源三郎、静岡県に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 3/ 3　川村清雄、渡米。
- 5/20　市村聲外・道鳴、浜名に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 6/　　長谷川晩雪、静岡県に生れる。（美術年鑑 S2）
- 8/ 8　石川欽一郎、静岡に生れる。
- 11/ 4　小野秋杏・禮吉、藤枝に生れる。（美術年鑑 M 44）
- ・　　河鍋曉斎、沼津、修善寺を訪う。（韮山町史）

明治5年　壬申

- 9/12　土佐光一、京都に生れる。（美術年鑑 T 1）

明治6年　癸酉

- 9/　　鈴木香峰《青緑山水》《富士》ウイーン万博出品。（出品目録、鈴木香峰展図録）
- 山本安兵衛寄木細工、依田安蔵籠細工、ウイーン万博出品。（重新 M98/16）
- 9/27　松本雲松逝去。（南伊豆風土誌）
- 11/ 1　都築真琴、静岡県に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 12/20　山田縫太郎、浜松に生れる。（美術年鑑 M 44）

明治7年　甲戌

- ・　　鈴木香峰、学校建設に尽力し褒賞金を受ける。（静岡 m25）
- ・　　岩田松濤（岸浪柳溪兄）、駿東郡古澤に住む。
- ・　　小林清親、上京。
- 8/24　彦坂繁三郎、静岡に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 12/6　大草水雲逝去。（遠州画人伝）
- ・　　百木太撫の安倍川架橋記念版画頒布。（静岡市史年表）

明治8年　乙亥

- 1/　　一運斎国秀、沼津長谷寺の観音像を描く。
- 3/ 8　白井小石・長吉、浜名郡吉津に生れる。（美術年鑑 M 44）
- ・　　遠藤政徳、浜松師範学校に勤務。（教員総覧）
- 5/20　萩原青陵・元次郎、静岡に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 8/14　江間春聲・良吉、中泉に生れる。（美術年鑑 M 44）

明治9年　丙子

- 5 /　　山本安兵衛寄木細工、フィラデルフィア万博出品。（静岡 M108/27）
- 7/ 7　長谷川梅山・一丘、掛塚に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 9/　　久能山に家康お手植の梅を移植し碑を建設。碑文は勝海舟。（重新 9/16）
- 11/　　写真師松崎晋次来静。（重新 12/1）

明治10年　丁丑

- ・　　遠藤政徳、静岡師範学校に勤務。（教員総覧）
- ・　　萩原石斎、絵画展覧会於名古屋にて優賞。（静岡画談）
- 3/ 5　菊地晁塘逝去。（重新 3/10）
- 4/　　鈴木香峰古稀賀筵予定。（重新 3/16）
- 6/29　飯塚聖林、吉田に生れる。（静岡画談、美術年鑑 M 44）
- 7/27　詩歌連俳生花書画避暑会於笠井安香楼（ 28）。（静岡 7/10）
- 8/21　第1回内国勸業博覧会於東京上野公園（ -11/30）。静岡県より、鈴木香峰、望月雲莊、後藤寅吉、柴田正平、百木太撫、富永継次郎、入江長八他出品。（出品目録）
- ・　　滝和亭、熱海富士屋に滞在。（熱海市史）

明治11年　戊寅

- 4/ 3　菊地晁塘一周忌書画会於菩提樹院、（静岡 3/26）
- 4/　　徳川家より久能山東照宮へ宝剣三振の奉納。（静岡 5/2）

- 5/12　鈴木香峰七十一賀筵於瑞光寺。（静岡 4/26,5/9）
- ・　　掛川の田島楽道、楽焼制作。（静岡 5/13）
- 8/18　野崎氏、沼津に写真場開場。（静岡 9/1）
- ・　　入江長八、澤地に寄留。沼津にて評判。（静岡 9/4）
- 9/　　成島柳北、熱海を訪う。（熱海市史）
- 10/5,6　鈴木香峰古希祝賀会於三島世古家。（鈴木香峰展図録）
- 10/20　久能山東照宮修理完成臨時祭（ 24）。廟所の参拝許可。（静岡 10/15）
- 11/ 3　明治天皇静岡行啓（ 7）。（静岡 11/7,8,9）
- 磯部菊溪《双鶴図》天覧賜る。（駿東郡誌）
- 11/　　鈴木香峰、小林藕塘の作、物産陳列場に展示。（静岡 11/13）

明治12年　己卯

- 5/　　可睡斎に絵画の寄進。（静岡 6/20）
- 5/　　鈴木香峰、客月来修善寺に滞在（ 6/）。（函右 6/18）
- 5/5　　入江長八《不動尊》開眼法会於龍澤寺。（静岡 5/16，函右 7/4）
- 5/　　写真師水野広告。（静岡 5/14,31）
- 5/19　臨済寺什物縦覧。（静岡 5/16）
- 6/29　吉岡星秋追遠会。（静岡 7/1）
- 7/ 1　グラント将軍、清水に着港、7/2来静。（静岡 7/2,4,5）
- 8/　　グラント将軍、三島に来る。（静岡 8/10,15,20,21）入江長八の作品を見る。（函右 8/19）
- 10/18　岸岱追善詩歌連俳書画展覧会於浜松善正寺（ -19）。（函右 7/16）
- 10/　　稲垣南洲、静岡に滞在。（函右 10/7）
- 11/11　渡辺小華来静、会鶴亭にて揮毫。（静岡 11/12）

明治13年　庚辰

- 2/20　橘和一、田方郡に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 2/23　大塚翠崖逝去。（志太郡誌）
- 2/25　書画展覧会於笠井福来寺。小栗松霰、水野松巖、望月雲莊他揮毫。（函右 1 /4,7,9,10,13,2/27）
- ・　　静岡市呉服町一丁目三番地望月惣七、画絹画仙紙販売広告。（函右 3 /12,16,24,25）
- 3/　　望月紫明・源一、静岡市に生れる。（静岡画談）
- 4/　　高野迎山、浜松に滞在。（函右 4/14）
- 4/21　静岡県物産陳列所落成。（函右 4/18,21,22,23,24）
- 5/19　今川忌什宝展覧於臨済寺。（函右 5 /12）
- 5/23　茶匠鉄斎翁送別会於磯馴亭。（静岡 5/21,22,25）
- 6/ 6　矢口謙斎追善書画会於蓮永寺。中村敬宇、古賀沙蟲、向山黄村、高須小梅、木村二梅、永井介堂、中根淑等来静。大迫鶴谷、永峰舟所、蜂屋湖月、吉岡星秋、村上帰雲、小林藕塘、百木太撫等。（函右 5/25,26,27,28,29,30,6/3,5,6,8静岡 6/8）

- 7/ 3　可睡斎書画聚会古画縦覧会（5）蝸庵老人、桂所、雲莊、迎山、松霰、愛山他揮毫。（函右 6/12,13,16,17,20,22,23,26,27,7/1,6,10静岡 6/26,7/10）
- 8/1　　清楽書画煎茶の清宴於臨済寺、市川万庵、津田旭庵、三辰女史来静。（静岡 7/27,28,8/3）
- 8/ 4　三辰女史餞別会。（静岡 8/6）
- 8/13　書画書籍盆栽縦覧並二煎茶会於焼津神社。田中董丘、内藤杏圃、嶋田奚疑、百木太撫、小野杜堂、九如、平山陳平他。（函右 7/24,27,30,8/3,4,5,7,10,11,12,17）
- 10/ 7　書画詩歌俳諧煎茶月琴須摩琴暮象戯雅集於萩江露八貸席。（静岡 10/5,9）
- 10/17　書画詩歌囲碁煎茶插花俳諧大会於沼津西光寺。（静岡 10/10）
- 11/10　柏園居士追遠会於沼津。村上帰雲主催。（函右 11/17,18,21,26,27,28,29,30,12/5,8,9,10,12,14,15,16,17,18,19）
- 11/　　橋本芳郊、静岡市に生れる。（静岡画談）

明治14年　辛巳

- 1/ 8　日高秋山来静し揮毫。1/19島田掛川浜松へ向う。（函右 1/12,14,19）
- 1/20　盍簪社例会於掛川。（函右 2/26）
- 3/ 1　第2回内国勸業博覧会於東京上野公園（ 6/30）。静岡県より天野雄成《墨画花卉図》、鈴木香峰《水墨山水》、小林藕塘《花卉果物ノ図》、小出東嶂《青緑金碧山水》、市川左一郎《着色花鳥ノ図》、古田平八《書》、丘円明《書》出品。（出品目録）
- 5/ 3　川上冬崖、熱海にて自殺。（朝野 5/6 東京日日 5/9）
- 4/11　藤沢梅南逝去。（ぬまづの画人）
- 4/22　小学育生舎教育展覧会於志田郡上青島村（ 26）。（函右 4/13,20,26,29,30,5/1）
- ・　　久能山東照宮詞官出嶋竹斎、徳川家達邸より宝刀を携え帰る。（函右 5/12）
- 5/11　小出東嶂、修善寺、熱海より帰る。（函右 5/12）
- 5/15　煎茶会於静岡浪花楼。骨董家桜井荒川兩氏主催。（函右 5/17）
- 5/16　山岡鉄舟、愛知県出張の為、5/16沼津、5/17静岡、5/18金谷に滞在。6/17金谷より静岡に到着。（函右 5/17,6/17静岡 5/19,22,6/3）
- ・　　立花雲閣来静。（静岡 6/14）
- 6/ 6　川上冬崖追善会於会鶴亭。（静岡 6/8）
- 6/12　書画会於橋本酒造。（静岡 6/14）
- 6/19　天野履堂追善会於島田林入寺。書画展覧及び揮毫。百木太撫、小出東嶂、田中薰丘、鶴殿霞舟、島田菜疑、飯塚飯高、廣瀬他。（函右 6 /22）

- 6/19 盍簪社第二年雅筵於掛川。（函右 6 /26
- 7/20 書画小説の催於富士元市場村。（函右 7 /24
- 7/22 磯部菊溪逝去。（函右 7/24 或いは 7/21逝去。
- 8/10 三島大社奉献書画他展覽於三島大社。(函右 7/26,27,8/25
- 8/20 書画骨董貿易会於周智郡上山梨村。（函右 8/14
- 9/19 谷臨川逝去、行年 72。（静岡市史年表）
- 9/22 櫛田正斎、熱海より修善寺に來遊。（函右 10/9
- 10/26 石川依平追悼会於掛川桜園精舎。
（函右 9/21,11/68
- ・ 猪瀬北江來靜、揮毫。（静岡 9/13函右 10/16,18曉鐘 10/19
- 11/ 写真展覽会於浜松玄忠寺。（函右 10/11
- 11/ 5 三松蓮永寺本堂落慶。（曉鐘 11/8
- 11/ 6 新書画大展覽会於浜松玄忠寺。渡辺小華、中村南陽他揮毫。（函右 11/9
- 11/ 6 望月雲莊画会於浜松玄忠寺。（遠州南画）
- ・ 胡鉄梅、司馬老泉、浜松、掛川、静岡を訪れる。（函右 11/24,12/1
- 11/25 親鸞上人真筆展覽会於華陽院。
（曉鐘 10/14,11/25,29,12/7
- 11/26 松岡環翠、滞在先の修善寺より來靜。（函右 11/24,29
- 12/ 5 王 琴 仙 來 靜 、 会 鶴 亭 に 滞 在 し 揮 毫 。 （ 函 右 11/24,12/6,8,13,15,20,23M 15,1/4,7,10曉鐘 12/7,13
- ・ 鷹野迎東、來浜。（函右 12/1
- ・ 柳田正斎來靜、会鶴亭に滞在し揮毫。（曉鐘 12/15
- ・ 松岡環翠來靜、会鶴亭に滞在。（曉鐘 12/15
- 12/14 川村清雄、帰国。（曉鐘 12/17

明治 15年 壬午

- 1/28 下田春興・新左衛門、伊東に生れる。（美術年鑑 M 44
- 3/20 竹本石亭來靜、豊島、会鶴亭に滞在、揮毫。
（函右 3 /22曉鐘 3/23静岡 3/30
- 3/20 野々村鳳山画会於魚峰。（函右 3/24曉鐘 3/25
- 3/28 入江長八《不動尊》開帳於龍澤寺。（静岡 4/7
- 3/30 庄河松陰來靜、会鶴亭に滞在し揮毫。（静岡 4/1
- ・ 王泰園、來靜。（函右 5/5
- ・ 渡辺小華、関根痴堂來靜。（函右 5/5
- 5/10 吉岡星秋送別会。（函右 5/20
- ・ 中山霞湖、見附に滞在し揮毫。（函右 5/20
- 6/ 2 王泰園招待雅会於蓮永寺。（函右 6/3
- ・ 遠藤政徳編輯『小学図画法』出版。
（函右 6/21,7/26,28,29,8/4,5,7,17
- 7/31 同日付時事新報の徳川慶喜揮毫に應ずるの記事は虚報。
（函右 9 /15

- ・ 目賀田芥庵、西尾蘭溪編『書画名公欸譜』出版。
（函右 9/28,29,30,10/2,4,7,14,21,25,26,27,28
- 9/ 9 静岡大展覽会於宝台院（ -10）。清標社主催。百木太撫、小林藕塘、小出東嶂、西尾蘭溪、磯谷利三二、荒川政則、新聞原泉堂、望月亀翁、杉本文明堂、福井喜 、桜江謙甫、大山梧枰他。
（函右 5/6,8,9,10,11,12,13,15,16,17,18,20,22,23,24,25,27, 29,7/27,29,8/1,9/7,8静岡 3/24,9/8)
- ・ 遠藤政徳、鈴木香峰他 28名、内国絵画共進会出品。
（函右 10/16
- 10/21 雪丸為山兩居士追善書画会於豊島。（静岡 11/14
- ・ 宗像雲閣來靜、会鶴亭に滞在し揮毫。（函右 10/23
- 11/ 3 囲碁書画会於三島世古宅（ -4）。（函右 10/29
- 11/ 鈴木重之追善書画会於三島世古家。鈴木香峰他。
（沼津 11/4,7菰山町史）
- ・ 巖谷一六來靜、揮毫。（函右 11/8
- 11/ 8 山下青城・桂、笠井に生れる。（美術年鑑 M 44

明治 16年 癸未

- 1/14 絵画共進会各家珍藏書画展觀於浅間神社（ -16）。
（静岡 1/9函右 1/11,13,14,16,17
- 1/18 田能村直入及び書家易堂來浜、滞在し揮毫。（函右 1/24
- 2/21 遠藤政徳、『小学図画法』売り捌き書肆から天野重兵衛を除く。（函右 3/7
- 3/ 岩橋教章逝去。
- 3/25 詩歌連俳画会於見付宣光寺。（函右 3/9,11,13, 14,15,16,17,18,20,22,23
- 4/ 1 臨濟寺仁王門落成式及び宝物縦覧（ -10）。
（函右 3/13,27,29,4/4,5,6,27
- 5/ 遠藤確山琴碁書画会於磯馴亭。（静岡 5/13
- 7/ 川路新吉郎、静岡師範学校に勤務（～ M 25）。
（教員総覧）
- 7/ 8 大池波光女史來靜、魚峰に滞在し揮毫（ -10）。
（函右 7/7,12,9/12
- 7/16 森春涛來靜。（静岡 7/18
- 7/ 篆刻家齊藤拜石來靜。（静岡 7/31函右 8/2,3
- 8/23 吐月峰柴屋寺へ古社寺保存費の下付。（函右 9/7
- 8/ 副島種臣、修善寺に滞在。（函右 9/11,12
- 8/ 成島柳北、修善寺に滞在。（函右 9/12
- 10/ 3 觀光文庫縦覧開始。
（函右 M 17,3/26,29大務 M 17,3/27
- 10/ 吉田桂所逝去。（曉鐘 M 18,8/24
- ・ 篆刻家野村鉄竹來靜、魚伊に滞在。（函右 11/13
- 12/22 清国書家衛鏞生來靜、会鶴亭に滞在。（函右 12/23,25

- 12/ 清国書家衛鏞生來浜。（函右 M 17,1/19
- ・ 熊谷青城、花鳥画2点を絵画共進会に出品、賞状を受ける。（遠州南画）

明治 17年 甲申

- 1/ 長野栗山、掛川に滞在し揮毫。（函右 4 /18
- 2/ 足立半翠、肖像模写の広告。（函右 2/7,8
- ・ 青山延寿來靜。（函右 3 /1
- 2/29 書画会於宝台院。（大務 2/29
- 3/28 清見寺羅漢堂落成、宝物陳列（ -4/7）。（大務 2/27
- 3/19 詩歌書画小集会於会鶴亭。（大務 3/19
- 4/ 3 臨濟寺摩利支天例大祭及び宝物展覽（ -4）。
（函右 4/2大務 4/2
- 4/ 6 書画会於三島世古宅。吉岡星秋他。（大務 4/5,11
- 4/ 鳥尾小弥太、得庵來靜。（大務 4/16
- 4/ 長野栗山、歸京の序次來靜、揮毫。（函右 4 /18,7/10, 11,13,15,16,17,23,24,25,8/3,6,7,8
- 4/27 書画会於遠州鈴木宅（ -27）。（大務 3/23,25,27,29,4/1, 2,3,5,6,8,9,10,11,12,13
- 5/ 4 菊地晁塘翁建碑追善書画展觀会於菩提樹院。（函右 5/2,4,6大務 4/30,5/2
- 5/ 平山陳平、警視庁赴任につき上京。（函右 5/24,27大務 5/24
- 6/ 一昨年盜難にあった東照宮藏品発見される。（大務 6/10
- 6/29 丹青社参加呼掛け。（函右 6/29,7/1,2,3,4,5,9,8/20,21, 22,26大務 6/29,7/14,5,6,8,9,10,8/19,20,21,23,24,25, 9/19,20,21,23,25,27,28
- 6/29 書画縦覧於見附井沢屋。鈴木善作主催。（大務 6/26,27,28,30
- 7/23 吉岡星秋來靜、県下を廻る。（函右 7/18,8/2,6,7大務 7/19,24
- 7/26 書家市川万庵、修善寺、遠州よりの帰途來靜。（大務 7/24
- ・ 山岡鉄舟書頒布広告及び取消広告。（大務 8/29,30, 9/2,5,6,7,10,12,14,19,21,25,27,28,30
- 9/ 3 新古書画展覽会於掛川中学校。（大務 9/5
- ・ 遠藤政徳、掛川中学に勤務。（教員総覧）
- 9/15 柴田泰山逝去、享年 67。（本要寺図録）
- 10/12 丹青社発会式及び研究会於県勸業物産陳列館。
（ 函 右 9 /24,26,10/1,2,3,9,10,11,14,15大務 9/21,23,25,26,27,28,10/9,10,11,14,15東洋絵画叢誌 no1,2
- 11/ 7 西田春耕、修善寺に滞在。（大務 11/12
- 11/ 鈴木香峰來靜。（大務 11/12
- 11/ 9 後藤松湖書画小集会於妻良善福寺。（大務 10/29
- 11/ 詩人鱸松塘來靜、会鶴亭に滞在。（函右 11/29
- 12/ 7 世古温、三島に生れる。（美術年鑑 M 44

- 12/14 丹青社第2回絵画研究会。
（函右 12/16静岡大務 11/29,30,12/2,4,5,6,14,16,17
- ・ 中水篁洞、氣賀関根屋に滞在。（大務 M 19,3/17
- ・ 田能村直入來靜、常光寺に滞在し揮毫。（大務 M 18,2/10

明治 18年 乙酉

- 1/ 『奥山吟詠集』（引佐町史）
- 1/11 雅会於修善寺。可楽斎、後藤松湖他。（大務 1/15
- 2/ 7 丹青社絵画研究会 第 3回 於勸業物産陳列場（ -8）。
抽選により作品を頒布。來靜中の田能村直入、作品出品。
（大務 2/6,10,13
- ・ 書画会於沼津開亭。2/15開催予定するも延期。
（大務 2/13,17
- 2/ 赤塚光山《詩絵蛇》公開於初川亭。（大務 2/25
- 3/ 為永詠二亡母三周忌追福書画雜談会於顕光院。
（大務 3/11,12,13,14,15,18
- 3/25 中水篁洞送別会於氣賀蓮照寺。（大務 3/17
- 3/ 須佐棠園・進一、庵原に生れる。（美術年鑑 M 44
- ・ 浜松で斉藤太郎の洋画《高砂丸》話題となる。（大務 3/24
- ・ 外国人からの大津絵注文頻り。（大務 3/21
- 4/ 臨濟寺摩利支天例祭及び宝物展觀（ -4）。（函右 3/31, 大務 3/28
- 4/11 丹青社絵画研究会第 4回於勸業物産陳列場（ -12）。
（大務 4/5,12,14
- ・ 徳川家達久能山東照宮へ歴代将軍の書画を寄贈。(大務 4/16
- ・ 津田南涛來靜、5/2書画会於会鶴亭開催。（大務 5/3,5,13
- 5/ 7 村田香谷來靜、会鶴亭に滞在し揮毫。（大務 5/9
- 5/28 鈴木香峰逝去。（大務 5/30
- 6/ 7 書画小集会於臨濟寺。村田香谷他揮毫。（大務 6/3,9
- 6/ 7 鈴木夏雲送別書画小集会於賀茂郡嘉納屋。（大務 6/14
- 6/13 丹青社絵画研究会第 5回於勸業物産陳列場（ -14）。（大務 6/9,10,11,12,16,17,18,19
- 6/21 書画囲碁抹茶雅会於見附宣光寺。（大務 /）
- 7/ 1 井上香塙送別書画会於修善寺野田屋。（大務 7/1,7
- ・ 小出東嶂、百木太撫《五百羅漢図》を臨濟寺の為に制作。（大務 7/29,12/3
- 8/ 1 木下奎太郎、伊東に生れる。（美術年鑑 M 44
- ・ 相良の石油会社、桜井組設立の為、三舟の揮毫を頒布。
（大務 7/5,31,8/1
- ・ 菊地九江、下田に滞在。（大務 8/16
- 8/18 音羽山清水寺觀世音菩薩開帳（ -24）。（大務 8/23
- 8/31 川村川谷懇親会於芙蓉楼、9/1於求友亭。（曉鐘 9/2
- 9/12 丹青社絵画研究会 第 6回 於勸業物産陳列場（ -13）。
（大務 9/10,15,17曉鐘 9/12,15

- 9/15 三府四県私立絵画共進会於名古屋に、小出東嶂《蜀道山水》小林藕塘《花卉》鶴殿霞舟《山水》久山梅岳《花鳥》内藤杏蘭《山水》萩原石斎《青緑山水》他出品。萩原石斎、五等賞を得る。（大務6/209,16,18,10,13静岡画談）
- 9/30 雅客集会於臨済寺内長学寺。（暁鐘 9/30）
- 10/ 1 久能山東照宮臨時祭、宝物縦覧（ -4）。（大務9/20,10/7暁鐘 9/16,10/2）
- 10/19 仙波均平、東京に生れる。（美術年鑑 T 1）
- 11/ 3 書画俳諧展覧会於法永寺。（大務 11/8暁鐘 11/3,10
- 11/ 7 丹青社絵画研究会第 7回於勸業物産陳列場（ 8）。（大務 11/10,11）
- 11/ 8 囲碁書画会於三島世古宅。（大務 11/1）
- 11/17 百木太撫逝去。（大務 11/18,19,12/3暁鐘 11/18,19
- 11/ 野口小蘋、見附井沢屋に滞在揮毫。来春再訪予定。（大務 11/26）
- 11/29 百木太撫追善会於臨済寺。百木太撫藏数百幅縦覧、丹青社員弟子等三十余名揮毫。（大務 12/1）
- ・ 山岡鉄舟、勝海舟、奥山方廣寺へ揮毫百枚を寄付。（大務 12/4
- ・ 三枝曲江療養中、池谷松石、豆州漫遊。（大務 12/17,12/26 岩崎竹堂逝去。（ぬまづの画人）

明治 19年 丙戌

- 1/ 9 丹青社絵画研究会 第8回 於勸業物産陳列場（ -10）。（大務 1/78,12,13暁鐘 1/8）
- 2/11 丹青社書画会於美濃屋。（大務 2/11）
2. 14 丹青社大書会於顕光院。（大務 2/11,13,16暁鐘 2/11,12,16
- 2/15 池谷家入札売立於大宮町平等寺（ 25）。（大務 1/21,26,27
- 2/19 第5回精農者表彰式に書画の賞品。（大務 2/19 浜北市史）
- 3/13 丹青社絵画研究会 第9回 於勸業物産陳列場（ -14）。（大務 3/11,16,17）
- 3/24 百木太撫、小出東嶂《五百羅漢図》完成分 12幅、彼岸中に縦覧於臨済寺。（大務 M 18,12/3, M 19,3/18,24,26）
- ・ 篆刻家園山大迂来静。（大務 3/24）
- 4/ 3 書画会於古奈温泉石橋（ -4）。（大務 4/13）
- 4/ 4 臨済寺摩利支天法要及び什宝縦覧（ -5）。（大務 3/30,4/3
- 4/17 教覚寺開基六百年大法要宝物為拜。（大務 4/8,9,10,11,暁鐘 4/8,9,14）
- 4/ 三枝曲江近況。（暁鐘 4/25）
- 5/ 8 丹青社絵画研究会第 10回於勸業物産陳列場（ -9）。（大務 5/6,7,11,13,14,15暁鐘 5/7,8,9,14
- ・ 山本南湖、気賀山雲水月楼に滞在。（大務 5/23）

- ・ 藤田文仙近況。（暁鐘 5/27）
- ・ 小林藕塘、市川団洲に渡辺崋山の書簡を贈呈、渡辺小華と書簡。（大務 5/29）
- 7/16 山崎静村・廉吉、静岡県に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 7/10 丹青社絵画研究会第 11回於勸業物産陳列場（ -11）。（大務 7/13,15）
- 7/11 駿府城濠端に教導石建立。（暁鐘 3/24大務 6/13,19,7/14,31絵入 M 20,7/28）
- ・ 篆刻家市川峽山来静、魚長に滞在。（大務 8/8）
- 8/13 市川萬庵、修善寺菊屋に滞在。（大務 8/18）
- ・ 山岡鉄舟、揮毫を絶つ事を宣言。（暁鐘 M 18,11/22大務 9/22）。同時期、鉄舟寺建立に奔走。（大務 M 16,4/15,5/16, M 18,11/24,12/4,9, M 21,3/30）
- 9/26 丹青社絵画研究会第 12回於菩提樹院。（大務 9/8,9,10,11,12,14,28,30）
- 9/ 百木太撫、小出東嶂《五百羅漢図》縦覧於臨済寺。（大務 9/18）
- 10/ 書画会大平村鈴木枕瀧宅。（大務 10/20）
- 10/21 栗原忠二、田方郡三島町（現：三島市）に生れる。（美術年鑑 S 12）
- 11/15 丹青社絵画研究会第 13回於少林寺。（大務 11/12,13,18暁鐘 11/11）

明治 20年 丁亥

- 2/13 丹青社絵画研究会於菩提樹院。（大務 1/8,9,2/4,16）
- 3/15 秋葉神社宝物展観於秋葉神社（ -4/15）。（大務 2/23,24,25,26,27,3/1,3,4,5,6,11,13,15,16,17,18,19,20,23,24）
- ・ 宮島家より浅間神社社殿図面、浅間神社に寄贈される。（大務 4/1）
- 4/ 3 臨済寺摩利支天法要及び什宝縦覧（ -4）。（大務 4/1,2,3）
- 5/ 1 丹青社書画展観会第 12回於菩提樹院。（大務 4/23絵入 4/30）
- 5/ 1 東洋絵画展覧会於横浜公園地に、内藤杏圃《秋山水》萩原石斎《春溪山 水》下山菱江《石榴二燕》水谷留峰《花果之図》鶴殿小舟《牡丹に猫》樋口信斎《恒野王ノ図》小出東嶂《十六羅漢図》出品。（大務 4/23,5/4）
- ・ 西洋画家大山松翠来静、滞在し依頼に応ず。（大務 5/27）
- 6/1 岡鹿門来静。（大務 6/3,8,23）
- 6/12 書画勝集於芙蓉楼。来静中の岡鹿門他。（大務 6/10,14,絵入 6/14）
- ・ 藤田華溪他、商館画結成。（大務 6/19）
- 7/ 岡鹿門、三島に滞在。（大務 7/19）
- ・ 東海散士柴四郎、清見寺に滞在。（大務 8/4,12,16,24,9/8,10/29,11/6,12）

- 9/11 谷干城来静。（大務 9/10,11,13,14,15,16,17,18,20絵入 9/10,11,13,14,16）
- 9/18 書画囲碁詩歌俳句雅会於下田海善寺。（絵入 9/25）
- 10/ 1 臨済寺修理完成。関無学来静、臨済寺で授戒会。（大務 5/27,10/14,11,15絵入 10/2）
- 10/ 江良屋島、会鶴亭に滞在し揮毫。（大務 10/6）
- 10/17 西有穆山来静。（大務 10/19）
- 11/24 書画展覧会於宝台院（ -27）。（大務 11/17,26絵入 11/18,26, M 21,1/26）
- ・ 徳川慶喜、駿東郡中郷小学校額揮毫。（大務 12/7）
- ・ 山下青崖、渡辺小華の皇居杉板戸絵制作に参加。（遠州南画）
- ・ 近藤浩一路、富士川町に移住。（後葦山に転居。）
- ・ 藤田華溪、宮本龍嶺、山下龍溪、佐藤有成、市川甫逸、西遠絵画社設立。（大務 12/18）

明治 21年 戊子

- 1/ 3 錦山矢士勝之来静、揮毫。（大務 1/4）
- 1/ 谷干城、東海散士、熱海滞在（ -3）。新聞社設立の憶測。（大務 3/22）
- 1/26 書画展覧会於掛川天然寺（ 28、2/1於浜松玄忠寺（ -3）。（絵入 1/26）
- 2/ 久能山東照宮、拝観を許可する。（絵入 1/29,2/2大務 2/2）
- 2/ 3 吉岡星秋来静、歓迎会於芙蓉楼。書画合作。（大務 2/3,5絵入 2/3）
- 2/11 新古書画展覧会於源昌寺（ -12）。（絵入 2/18）
- ・ 黒部瘦竹来静、滞在し揮毫。（大務 2/16）
- ・ 川村清雄、徳川將軍、森有礼肖像画制作。（大務 2/21）
- ・ 岡宝益、日光東照宮に 20点の古書画寄贈。（大務 2/22）
- 3/ 小出東嶂、屏風講を開催。（大務 3/1,2,3,4）
- ・ 田畑年隆来静、求めに応じ人物を写生。（大務 3/1,2,11）
- 3/18 書画展観会於清見寺（ -20）。（大務 3/1,2,3,4,7,9絵入 3/4）
- 3/24 丹青社物故会員追福書画会於臨済寺。（大務 3/16）
- 4/18 古器物展覧於修善寺（ -24）。（大務 4/19）
- 5/ 1 茨木猪之吉、富士郡岩松村岩本に生れる。
- 6/ 2 江良屋山、圍棋勝集於芙蓉楼にて揮毫。（大務 6/2）
- 6/10 村松番村中村悟竹追薦書画会於顕光院、（大務 6/9,12）
- 7/19 山岡鉄舟逝去、享年 53 （大務 7/21,22,25,26,29,31,8/3,7,12,10,13）
- 7/ 清水東谷、江尻に滞在し、写真油絵販売。（大務 7/7,10,11,15）
- 7/31 大久保一翁逝去、享年 73 （大務 8/4,5,7,10）
- 8/ 5 清水東谷蒐集大油絵縦覧及び書画会於感応寺。（大務 7/14,24,25,26,27,28,29,31,8/1,2,3,4,4）
- 8/10 小室樵山、見附に滞在し揮毫。（大務 8/15）
- 8/14 市川万庵、津田旭庵来静。（大務 8/16）

- 8/19 巖谷一六来静、求友亭に滞在。（大務 8/21） 8/22 見附に滞在し揮毫。（大務 8/12,31,9/4） 9/1浜松大米屋に滞在。（大務 8/31）
- ・ 油画師機到堂松本民次来静、君塚商店に滞在。（大務 8/28,29,30）
- ・ 村田丹陵、浅間神社蔵《戦艦図》模写。（静岡市史年表）
- 9/25 百木太撫、小出東嶂《五百羅漢図》縦覧於臨済寺。（大務 9/25）
- 10/14 月次雅会於蓮永寺。（大務 10/12）
- 10/17 久能山東照宮臨時祭宝物縦覧（ -21）。（大務 10/7,8,10,11,12,13,19,25）
- ・ 小西皆雲来静、会鶴亭に滞在、求友亭にて送別会。（大務 11/9）
- 12/ 熱海御用邸竣工。
- ・ 水野起雲帰静し篆刻を業とする。（大務 M 22,2/14）

明治 22年 己丑

- 1/ 9 大東館開業。（大務 1/6）
- 1/25 関口耕堂・隆正「山田長政事跡考」連載。（大務 1/25,27,30,2/3,3/6,30,314/11）
- 1/ 寺田溪水・孝三郎、静岡市に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 3/ 古筆了悦来静、田中薰丘宅に滞在し鑑定を行う他各地を訪問。（大務 3/7,15）
- 3/10 月次雅会於蓮永寺。（大務 3/8）
- 4/ 2 大施餓鬼並什宝展覧会於清見寺。（大務 3/24,26,31）
- 5/ 島田良斎来静、会鶴亭に滞在し篆刻。（大務 5/11）
- 5/26 書画展覧会於周智郡山梨村用福寺。（大務 5/22,23,24）
- 5/27 小出東嶂逝去、享年 67。（大務 5/30）
- 6/ 9 古今書画展覧会於芙蓉楼。（大務 6/6）
- 6/30 赤城泰舒、長泉町に生れる。（美術年鑑 M 44）
- 6/ 篆刻家高田緑雲、沼津修善寺に滞在。（大務 6/8）
- 7/ 由比正雪墓発掘願、出される。（大務 3/17,7/36,7）
- 7/13 鍔細工縦覧於富貴與勢亭。森田太十郎、町田長之助。（大務 7/9,10,14,16）
- 9/ 神波即山、見附に滞在し揮毫。（大務 9/5）
- ・ 小栗松藹寿筵於浜松聴濤館。
- 10/ 1 摩利支天大祭於臨済寺（ -2）。（大務 4/3,9/28）
- 10/ 8 入江長八逝去。（賀茂郡史）
- 10/ 河鍋暁斎修善寺に滞在。（葦山町史）
- 10/20 久能山東照宮秋祭宝物拝覧。（大務 10/12）
- 10/ 清見興国禪寺保存会結成。（大務 12/14,19,27）
- 12/ 《関口隆吉肖像》完成。（大務 12/21）
- 12/ 生花室書画骨董舗開業。（大務 12/26,28, M 23,1/5,10）

明治 23年 庚寅

- 森田長十郎《由比正雪》漆喰肖像制作。（大務 2/18
- 2/ 松本民次来静、君塚商店に滞在。（大務 2/8,11
- 2/20 機陽館開業。（大務 2/26,27,28
- 3/ 7 久能山東照宮春祭宝物拝観を許す（-17）。（大務 3/6
- 3/10 中村岳稜、下田に生れる。
- 4/ 1 第3回内国勸業博覧会於東京上野公園（-7/31）。静岡県より伊藤林洞《着色雪中飛禽》、遠藤政徳《墨画鯉魚》、飯高溪雪《墨画松樹》、久保田丁浦《着色山水》、飯塚香山《着色雑花折枝》、鶴殿霞舟《浅絳山水》、萩原石斎《淡彩山水》、内藤杏圃《着色山水》、山本安兵衛《金属寄木衝立》、田口友竹《石印篆刻》出品。（出品目録 大務 7/11,12,15,16,20,23,10/3
- 鈴木兼四郎志戸呂焼出品。（金谷町史）
- また、鈴木栄暁、受賞。（美術年鑑 M 44
- 4/10 什物拝観於蓮永寺（-12）。（大務 4/36
- 4/18 《由比正雪肖像》木像開帳於浄元寺（-25）。（大務 4/10,19
- 4/22 什宝展覧会於清見寺。（大務 4/17,18,20
- 4/23 水野以文・準平、静岡県に生れる。（美術年鑑 T 11
- 4/25 開帳に際して揮毫の他、古器書画陳列於修善寺（-5/24）。（大務 4/27
- 5/ 「由比松雪孝」連載。（大 5/4,7,9,10,14,15,18,24,25,30,31
- 5/ 小出東嶂逝去、享年 67。
- 7/ 伊藤博文、興津海水楼に滞在。（大務 8/16
- 7/24 石川伊十、静岡県に生れる。（美術年鑑 T 11
- ・ 山崎杏霞、九華山を描く。（大務 7/26
- 8/ 2 浮月開業。（大務 7/30,8/13,6,9,10
- 8/ 5 白柳栄畝・虎雄、気賀に生れる。（美術年鑑 M 44
- 8/ 小山雲潭、浜松に滞在し揮毫。（大務 8/14
- 8/ 森田旭水、静岡浜松で揮毫。（大務 8/19
- 8/21 小松宮掛額、修善寺に贈られる。（大務 8/21
- 9/ 鈴木晚霞、浪華書画会共進会出品。（美術年鑑 M 44
- 9/19 猪瀬東寧来静、魚伊に滞在し揮毫。（大務 9/21
- 10/17 勤王家諸士木像縦覧会於開情亭。（大務 10/15
- 11/ 3 入江知義書画骨董入札於宝台院。（大務 10/29,11/1
- 11/ 4 井上圓了来静。（大務 11/6,7,8,9,11,13,14
- 12/18 植松草里、原に生れる。（原町誌）
- ・ 立花雲閣来県、各地で揮毫。（大務 12/2

明治 24年 辛卯

- 6/11 中村正直逝去。（東京日日 6/11）
- 6/ 小島無量、京都青年絵画共進会褒状。（美術年鑑 M 44
- ・ 岩水寺全図銅版画頒布。（大務 7/10
- 7/22 岩谷一六、島田の飯塚九如を訪う。（大務 7/25
- 7/24 市川万庵来静。機陽館に滞在し揮毫。（大務 7/23
- 11/25 『東海暁鐘新聞』小林清親挿絵を掲載。（暁鐘 11/22,25
- ・ 霜島巴凌、油画コンテ画応需。（暁鐘 12/15
- ・ 銅版彫師秦獅子郎近況。（暁鐘 12/18

明治 25年 壬辰

- 1/ 6 歌川国峰来静。（暁鐘 1/8
- ・ 村石旭陵近況。（暁鐘 1/12
- 1/17 書画詩歌連俳懇親会於二俣福田屋。（暁鐘 1/20
- ・ 菊地暁成、岩水寺襖絵制作。（大務 2/11
- 3/ 川村清雄《桜草花》《甘草薔薇》石川欽一郎《田舎》《村叟負薪踞花下》《老人の肖像》石田益敏《少女の写生》《老人の写生》加藤亨《習写》第4回明治美術会展出品。（出品目録）
- 5/15 工芸共進会於浜松玄忠寺（-21）。（大務 5/13,14,17
- 5/20 吉岡星秋逝去。（大務 5/25
- 7/ 飯塚聖林、松本楓湖に学ぶ。（遠州画人伝）
- ・ 田能村直入、天龍峽を訪う。（天竜市史）
- 10/ 益頭峻南《軍鶏》第 1回日本青年絵画協会展出品。（出品目録）

明治 26年 癸巳

- 1/ 植松対雲逝去。（原町誌）
- 三島楽寿園障壁画描かれる。
- 4/ 平野竹逸・竹一、中泉に生れる。（遠州南画）
- 4/ 石川欽一郎《大弓》石田益敏《少女写生》《景色》（4点）第5回明治美術会展出品。また、参考出品として高村光雲より伊豆長八《龍額》の出品。渡辺文三郎《富士の景（龍華寺より遠望）》平木政次《富士山》高島信《駿州焼津の図》の出品があった。（出品目録）
- 6/ 小泉癸巳男生れる。
- 6/ 田辺嘉重、静岡県に生れる。（美術年鑑 S2
- 7/ 沼津御用邸竣工。
- 7/16 徳川慶喜、大崩を撮影。（東京日日 7/19
- 8/ 牧野克次、静岡師範学校に勤務（～M28）。（教員総覧）
- 9/ 松岡緑芽、由比小雪墓を訪う。（暁鐘 9/8
- ・ 伊豆石出荷盛況。（暁鐘 12/22
- 12/22 徳川慶喜、市内を撮影。（暁鐘 12/23

明治 27年 甲午

- 1/17 北川民次金谷に生れる。
- 1/24 榊篁郵逝去。（ぬまづの画人）
- 2/26 小栗松靄逝去、享年 81（浜名郡史、遠州画人伝）
- 5/ 土佐光一《闘鶏節会図》第3回日本青年絵画協会展出品。（出品目録）
- 5/ 服部喜平、浜松中学に勤務（～M33）。（教員総覧）
- 7/21 柏木俊一、韮山町に生れる。
- 11/ 松山良助、静岡師範学校に勤務（～M33）。（教員総覧）
- ・ 鈴木晩霞《松鶴図》、山本愛山、明治天皇御成婚二十五周年祝賀に献納。（遠州南画）

明治 28年 乙未

- 3/ 徳田鑄一、東京美術学校日本画科卒業。（美術年鑑 M 44
- 4/ 1 第4回内国勸業博覧会於京都岡崎公園（-7/31）静岡県より益頭俊南《震威八荒》、中村生海《秋景山水》、内藤杏圃《山水》、山本愛山《山水》《花鳥》、下山菱江《花鳥》、山下青崖《梅竹に鵲》、飯塚楓蹊《後醍醐天皇兒島高德遺蹟》、小池柳涯《松牡丹》、吉川為麿《蠟石篆刻》2点、《硝子印》出品。（出品目録）
- 4/ 飯田稲香《観桜図》直江敬年《雪中狗児図》第4回日本青年絵画協会展出品。（出品目録）
- 7/ 望月銃三郎、東京美術学校彫金科卒業。（美術年鑑 T 11
- 10/ 石川欽一郎《打毬遊戲》《荒園》第7回明治美術会展出品。また白滝幾之助《静岡附近海滨》平木政次《駿河国岩淵より富岳を望む》の出品があった。（出品目録）
- ・ 巖谷一六、天龍峽を訪う。（天竜市史）

明治 29年 丙申

- 春 篆刻家足立畴村、来静。（新報 M302/5
- 2/ 平井顕斎顕彰碑建於円成寺。（大井川町史、遠州画人伝）
- 5/30 久住耕雲逝去。（ぬまづの画人）
- 7/ 中島袈裟彦、東京美術学校漆工科卒業。（美術年鑑 T11
- 8/ 静岡美術会静岡書画展覧会第1回展於浮月楼。（静岡画談）
- 10/ 岡田三郎助、第1回白馬会展に興津に取材した作品を出品。（出品目録）
- 10/23 山口源、富士市に生れる。
- 年末 足立畴村、熱海に滞在。（新報 M302/5

模型船「神奈川丸」

フェルケール博物館 館長 西野和豊

日本郵船 がかつて所有していた六・一五トンの「神奈川丸」は、清水港にとって記念碑的な船のひとつで、清水港の近代化はこの船から始まることになるのです。

百年前の明治三十九年（一九〇六）五月十三日午前九時、静岡のお茶を輸出するため清水港に入港したのが「神奈川丸」で、予定量以上の茶葉を積んでアメリカのシアトルへ向け出港したのが翌日の十四日午前十一時でした。それ以前は静岡にお茶再生工場が無いため、横浜港まで荷送し、その地で再生された茶葉を荷造り梱包して外国船に積み込んでいましたが、それには無駄が多く、直接清水港より輸出することを茶業関係者は念願していました。多くの有力者達が尽力して、ついに清水港は明治三十一年に外国貿易が可能な開港場に指定されますが、輸出の為に大きくまとった物品が無いため、直接輸出が出来ずに七年間悔しい思いをしていたのです。

そんな折、静岡の海野孝三郎氏が静岡県茶業関係者や、清水港の開港業者などをひとつにまとめ茶業の発展のために奔走したのです。

海野氏がいかに貢献したかは最近清水港のマリンパーク入口に移築された海野孝三郎顕功碑に明らかですが、清水港の茶の直輸出を語る上でまず欠かせられない人物でした。

静岡の茶町周辺の再製茶工場に集められた茶葉は輸出用に梱包されて主に荷馬車で、後には軽便（けいべん）鉄道で清水港へ運びました。

当時の清水港の開港店は鈴与・天野・青木の三社でした。鈴与は大手輸出商館の（ハ）ヤ商会と組んで日本郵船の代理店として活躍しますが、天野（天野回漕店）もシーグフリード商会や富士製茶と組んでダラー汽船、パシフィックオーシャン汽船の代理店として又、青木（アオキトランス）はアーウィン・ハリソン・ホイットニー商会や明治貿易と組んで大阪商船やカナダ太平洋汽船の代理店として隆盛を築きました。直輸出を始めてわずか三年目の明治四十二年には、清水港からの茶輸出量は横浜



港を追い越すという偉業を達し、それ以後清水港は茶の輸出港として認められるようになります。 「神奈川丸」はそんな静岡の歴史を飾るシンボリックな船なのです。 民俗歴史博物館にとって、模型は大切な資料のひとつです。出来るだけ精巧に作ることで、後世の重要な証言者となっていくこと

文官石像

財団法人佐野美術館 館長 渡邊妙子



写真1 文官石像
(平成8年以前の様子※現在は隆泉苑入口)

かつて、佐野美術館の本館正面階段下の左右に、大きな石像があったことを記憶している方もおられるかと存じます。平成8年創立30周年記念事業として、正面玄関を整備するにあたり、この石像を本館から隆泉苑への入口に移動しました。高さ2.7メートルの巨像です（写真1）。

文官とは、朝鮮李王朝に仕える役人で、李王朝の円墳の周囲には文官と武官の石像が行儀よく並んでいます。王の死後を守護する像であろうと思います。私は、佐野美術館に赴任して間もなく、この文官が何時代の石像かを、韓国ソウルにある国立中央博物館に写真を送って、教えを請いました。ほどなく、回答が返送され、あくまで写真の判定であることを断って、ほぼ15世紀頃ということでした。

朝鮮の御影石は日本の石と異なって、不思議に苔むすことがありません。それは石の表面が風化して細かく碎けるからです。ですから、彫りの凹凸が次第に少なくなり、素朴な趣が生まれ、大正から昭和初期の日本庭園には、朝鮮李王朝の石像が多く置かれています。

佐野美術館に、なぜこのような石像があるのか不思議に思っ、創立者佐野隆一翁に美術品を納入していた業者に聞きました。「佐野氏は高島屋美術部から購入したとのこと、高島屋は多摩川の土手に放置してあったのを運んできたの



写真2 武官石像（隆泉苑玄関入口）

だそうです。こんな大きな石像は引き取り手がなかったのだとも。日本に運ばれた文官石のうち最も大きいものでしょう。当時日本から朝鮮に運搬した積荷を下ろしたあと、日本に帰る輸送船に石像を積んできた」とっていました。私はそれを確かめるすべを知らず、そのままになっています。

隆泉苑の玄関には高さ1.7メートルの小柄な武官石像が一对あります（写真2）。大刀を両手で持っています。一方大きな文官像は笏を持っています。いずれも風化して鼻が低くなっているので、どこか愛らしく、来館者はこれらの像と並んで写真に収まる方がいらっやいます。

クマノミ水族館リング水槽

東海大学海洋科学博物館 学芸員 山田一幸

当館では2007年の夏に水族部門の改修を行いました。その内容はクラゲとクマノミに関する展示コーナーの新設で、「当館生まれの生物を展示飼育する」、「生物を楽しむ来館者に見てもらう」という考えのもと、新たな展示水槽を多数設置しました。そのうち目玉と言えるのが今回ご紹介する「リング水槽」です。

クマノミをメインにした改修は「クマノミ水族館」と名付けられ、世界中から集めた18種ものクマノミが来館者を楽しませています。魚の中にはクマノミの子どもや、大変珍しいオーストラリアのクマノミなども含まれ、たくさんのクマノミを見ていただける展示となっています。

メインである「リング水槽」の中心には子どもが2～3人入れる空洞があり、中に入ると周りを数百尾のクマノミたちに取り囲まれるため、まるで海の中にいるような気分になります。来館者の方々にはこの不思議な感じが好まれるようで、お子さんや、時には年配の方も中に入って記念撮影をされています。

担当者として、そのような風景を見るのは嬉しい限りですし、写真撮影というのも狙いの一つだったため、ちょっとした達成感を感じます。

現在「リング水槽」に展示中のクマノミたちは名前を「クラウンアネモネフィッシュ」と言いますが、実は、全て当館で生まれ育った「海を知らない魚」たちです。水族館での生体展示には生物の入手と飼育が欠かせません。常設展示の長期間展示には、状態を良く保つことが重要なため維持管理には大変気を使います。その一方で生物は必ず死を迎えますから、入手も必要になります。

水族館での生物入手は主に野外からの採集に頼る部分が大いのですが、当館ではなるべく野外採集を避けようと開館当時から海水魚の繁殖に力を入れています。これまでに50種以上の繁殖・育成に成功し、特にクマノミ類では11種について成功しています。今回の展示についても、オープン1年ほど前から繁殖・育成の研究を重ね、その結果一千尾近い若魚の育成に成功しました。そこで、是非その成果を来館者の方々に見ていただこうと、メイン展示である「リング水槽」で展示することになりました。

今後は、季節ごとの模様替えや魚の追加も考え、また、来館者の方々の声に耳を傾けて、クマノミをより一層楽しみ・感じてもらえる水槽を目指していきたいと思っています。

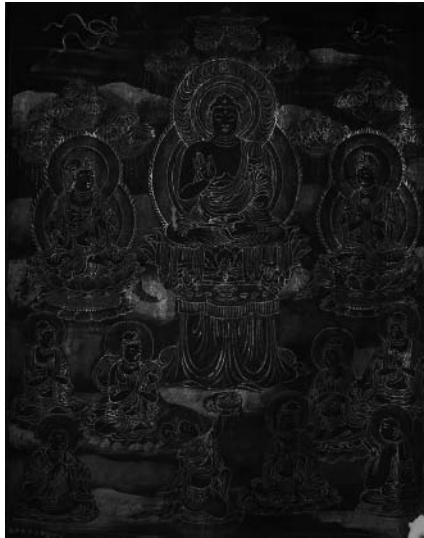


紺紙金銀字交書阿毘達磨俱舍論卷第二十六（中尊寺経）

上原仏教美術館 学芸員 田島 整

上原仏教美術館では今年度、平安時代の実麗な装飾経を収蔵しました。新収蔵品は、平安後期に東北地方で権勢を誇った奥州藤原氏の祖・藤原清衡が制作を発願、およそ9年の歳月を費やして1126年に完成した一切経のうちの1巻で、もと岩手県平泉の中尊寺に伝来したために中尊寺経と呼ばれるものの1巻です。一切経とは、仏教の主要な文献を網羅したもので、およそ5400巻の経巻から構成されます。中尊寺経の場合、現在、中尊寺に15巻、高野山金剛峰寺（こうやさんこんこうぶじ）に4296巻（ともに国宝）、大阪・観心寺に166巻（重要文化財）が伝わるなど、およそ4600巻が現存しているといえます。新収蔵の1巻は、4・5世紀のインドの学僧、世親（せしん）が著した『阿毘達磨俱舍論』（あひだるまくしやろん）の第26巻目、『阿毘達磨俱舍論』は仏教の世界観、形而上学、教理について述べた文献で、仏教教理の入門書として学ばれていた書物でした。

本経は藍で染めた紺紙を874cmの長さに継ぎ、金泥、銀泥を用いて装飾を施し、美麗な経巻に仕上げられています。表紙には極楽に咲き誇るという宝相華（ほうそうげ）の文様を描き、表紙見返しには同じく金銀を用いて説法する釈迦如来と、聴衆である菩薩・仏弟子の姿を繊細な線描で描きこんでいます。一方、経文部分は、金字・銀字を交互に用いて書写し、その後、鹿角や猪の牙の先端で一字一字を磨いて金属光沢を研ぎだしています。ところで、中尊寺経は他の金銀字経と比べ、金銀の輝きが良く残っていることでも有名です。輝きの理由としては、近年の研究により、金の厚みが通常の約3倍あることが分かっています。また、黒変しやすい銀字が輝きを保っている理由としては、銀字の上に牛乳を塗っているとする説があります。中尊寺経は平安時代の知恵が結集された文化財なのです。



朝鮮通信使展への道

常葉美術館 日比野秀男

■はじめに

展覧会の企画は学芸員にとっては宿命というか、基本的な仕事のひとつである。しかしながら博物館の機能は単に展示のみであるわけではなく、さまざまなイベントが実施されることが求められる。それだけ博物館の事業に対する厳しい見方がなされるだけでなく、入館料が大きな収入源である博物館にとっては入館者の減少をふせぐことは博物館を維持してゆく上で最も基本的な課題であることは言うまでもない。そこで何らかの形でより入館者を増やすにはどうしたらよいかと考えることも必要である。

公私の博物館を問わず博物館経営が厳しい岐路に立っており、それぞれの館園が収入をいかにあげるかという対応をすることが余儀なくされている。新聞紙上でも紹介されているとおり閉館する博物館も出てきている。そのようなことから言えば、悪くすると展覧会は入館者数を増やす算段が第一と考えるべきであると要求されることもある。そうは言ってもより内容の充実した展覧会を企画したいというのは学芸員誰もが考えていることである。

展覧会開催のモチベーションは入館者増のねらいだけでなく内容の充実が大きな要素となる。

平成 19年（2007）は朝鮮通信使が初めて日本に来てから 400 年目ということで静岡県下の各地で様々なイベントが催された。関連する展覧会もフェルケール博物館（静岡市）、沼津市歴史民俗資料館、藤枝市郷土博物館、富士市立博物館、三島市郷土資料館などで開催された。この中で沼津市、富士市、三島市は共同企画であり内容的には同じものが巡回したので企画展としては 3 企画となる。私は幸いに 3 企画展ともに見る機会に恵まれ各館の協力を受けたのでそれらの概要を紹介することとしたい。

■ 1 朝鮮通信使 400 周年

平成 19年（2007）4月から 20年 3月まで、朝鮮通信使 400 周年ということで静岡県、静岡市を中心として関連する市町でイベントが催された。その詳細についてここで触れるわけには行かないが一般的に知られているイベントについてチラシなどを参考として以下のとおり整理しておくとしたい。

次に紹介する 1-1.「静岡県と朝鮮通信使」（静岡県文化政策室）のチラシにより年間イベントの概要を知ることができる。地域的なイベントとしては「行列」「展覧会」「祭り・フェスタ」などに分かれる。イベントは当然ながら 1 回性のものであり 1 日あるいは 2 日の開催である。また、展覧会は博物館や資料館を会場としていることから展示そのものは 1 か月以上にわたるものとなる。まずは県下全体の概要から見てゆくこととしたい。

1-1.「静岡県と朝鮮通信使」 静岡県文化政策室

「チラシ」 A4 見開き 8 ページ（監修 / 北村欽哉）



図 1

（主たる内容）

ア、表紙（ 1p）[図 1]

イ、朝鮮通信使とはなんだろう（ 2p）

ウ、地図、10 回の朝鮮通信使、食事などの紹介。しずおか・通信使 MAP（見開き 4p）で東部、中部、西部と分けて通信使とのゆかりのある事項を紹介している。

エ、裏表紙（ 1p）

県内のイベントについて紹介

- ・ 磐田市、第 8 回遠州大名行列・舞車 4月 28 日（土）
- ・ 静岡市、朝鮮通信使再現行列 5月 19 日（土）青葉公園から駿府公園（葵区） 5月 20 日（日）清見寺周辺など（清水区）
- ・ 沼津市、沼津市歴史民俗資料館企画展 7月 7 日（土）～ 9月 30 日（日）
- ・ 藤枝市、藤枝市郷土博物館企画展 7月 21 日（土）～ 9月 21 日（日）
- ・ 熱海市、仮称国際交流フェスタ（予定） 9月予定
- ・ 富士市、富士市立博物館企画展 10月 6 日（土）～ 12月 21 日（日）
- ・ 由比町、由比街道まつり 10月 21 日（日）
- ・ 三島市、三島市郷土資料館企画展 12月 9 日（日）～平成 20年 2月 24 日（日）

このように平成 19年度の年間通じてゆかりのあるところにおいて様々なイベントが実施されていることが知られよう。

この中には紹介されていないがフェルケール博物館において「朝鮮通信使と清見寺」展も開催されており、それもあわせてみることにしたい。

その前に 1 点気がついたことは、静岡県とは別に静岡市独自のチラシがあることも注意しておきたい。そのチラシは以下のようになっている。

1-2.「来て、見て、体感。朝鮮通信使四〇〇周年」（朝鮮通信使四〇〇周年記念事業イベントのご案内）（A 4 表裏 1p）[図 2. 図 3]

朝鮮通信使 400 周年記念事業推進委員会

設立趣旨、県内で開催が予定されている関連イベントなどが紹介されている。[図 3] は静岡市関連のイベント紹介。



図 2



図 3

■ 2 朝鮮通信使関連の展覧会

2-1.(大御所 400 年祭事業) 特別展「朝鮮通信使と清見寺」

チラシ [図 4]



図 4

会期：平成 19年 5月 12 日（土）～ 6月 10 日（日）

会場：フェルケール博物館

（財団法人 清水港湾博物館）

主催：財団法人 清水港湾博物館 / 静岡市

後援：静岡県教育委員会 / 静岡市教育委員会 / 静岡新聞社・

静岡放送 / NHK静岡放送局 / 朝日新聞静岡総局

協力：巨甕山 清見寺興国禅寺（清見寺）

協賛：鈴与グループ

趣旨

朝鮮通信使と清見寺ゆかりの文化財の展覧会。

出品作品

詩文帖、絵画、扁額などの朝鮮通信使ゆかりの資料と清見寺伝来の文化財の展示。なお、清見寺においても関連する文化財の展示がなされた。



図 5

展覧会カタログ [図 5] A 456 ページ

・論文

ア、「朝鮮通信使と徳川家康の平和外交」金兩基

イ、「家康・清見寺と通信使」渡辺康弘

ウ、「使節との＜唱和＞ 駿府の青年徳田見龍」岩崎鐵志

・図版

出品作品

資料データ、年表、朝鮮通信使日本訪問行程表、往還図

23.「藤枝宿と朝鮮通信使」

会期：平成 19年 7月 21日(土)～9月 2日(日)

会場：藤枝市郷土博物館

主催：藤枝市郷土博物館



図 6

趣旨

朝鮮通信使と藤枝宿との関係についての内容の展覧会。

展覧会パンフレット（A4 9p）〔図 6〕

ア、表紙 朝鮮通信使の解説と経路の略図

イ、藤枝宿と朝鮮通信使のゆかりの事項の解説（p 2～ 4）

ウ、藤枝宿のおもてなし 朝鮮通信使をもてなした料理の図解と解説(p 5～ 6）
（詳細は本文末尾の報告を参照）

24.「遙かなる東海道～富士・沼津・三島の記録～」

会期・会場・主催

平成 19年 7月 7日(土)～9月 30日(日) 沼津市歴史民俗資料館

平成 19年 10月 6日(土)～12月 2日(日) 富士市立博物館

平成 19年 12月 9日(日)～平成 20年 2月 24日(日)

三島市郷土資料館



図 7

趣旨

静岡県内の街道名物と東海道を通った朝鮮通信使の様子を紹介する展示。

展覧会パンフレット（A4 8p）〔図 7〕

ア、表紙 東海道にゆかりのある人物などの肖像

イ、東海道の名物の写真と地図（見開き 2p）

ウ、吉原宿、原宿、沼津宿、三島宿の解説と版画や屏風絵など（見開き 4p）

エ、裏表紙

東海道を通った朝鮮通信使を解説と図版により紹介

展示風景〔図 8図 9〕（三島会場）



図 8



図 9

以上で「朝鮮通信使 400周年記念」の展覧会の概要を紹介した。これらの展覧会は各地域と朝鮮通信使とのかかわりを紹介しようとするものであり、初めて朝鮮通信使を知る人々にとっては有益なものであったといえるであろうし、開催した館にとっても朝鮮通信使関連の資料の再確認という意味から考えれば大変良い機会であったと思われる。何にもまして博物館、資料館がなければ長期にわたる展示は不可能であったわけであり、また、資料収集の成果も見ることはいできない。このような観点から見れば改めて博物館施設があることの意味は大いに再確認できた機会といえよう。

次に平成 16年度に常葉美術館で開催した「朝鮮通信使展」の経緯と内容について紹介することとしたい。

■ 3ヨンドサン・ギャラリー

「朝鮮通信使展―江戸時代の善隣友好―」が開催されたが、この展覧会を企画した私自身には様々な経緯があることから若干、迂遠なことと思われるかもしれないがそれらのことから紹介させていただくこととしたい。

平成 14年 1月、私は韓国の釜山・慶州・ソウルを訪れた。必ずしも必要な仕事があったわけではないが釜山に一人の知人がいたということと慶州に行てみたいとかねがね思いつつも行く機会がなかったことから、出かけることとした。また、ソウルの韓国国立中央博物館に所蔵されている「弥勒菩薩半跏像」を拝見するのも大きな目的でもあった。よく言われるように京都・広隆寺の弥勒菩薩半跏像との比較も楽しみてであった。

平成 14年 1月 16日（水）、釜山乗継でソウルに着いた。ソウルでは二泊し、ソウル市内を見て周り、韓国国立中央博物館で弥勒菩薩半跏像も拝見することができた。18日（金）の朝早く釜山に戻り、釜山から慶州見学に出かけた。車とガイドを雇っていたので空港から直接、通度寺を見て慶州に向かった。このとき見て回った慶州の仏像や寺院は大きな感銘を受けたがもっともおおきな印象を持ったのはガイドが解説する「この寺は秀吉に焼かれたお寺であります」という言葉であった。とにかく、このガイドによると「豊臣秀吉」と「伊藤博文」からはとんでもない迫害を朝鮮人は受けたという説明であった。二〇代半ばと思われるガイドにいつどのような教育を受けているかと聞いたところ小学校から徹底的に秀吉と伊藤博文の蛮逆行為について教えられているとのことであった。日本ではお札の顔写真になったり、庶民から立身出世した人物として二人は一般的には批判めいたことは聞く機会が少ないのである。秀吉はNHKの大河ドラマの主人公にもなり大変な英雄でもある。戦後生まれの自分がこのような認識であったことが大きなショックであった。

釜山の知人は近年開館した釜山市立美術館の学芸部長をしており、そのギャラリーを借りて前年から菊川で開催してきた公募展「TOKOHA CG ART展」が開催できないかを尋ねたところ同館の館長のアイデアで市立美術館の別館であるヨンドサン・ギャラリーで展示したらよいとのことであった。この展覧会はインターネットを通じて広く公募し世界中からメールにより作品を集めようとするものである。常葉美術館では見に来る人々にも限られてしまい、何とか館外で展示したいものと考えていたのである。幸いに釜山で平成 14年 11月と翌年に開催し一週間で五千人もの入館者でに



図 10

ぎわった。〔図 10〕は平成 15年の館外ポスターで背後に釜山タワーが見える。ギャラリーそのものは小さなワンルームであり一日で千人近いもの入館者は大変なにぎわいであった。このヨンドサン・ギャラリーは釜山市内の観光地でもあり、国内外の人々が来る龍頭山公園にあり、そのタワーに行くときには必ず通る場所にあることから多くの人々が利用するところでもあった。

■ 4常葉美術館「朝鮮通信使展」

韓国の人々の中で静岡県は徳川家康ゆかりの地であり、よい印象を持っているということも韓国との国際親善を進めている人たちからも聞くことができた。家康が朝鮮通信使をはじめ、朝鮮との親善外交を始めた人物で韓国の人たちに好感がもたれていることも朝鮮通信使展を考える一つのきっかけであった。いずれにしても常葉美術館の「朝鮮通信使展」開催のきっかけはこのような経緯がまずは発端であった。

さて、それまでに開催された朝鮮通信使の展覧会は以下のものであった。

- a岐阜市歴史博物館「朝鮮通信使―江戸時代の親善外交―」展（平成 4年 2月 28日―4月 5日）
 - b大阪市立博物館「朝鮮通信使―善隣友好の使節団―」展（平成 6年 9月 13日―10月 23日）
 - c京都文化博物館（福岡県立美術館）「こころの交流 朝鮮通信使―江戸時代から 21世紀へのメッセージ」（平成 13年 4月 28日―6月 3日）
 - d大阪歴史博物館「朝鮮通信使と民画屏風（辛基秀コレクションの世界）」（平成 13年 11月 3日～12月 17日）
- これらの展覧会はそれぞれ特色があり、いずれも見逃せない展

覧会ではあるが京都文化博物館でのものが規模も大きく内容も最も充実したものであった。また、見逃せないのはそれぞれの地域と朝鮮通信使とのかわりの中から展覧会を構成しており、そのような点からも朝鮮通信使の日本国内で果たしてきた文化的な役割というものを再度見つめなおすきっかけとなったことは言うまでもないことである。

いずれにしても展覧会がすでに開催されてきており、朝鮮通信使の認識が広まってきていたことは事実である。また、「ワールドカップ日韓共催 2002」も日本と韓国とが近い国であることを改めて印象付けた。

これらの経緯から徳川家康ゆかりの静岡であるということ、テレビで韓流ブームがあったこと、さらには清見寺などゆかりの史跡があることなど静岡県内で朝鮮通信使展が開催されていないこと自体が遅れをとっているということも受け止められかねない状況であった。展覧会を考えるにあたりまずは基本的には「目で見える朝鮮通信使展」にしたいということを第一とした。そのようなことから視覚的効果の高い資料を展示することを第一とし、展示構成は以下のようにした。展示風景〔図 11〕、展示会カタログ〔図 12〕A 4124ページ。



図 11



図 12

I 描かれた朝鮮通信使

II 朝鮮通信使の学芸と文化

III 朝鮮通信使が生んだ日本文化

IV 誠心のまじわり

展示構成を考えるにあたっては、それまでに開催されてきた前述した「朝鮮通信使展」関連のカタログを参考とした。

「I .描かれた朝鮮通信使」では、そのテーマのとおり朝鮮通信使が描かれている絵画資料が展示されなくてはならない。大きく分けると船に乗る通信使、街道の行列の通信使の 2種類である。これらの絵画は記録としての意味が大きかったことと思われる。船は淀川を上るもので大坂の河口で釜山から乗ってきた船から川御座船に移るのである。川御座船は各大名に建造が依頼され、それぞれの大名が次回建造するための資料として絵画で残したものであろう。ここに描かれた船は今日でもその豪華さを知ることができるが朝鮮通信使の製述官であった申維翰は『海游録』の中で次のとおり記している 申維翰著、姜在彦訳注『海游録』平凡社・東洋文庫 252 110頁）

その船制は煥爛（ひかりかがやき）侈巧（たくみをつくし）、上には層楼が起ち、屋根は瓦状に木刻して緑漆を塗り、葺の下はすべて黒く、みな炯然として鏡のようだ。…………

正使公は対馬太守に伝言して曰く、「楼船の奢侈が過ぎるのは、もしやこれ、閔白の御するところの船ではあるまいか。使臣として、あえて乗ることをはばかる」

このようにその船の豪華さに驚いている様子が知られる。閔白とは將軍のことで將軍が乗るほど飾り立てた船であるとしている。いずれにしても視覚的効果の高い作品であることは疑いない。

ついで朝鮮通信使の行列を描いた作品を展示した。一般的には行列を描くということから巻物になっているが、北斎の版画、屏風の中に東海道を行く行列を描く作品もある。

「II .朝鮮通信使の学芸と文化」は通信使の中に画員がいたことから絵画作品を残していた。これらは必ずしも多くはないが当時の山水画としてみるべきものである。また、詩文もいくつか残っていて、詩文帖として実物が伝存している。

清見寺（静岡市清水区興津）の「山水花鳥図押絵貼屏風」は四枚の山水図と花鳥図からなり、通信使に画員として随行してきた金有声（1725-?、キムユソン）の作である。彼は、宝暦 14年（1764 第 11回朝鮮通信使の画員として随行してきた画家で、この作品は、江戸からの帰りに清見寺に送られたものである。正使の趙巖『海槎日記』によると六図制作したとあり、現存しているものはそのうちの四図とされている。この中には洛山寺の図が含まれているが、これは通信使の一行が清見寺の景観が朝鮮の洛山寺の景観に似ていると感嘆することから清見寺の住職が洛山寺の絵を懇望したところ金有声が江戸滞在中に描き、帰りに渡すと約束したことから

実現したものである。朝鮮の正使の趙巖は『海槎日記』の中で金有声は各地で揮毫を求められ多忙であると記している。

なお、金有声の作品は韓国に十数点、日本においてもほぼ同数残っていることが知られているが、この作品はそれらの中でも本格的な水墨画であり、また伝来の明確な点も貴重である。このように朝鮮通信使の足跡が今日でも明確に残されていることが知られることは貴重である。

「III .朝鮮通信使が生んだ日本文化」では朝鮮通信使によって日本にもたらされた文化に触発され生み出された文化を展示した。例としては岐阜県穂積市別府で生み出された別府細工などがある。別府細工は江戸時代、岐阜県穂積市別府で活躍した広瀬清八・茂重郎親子によって作られた蛸型鋳物細工である。燭台、文鎮などの生活用品が多い。この蛸型鋳物細工に興味深いのは細部のモチーフの唐子、旗などが朝鮮通信使に関わると考えられている。この旗持燭台は大きな旗を持った唐人が組み込まれている。以下同じように細部を見ると様々な表情の唐人や唐子などがある。穂積の隣の大垣は朝鮮通信使が宿泊した宿場である。この別府細工が作られた時代には延享度（第 10回）宝暦度（第 11回）の 2回朝鮮通信使が来ており、その行列が参考となったであろう。

「IV .誠心のまじわり」は朝鮮王朝と江戸幕府との交流の様子を知るとともに朝鮮との外交を直接担当していた対馬藩に仕えて、その外交を直接担当した雨森芳洲の事跡を知ることに当てた。この雨森芳洲の思想を知ってもらうことがこの展覧会の大きな目的のひとつであった。そのために当時の国書関係の資料を展示し、ついで雨森芳洲の肖像画、自筆文書などを展示した。中でも『交隣提醒』は隣国との交際に当たって「互いに欺かず、争わず、交流することが肝要である」と述べている。当時の外交を直接担当していた人物にこのような思想があったことに驚くとともに深く敬意の念を禁じえない。幸いにこれらの貴重な資料を展示できたことは展覧会の開催に当たって大きな幸せであった。

■おわりに

朝鮮通信使 400周年ということで県下のゆかりのある地で関連イベントや展覧会が開催されたことは極めて有意義であったといえよう。これだけの規模で県下幅広く開催されたことはかつてないことであり、多くの人々が朝鮮通信使に関する関心を持つ機会となったであろう。

また、地域的な特色が加味され展示を見るうえでも興味と関心を持つことができた。

こうした中で課題があったということも否めないことであろう。簡単に率直な印象を記しておきたい。

まず第一は地域的な広がりがありすぎたため全体的なまとまりがっていないという印象が大きい。おそらくは県のほうで各市町村から希望をとり、かつまた、ゆかりのある地ではこの機会に朝鮮通信

使を見直したいという意向とが絡み合い、実施に向かったのではなかろうか。その結果、各関係機関が作成したチラシにしても混乱が見られると思うのは私一人ではなかろう。第二には朝鮮通信使の基本的な精神というものを理解してもらうことが必ずしも十分ではなかったということである。地域的な特色や地域との関係を紹介することに終始し、本質的な部分についての説明については不十分であった。なにかしらやはりイベント的な要素が強すぎたようである。これは行政の仕事として単年度予算の中で実施しなくてはならず、おのずから制約があることは否めないことである。

このような反省から改めて常葉美術館での朝鮮通信使展について評価と点検をしてみると、評価すべき点と不十分であったと考えざるを得ない点もある。まず評価すべき点としては「見る朝鮮通信使」という観点から様々な実物資料を展示することによって朝鮮通信使の概要を知る機会となった点である。また、対馬藩の外交官として重要な役割を果たした雨森芳洲の資料を展示できた点である。不十分な点は県下の資料紹介が弱かった点である。

いずれにしてもこれらの展覧会は相互に補完する内容ともなり、1館だけで完結することは不可能であることを改めて教えてくれた。地道な資料調査と、テーマに対する普段の関心がより内容の濃い展覧会となることは否定できない。そのようなことから言えば、学芸員は絶え間なく様々な課題に対する関心を持つことが要求されるといえよう。

（付記）

藤枝市郷土博物館の報告を添付させていただいた。富士市、沼津市、三島市の3館共催の展覧会については来年度の本紀要に掲載される予定である。

【報告】 藤枝市郷土博物館 第75回企画展『藤枝宿と朝鮮通信使』

藤枝市郷土博物館 海野一徳

日時：平成 19年7月 2日～9月2日

会場名：藤枝市郷土博物館

連絡先：藤枝市若王子 500

Tel 054-645-1100

<事業概要>

江戸時代、おもに徳川将軍の代替わりを祝賀するため朝鮮国王の国書を携えて日本に派遣された朝鮮通信使。朝鮮通信使をつうじた江戸時代の日本・朝鮮両国の交流は誠信の交わりと評され、善隣友好の外交を象徴するものでした。江戸時代を通して12回派遣されていますが、そのうち東海道を往復したのは10回でした。

東海道藤枝宿は朝鮮通信使の宿泊地として指定され、東海道を往復した10回すべてに通信使一行が宿泊しています。藤枝宿で通信使を迎え入れるための接待・準備に関する資料が今に伝えられています。藤枝宿の饗応料理に関する資料、瀬戸川の仮橋に関する資料、藤枝宿上伝馬での宿泊に関する資料などです。これらの資料から田中藩や藤枝宿の人々が、朝鮮通信使の通行・宿泊に支障がないよう万全を期して準備に奔走していたことがうかがい知れます。

展示会では、通信使を迎える藤枝の人々のおもてなしの精神に注目しながら、地元に残る通信使関係資料や、再現した饗応料理などを中心に紹介し、藤枝宿に残された朝鮮通信使の足跡を振り返りました。東海道の一宿場町が朝鮮通信使をどのように迎えてもなしたのかという個別事象を掘り下げてミクロの視点から紹介したもので、資料的な制約に悩まされながらも、江戸時代の善隣友好の象徴である朝鮮通信使の通行に対して、一地方の藤枝の人々も微力ながらも貢献しているという歴史的事実を再認識する場となりました。小さくとも広汎な民衆の力の結集が友好の歴史を支えていたことに気づかされるのです。

◆展示会情報

会期平 平成 19年 7月 2日（土）～ 9月 2日（日）
月曜休館、開館日合計 38日間

会場 藤枝市郷土博物館 特別展示室・ホール

開館時間 午前 9時～午後 5時

入館料 大人 100円、中学生以下は無料

展示点数 85点

入館者数 資料・サンプル 55点、展示パネル 30点）
1,949人（一日平均 51.3人）

◆展示構成

(1) 通信使が通った瀬戸川仮土橋

(2) 朝鮮通信使と東海道

※県庁・文化政策室から借用した解説パネル9枚を展示

(3) 淀川の川御座船を模した和船模型

(4) 藤枝宿と朝鮮通信使

(5) 藤枝宿のおもてなし

～天和 2年（1682）8月 15日の饗応料理復元～

1.三使・上々官の夕食引替膳

2.下官の夕食膳

(6) 古文書に残る通信使の記録



◆展示の見どころ

1通信使が通った瀬戸川仮土橋

東海道が通る藤枝の瀬戸川には江戸時代に橋は架けられず、小規模ながら瀬戸川の川越しが行われました。しかし朝鮮通信使の通行には仮橋を掛けて渡河させるきまりとなっていました。正徳元年（1711）10月に予定された第8回通信使の通行に備えて、前年の宝永7年（1710）7月に田中藩の下間に応じて提出した瀬戸川仮土橋絵図が当館に残されています。これによると仮橋は長さ 30間程（約 54m）・横2間程（約 36m）・高さ 5尺 5寸程（約 165m）の規模で、本瀬に渡しました。橋板の上には粗朶（そだ、木の枝）を並べ、薦（こも）を敷き、その上に砂利を敷き詰めるとともに、両

へりには芝を植え付けました。仮橋とはいえ、国賓を迎えるのにふさわしい外観にも配慮した立派なつくりでした。展示会では国賓が通行するための特殊な仮橋のつくりを理解してもらうために、仮橋が描かれた絵図や浮世絵「瀬戸川徒渡り」大パネルを展示するとともに、博物館ホールに瀬戸川仮土橋の3分1模型を再現しました。



2藤枝宿のおもてなし

『宗家記録』から天和2年（1682）8月15日の藤枝宿の饗応料理を再現 !!

朝鮮通信使一行に対して、接待役の各藩では贅を尽くした饗応料理でもてなしました。通信使への饗応料理の献立は、案内役として同行した対馬藩宗家によって詳細に記録され、『対馬宗家文書 朝鮮通信使記録』（慶応義塾図書館所蔵）として現在も見ることができます。『宗家記録』のうち「天和二年壬戌信使記録 卅二」に記述された、第7回通信使が天和2年（1682）8月15日、藤枝宿へ宿泊したときの夕食の献立にもとづいて、当館では三使・上々官の引替膳と、下官の夕食膳をサンプルで再現しました。儀礼的な七五三膳ではなく、通信使が実際に食した引替膳には、藤枝地域の特色ある地場産品も食材として使われており、藤枝ならではのおもてなしが込められた接待料理といえます。こうした通信使一行が実際に食べた“引替膳”を再現したのは全国的にも珍しく、当館独自の試みとして今回の展示会を飾る目玉となりました。豪華な引替膳を目にして驚きの声をあげる見学者も数多くおり、食文化への関心の高さがうかがわれました。



3通信使の通行を支えた藤枝の準備

幕府は外交使節団である朝鮮通信使を国賓として丁重にもてなすとともに、幕府の威信にかけて東海道筋が通信使一行から見られることを意識して、通行に先立って道路の整備や町屋の修繕な

どを行って、治道や町並みの景観が見苦しくないように配慮しました。明和元年（1764）の第 11回朝鮮通信使に先立って作成されたとされる藤枝宿上伝馬宿泊図（当館蔵の熊沢文庫）には、宿場筋の町屋が「新規建直し」（赤色）・「屋ね板葺付」（黄色）・「屋ね藁葺付」（紺色）・「建具類用ひ新規繕」（赤枠囲い）のように色塗りされており、通信使の通行に備えて藤枝宿の町屋の多くが建て直し・屋根葺き替えなどを事前に行っていたことが分かる貴重な資料です。

◆関連行事

(1) 講演会「藤枝宿のおもてなし」

～天和 2年饗応料理を中心に～

日時 8月 5日（日）午後 2時～ 3時

講師 八木勝行（藤枝市郷土博物館長）

場所 博物館ホール

聴講者 40名



(2) 体験交流イベント「韓国の伝統打楽器にふれよう !!」

チャンゴ・ケンガリ・プク・チンといった、韓国の伝統的な打楽器を使った躍動感あふれる音楽を演奏します。これは近年サムルノリとも呼ばれ人気がありますが、元々は朝鮮半島の伝統的なプンムル（農楽）をルーツとした音楽です。参加者が演奏体験も楽しみました。

日時 8月 19日（日）1回目：午前 11時～、
2回目 午後2時～ 各回とも約1時間

講師 静岡チャンゴ教室の皆さん 6名

会場 博物館ホール

参加者 80名



◆備 考

(1) 韓国ソウル永西&藤枝青年会議所交流20周年、朝鮮通信使400年記念企画

『現代の朝鮮通信使・心の交流を重ねて20年』

日時 8月9日(休) 午前10時～正午

会場 博物館ホール

内容 展示見学、来賓挨拶(松野輝洋藤枝市長・原田令嗣衆議院議員) 信書交換式、ミニ講演(金兩基氏 など)

参加者 40名



(2) 藤枝明誠中学校生徒(1～3年生)の展示見学・説明

日時 8月30日(休) 午後2～4時

会場 博物館ホール

参加者 126名



(3) 藤枝順心中学校生徒(1～3年生)の展示見学・説明

日時 8月31日(金) 午前10～11時

会場 博物館ホール

参加者 42名

＜担当者コメント＞

「藤枝から発信した“朝鮮通信使”一つの歴史」

藤枝市郷土博物館 海野一徳

「藤枝宿と朝鮮通信使」展の開催に当たって、まずは展示資料の収集・確保に苦劳しました。藤枝の場合、珍しい資料も残されていますが、総体では通信使関係資料はわずかで、地味な古文書が多いという状況でした。一地域と朝鮮通信使との個別的なかわりを歴史的に取り上げるには、資料的な制約が大きな課題として立ちはだかりました。今回の展示では、資料不足を補うために、1瀬戸川仮土橋の3分1再現模型、2天和2年8月の藤枝宿饗応料理サンプル復元、3通信使・三使の衣装マネキン展示等によって、平面的になりがちな展示を、立体的・視覚的に見せるように努めました。

朝鮮通信使関係資料というと、通信使一行の行列を描いた華やかな屏風・絵巻などの絵画資料が思い浮かびますが、藤枝には一行を迎え入れるための準備に関する古文書・絵図資料が残されているだけです。しかし一見見落としがちな地味な地方文書のなかには、迎える地元側の送迎準備の実態・内情が克明に書かれており、非常に興味深い情報源となります。朝鮮通信使の歴史のなかで、通信使を迎える日本側の送迎実態についてまだまだ未解明の部分が多いわけですが、今後は地方の古文書資料等から通信使送迎の実態にアプローチしていく方法が求められ、通信使をめぐる新たな歴史像が浮かびあがる可能性があると思いました。

静岡県では2002年日韓共催ワールドカップを契機として、静岡県を通った朝鮮通信使の歴史が広く紹介されるようになり、平成19年の静岡県朝鮮通信使400周年記念事業につながってきていますが、まだまだ一般の市民にとって朝鮮通信使はなじみが薄く、関心がそれほど高いとはいえない状況です。展示期間中の入館者数がやや低調であり、入館者の年代層が中高年層に偏っていたことがそれを示しています。しかし展示や解説を熱心に見学している入館者の姿をよく見かけましたし、江戸時代の朝鮮通信使に高い関心をもち、その史実を知ろうとしている人も確実にいます。今後、江戸時代の社会・文化に大きな影響を与えた朝鮮通信使に、関心をもつ人たちの裾野をさらに幅広く広げていくことが必要だと感じました。

今回の展示は「藤枝宿と朝鮮通信使」のタイトルどおり、郷土性を前面に出した地域限定版というべき内容でしたが、展示を通して、今まで漠然としたイメージの朝鮮通信使が藤枝と深いかわりをもったことが理解され、身近な存在として再認識された意義が大きいといえます。見学者からもそうした意見が多く聞かれました。展示期間中には、市内中学生が展示を見学して通信使の歴史説明を聞いたり、また藤枝&ソウル永西青年会議所の20周年記念交流会が館内で開催されたりと、朝鮮通信使を軸にした交流や啓蒙

が行われたことは大変有意義でした。

最後に展示会に資料協力いただきました「静岡に文化の風を」の会ははじめ、関係団体の皆様に厚く御礼申し上げます。

事例紹介 ―「クリエイティブメッセージ」の取り組み―

静岡アートギャラリー学芸員 森谷紗世

■はじめに

静岡アートギャラリーは静岡市立の美術館として平成 9 年にオープンして以来、「心豊かな生活を彩る美」をコンセプトに、展覧会実施をはじめ、様々な活動を行っている。特に教育普及活動においては、当館の独自性を示すものとして様々な試行を経て、平成 16 年に当館オリジナル造形プログラム「クリエイティブメッセージ」を立ち上げた。展覧会鑑賞を深めるための教育普及事業として毎年 1 回ずつ実施を重ね 4 回目を迎えた 19 年度、ようやくクリエイティブメッセージの「型」が見え始めようとしている。

本稿では、教育普及活動の具体例として、クリエイティブメッセージの構想と、19 年度の活動を紹介する。

■クリエイティブメッセージとは

クリエイティブメッセージは、展覧会で取り上げる作家或いはテーマから見出せる「クリエイティブ」な要素を独自の視点で抽出、それを基に開発する造形プログラムである。プログラム化には一貫したコンセプトがある。誰もが自分の力以上のものを出せる簡単かつ質の高い内容である事、年代や生活環境を問わず幅広い層に対応し得る事。そしてプログラムは、必ず「手法」に従って進められる。例えば紙を曲線と直線を組み合わせた一本の線でカットし、出来上がった形を見たてると、そんなルール＝「手法」が作業を素早く安易にし、時には思いもよらない発想を引き出すのである。“何を作ったか、ではなく何を得られたか”。クリエイティブメッセージの経験がものの考え方を深め、生活の様々な場面で活き、そして生きる上でのあらゆる「力」の蓄積に繋がる。言い過ぎてしまえば、そんな力をクリエイティブメッセージは持つと考えている。

■クリエイティブメッセージの型が出来るまで

このような構想を持って、講師にデザインや美術教育などに造詣が深い静岡大学教授杉山明博氏を据え、学生ボランティア(サポーター)を募って立ち上がったクリエイティブメッセージであるが、実施者の負担も鑑み、各対象者 1 回の実施に限られるのが実情であった。そんな中、より多くの人に広く普及するべく、18 年度、プログラム内容をまとめた

冊子「テキストブック / ワークブック」を作成するに至った。実施当日の使用はもちろん、終了後、個人或いは学校の授業

等で活用されるように、プログラム内容をまとめた教科書「テキストブック」、造形活動が出来るシート集「ワークブック」との対になっている。数 10 ページに及ぶこのテキスト / ワークブックは、美術系学生ら SAG プレサポーターのデザインによるもので、彼らの活動なくしては実現し得なかった。当館にとっては、限られた職員体制を補うための人員という側面はありつつも、学生らの感性が館にとって大きな力となり、また美術・デザインを学ぶ学生らにとっては、自身の修練の場、興味・関心を深める経験となっており、相互に成果が得られた。

かくして、19 年度は前年の新たな前進を踏まえ、試行体制であったサポーターを正式に SAG 事業サポーターとして導入することを決定。10 月の実施に向け、講師を中心に 3 者でクリエイティブメッセージの準備を進めていくこととなった。

■ 19 年度クリエイティブメッセージ：サポーター活動を中心に

19 年度クリエイティブメッセージ事業は、昭和を代表する作家重森三玲を紹介する「重森三玲の庭」展に併せて実施する事となった。伝統を踏まえながら独創的な作庭を残した重森三玲の思想や仕事に焦点を当てつつ、広く日本の伝統美である「庭」をテーマに、かつて自然と共に生きた日本人の自然観や美徳から、現代を生きる私達の生活を豊かにするヒントを探ることを目的とした。

4 月初旬、講師と実施内容についての検討を始め、平行してサポーターの募集を行った。対象を市内大学の美術系学生に絞り、各大学教授等を通じて募集要項を配布、約 1 ヶ月間の募集期間を経て、静岡大学 20 名常葉学園

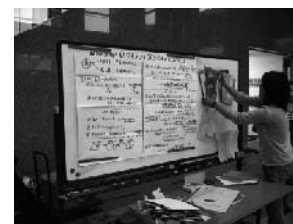


サポーター事前活動風景



18 年度テキスト / ワークブック

活動内容は、テキスト / ワークブックのデザイン作成を始め、当日の会場設営や、参加者に対する技術的サポート・声かけなどがある。クリエイティブメッセージの方向性は、講師との事前打合せの中で、重森三玲の仕事から見いだせるクリエイティブな要素 6 つにしばられ、2 回目以降のサポーター活動は講師の指揮のもと、この 6 つのテーマの研究・調査、さらにプログラム開発に取り組む事となった。各テーマ別に大学院生らサポーターリーダー 1 名を配置、残りのサポーターは各自興味あるテーマを担当するとした。その後 8 月から 9 月初旬にかけての計 4 回のグループ検討会で、プログラム内容の骨子が完成、続けてリーダーを中心にテキスト / ワークブックのデザイン制作・編集作業が進められた。事業実施前には当日を想定した



サポーターリーダーの活躍

リハーサルを実施、問題点を挙げ改善を行った。事業当日の大人・子ども・親子編の計 3 日間は、参加者 1～2 名に対し 1 名つく体制を取り、技術的なサポート、声掛けなどを行った。また、サポーターリーダーらは作業内容の全体説明を担当するなど、進行上の重要な役割を果たした。それ以外にも、サポーターの取りまとめを行うなど、彼らの自主性、活動にかける思いが、他のサポーターに影響を与え、この活動を支えたといっても過言ではない。

19 年度クリエイティブメッセージ事業での大きな成果は、何といっても SAG 事業サポーターの活躍であろう。前年の試行体制に比べ活動内容が充実し、共に負担は増えたものの、当館やサポーター間の交流が学年や学校を超えて密になり、結果としてサポーターの志気向上に繋がった。また、準備段階から携わる事で、クリエイティブメッセージに対する理解や思い入れが深まり、参加者に対するサポートも丁寧で熱心、手際のよいものとなった。参加者からの声からもその成果は窺える。何より、世代の垣根を超え、思いを共有できたことが、相互に印象的な出来事となった事は事実である。

■クリエイティブメッセージ事業の事後活動

さて、当館では事業終了後も、その事後活動にも力を注いでいる。当館の教育普及事業の一つに「アートとあそぼう」というアウトリーチ活動がある。



アートとあそぼう風景

テキスト / ワークブックを用い当館スタッフが造形活動を指導するもので、これまで公民館や PTA 活動からの依頼があったが、最近では学校の授業で採り上げられる事が増えている。一度に 1 学年 60 名程度を対象とする依頼が多く、担当教員に事前レクチャーを行い、当日は当館スタッフ 3～4 名と共に指導していく体制を取っている。口コミなどで他校からの希望も増え、非常にやりがいを感じるものの負担は少なくない。ゆくゆくは事後活動においても、サポーターを派遣するなどの体制を整える必要があるだろう。

その他にも、教員による指導で作品制作が行われた例や、一般・美術系の職業に携わる方から、それぞれの活動に活かされたとの嬉しい声を聞くことがある。19 年度も実際に造園に携わる方などから制作のヒントとなった、思わぬひらめきが得られたなど、様々な意見を頂くことができた。また子ども達においては、少しずつではあるがリピーターが増えており、毎年の成長が見られるのも楽しみの一つとなっている。

■最後に

19 年度で 4 回目を迎え、ようやく一連の流れが出来たクリエイティブメッセージは、講師や SAG 事業サポーターとの連携なしでは決して成し得ない活動であるが、連携体制を取っているからこそ、その可能性は多大であると考えている。今後 SAG 事業サポーターの対象範囲を広げる事を検討しており、例えば以前美術に携わっていた主婦層などの協力が得られれば、より地域に根付いた活動となっていくだろう。また、事業に参加した子ども達が成長し、いつかサポーターとして還ってくる。そんな将来も夢ではないかもしれない。

地域に根ざしたよりよい美術館活動を目指し、限られた職員体制の中で日々活動を続け、早や 10 年が経とうとしている。試行錯誤を繰り返しながらも、伝えたい事に真摯に向き合い、オリジナルな事業を地道に展開してきた。クリエイティブメッセージもその一つで、少しずつではあるが成果は顕れようとしている。この 10 年間の様々な出会いの中で当館が培った“生きる力”を糧に、他機関や地域との連携を深めさらなる発展を目指していきたいと思う。



クリエイティブメッセージ風景

静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程

1 投稿を受け付ける原稿

(1) 内容規定

加盟館園職員が従事している職務（展示・調査研究・保存、教育普及・その他）に関する論文、報告、事例紹介、収蔵品紹介等
※専門分野に関するものに限られません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

(2) 執筆者規定

加盟館園職員一人もしくは複数人の執筆によるものとします。複数人による場合、全執筆者の1/3が加盟館園職員であることを条件とします。

2 入稿規定

(1)

日本語による原稿を基本とします。

(2)

デジタルデータと印字原稿、必要なら図版（ポジ、印画紙写真、デジタルデータ、図面等）等を併せて提出して下さい。
デジタルデータはOSを問いませんが、必ずテキストデータを添付して下さい。図版のデジタルデータはJPEGに統一して下さい。
※万一の場合に備え、原稿提出の際には必ず手元に控えを残しておいて下さい。

(3) 分量

ページ数目安（1ページ当たり）				事例報告等（1～4ページ分程度）				事例報告等（1/2ページ分）			
論文	縦書き	写真無しの場合	2,000字	縦書き	写真無しの場合	2,000字	縦書き	写真無しの場合	1,100字	縦書き	写真無しの場合
		写真有りの場合	1,600字								
	横書き	写真無しの場合	2,000字	横書き	写真無しの場合	2,000字	横書き	写真無しの場合	1,100字	横書き	写真無しの場合
		写真有りの場合	1,600字								

(4) 文字原稿（印字原稿は次の書式でご提出下さい）

字数（シート） A4版 40字×30行
※誌面レイアウト・フォーマットに揃えた入稿も歓迎します。レイアウト見本をご希望の方は、事務局にお問い合わせ下さい。

(5) 図版原稿（1ページの版面はA4）

カラー（巻頭図版） 掲載希望があればご相談下さい。
モノクロ すべて挿図として扱います。

- a カラー図版原稿には、目次用のデータを明示して下さい。
- b 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。デジタルデータの場合は、データ名に明示して下さい。
- c 挿図原稿のコピーもしくは印刷された挿図原稿に、掲載希望範囲を、製版作業の支障にならないよう、明示して下さい。
- d レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
- e 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

(6) 図版の著作権申請

写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、執筆者が行なって下さい。

(7) 執筆者の表示

原稿には氏名・自宅住所および所属機関所在地（それぞれ〒、Tel、Fax番号）・部署・役職を明記して下さい。氏名には読み仮名をふって下さい。
成果品である紀要には、氏名と所属のみ記載します。

3. 原稿の送付先

原稿は、下記宛にお送りいただくか、ご持参下さい。

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田53-2 静岡県立美術館内
静岡県博物館協会事務局
Tel.054-263-5857
Fax.054-263-5742

4. 日程および申込・校正手順

(1) 日程

申込締切 平成20年11月末日
入稿締切 平成21年1月末日
発行予定 平成21年3月末日

(2) 申込方法

申込締切までに、下記項目を静岡県博物館協会事務局宛にご連絡下さい。

- ・執筆者 （複数執筆者の場合は、全員の氏名と所属を明記）
- ・題名 （仮題で可）
- ・分量見込 （レイアウト見本による全ページ数で表示。図版、表等の希望も含む。）
- ・縦書き、横書きの希望
※分量は、1本の論文当たり15ページ以内を基本とします。

(3) 申込の確認

静岡県博物館協会事務局は、申込締切後2週間以内に、執筆者申込時の分量見込みに基づいて紀要製作の見積もりを行ないます。予算上製作が可能であれば、全申込者に申込通りの分量での執筆が可能である旨を連絡します。予算上不可能な場合は、申込者に対して分量についてのご相談を行ない、ご執筆いただく分量上限を決定します。

(4)

入稿は、上述2の「入稿規定」に従って、上述3の「原稿の送付先」に送付するか、ご持参下さい。4～3で示した事情により、実際に入稿した原稿が分量見込より増えた場合、執筆者に分量を減らしていただくか、当該号での掲載を取りやめることがあります。

(5) 校正

入稿締切までに入稿された場合、執筆者は文字校正2回、図版校正2回を行なうことが出来ます。入稿締切が守られなかった場合は、この限りではありません。

(6) レイアウト

レイアウトはフォーマットに基づき、執筆者の希望を尊重して行ないますが、最終的には静岡県博物館協会事務局が決定します。

5. その他

(1) 文責

原稿の内容についての文責は、全て執筆者にあるものとします。著作権や誤植、不適切な表記等の問題について静岡県博物館協会及び静岡県博物館協会事務局は、一切の責任を負いません。

(2) 執筆者への成果品割当

執筆者には、30部を贈呈します。複数執筆者の場合、全員分を合わせて90部を上限として贈呈することが出来ます。

(3) 抜き刷りの作成

執筆者から希望のある場合、実費をご負担いただくことで、執筆箇所の抜き刷りを作成します。静岡県博物館協会事務局にご相談下さい。